

## 基本計画書

基本計画									
事項	記入欄						備考		
計画の区分	学部の学科の設置								
フリガナ設置者	ガクインケン キンジョウガクイン 学校法人 金城学院								
フリガナ大学の名称	キンジョウガクインガク 金城学院大学 (Kinjo Gakuin University)								
大学本部の位置	愛知県名古屋守山区大森二丁目1723番地								
大学の目的	本学は、福音主義のキリスト教に基づき、学校教育法にのっとり、女性に広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、もって真理と正義を愛し、世界の平和と人類の福祉に貢献する人物を養成することを目的とする。								
新設学部等の目的	演奏活動を通して鍛えた豊かな感性、芸術作品と芸術活動への理解に基づく洞察力、自己を律する強い精神力を活かし、音楽分野をはじめ社会の様々な分野で活躍しうる人材を育成する。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	文学部 (College of Humanities) 音楽芸術学科 (Department of Music Art) 計	4年	45人	3年次 0人	180人	学士 (音楽芸術)	平成25年4月 第1年次	愛知県名古屋守山区 大森二丁目1723番地	
同一設置者内における変更に (定員の移行、名称の変更等)	(廃止) 人間科学部 芸術・芸術療法学科(△50) (3年次編入学定員(△5)) ※平成25年4月学生募集停止 (3年次編入学定員は平成27年4月学生募集停止)  (定員変更) 大学全体 入学定員1140名(△5)、編入学定員25名(△5)、収容定員4910名(△30) ※平成25年4月入学定員変更(編入学定員は平成26年4月変更)								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	文学部音楽芸術学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
	新設分	文学部 音楽芸術学科	教授 人	准教授 人	講師 人	助教 人	計 人	助手 人	兼任 人
		計	5 (5)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	142 (107)
教員組織の概要	既設分	文学部	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
		日本語日本文化学科	4 (4)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	145 (145)
		英語英米文化学科	9 (9)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	126 (126)
		外国語コミュニケーション学科	7 (7)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	130 (130)
		生活環境学部	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
		生活マネジメント学科	7 (7)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	136 (136)
		環境デザイン学科	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	166 (166)
		食環境栄養学科	6 (6)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	157 (157)
		国際情報学部 国際情報学科	9 (9)	8 (8)	4 (4)	0 (0)	21 (21)	0 (0)	134 (115)

教員組織の概要	既設分	人間科学部	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
		現代子ども学科	10 (10)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	159 (159)
		多元心理学科	4 (4)	7 (7)	3 (3)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	176 (146)
		コミュニティ福祉学科	7 (7)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	140 (137)
		薬学部 薬学科	19 (19)	11 (11)	2 (2)	0 (0)	32 (32)	0 (0)	141 (141)
		キリスト教文化研究所	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
		言語センター	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)
		計	92 (92)	44 (44)	24 (24)	0 (0)	160 (160)	0 (0)	555 (531)
合計	97 (97)	46 (46)	25 (25)	0 (0)	168 (168)	0 (0)	590 (558)		
教員以外の職員の概要	職 種	専 任	兼 任	計					
	事務職員	85 (85)	31 (31)	116 (116)	人				
	技術職員	6 (6)	5 (5)	11 (11)					
	図書館専門職員	5 (5)	0 (0)	5 (5)					
	その他の職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	計	96 (96)	36 (36)	132 (132)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計				
	校舎敷地	180,593 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	180,593 m <sup>2</sup>				
	運動場用地	27,166 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	27,166 m <sup>2</sup>				
	小 計	207,759 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	207,759 m <sup>2</sup>				
	そ の 他	57,002 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	57,002 m <sup>2</sup>				
	合 計	264,761 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	264,761 m <sup>2</sup>				
校 舎	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計					
	73,818 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	73,818 m <sup>2</sup>					
	( 73,818 m <sup>2</sup> )	( 0 m <sup>2</sup> )	( 0 m <sup>2</sup> )	( 73,818 m <sup>2</sup> )					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設				
	68 室	70 室	94 室	13 室 (補助職員6人)	5 室 (補助職員3人)				
専任教員研究室	新設学部等の名称			室 数					
	文学部 音楽芸術学科			8 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	電子ジャーナルは 大学全体での共用 分を含む	
	文学部 音楽芸術学科	12,000 [4,100] (11,548 [3,994])	150 [45] (140 [40])	1,800 [1,250] (1,695 [1,101])	1,200 (1,100)	0 0	0 ( 0 )		
	計	12,000 [4,100] (11,548 [3,994])	150 [45] (140 [40])	1,800 [1,250] (1,695 [1,101])	1,200 (1,100)	0 0	0 ( 0 )		
図書館	面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数					
	6,194 m <sup>2</sup>	566		500,000					
体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
	5,706 m <sup>2</sup>	全天候型テニスコート7面、ゴルフ練習場17打席、 バレーボールコート4面、運動場（グラウンド）2,914m <sup>2</sup>							

経費の見積り の維持方法の概要	区分				開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	大学全体 大学全体 大学全体
	教員1人当り研究費等(非実験系)					312千円	312千円	312千円	312千円	
	共同研究費等					25,080千円	25,080千円	25,080千円	25,080千円	
	図書購入費				46,400千円	46,400千円	46,400千円	46,400千円	46,400千円	
	設備購入費				60,000千円	60,000千円	60,000千円	60,000千円	60,000千円	
学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	1,820千円	1,620千円	1,620千円	1,620千円	千円	千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、資産運用収入等							
大学の名称	金城学院大学									
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
文学部	年	人	年次人	人		倍		愛知県名古屋 市守山区大森 二丁目172 3番地		
日本語日文化学科	4	70	—	280	学士(日本語 日文化学)	1.15 1.21	昭和29年度			
英語英米文化学科	4	90	—	360	学士(英語英 米文化学)	1.13	昭和24年度			
外国語コミュニケーション学科	4	80	—	320	学士(外国語 コミュニケーション学)	1.14	平成9年度			
生活環境学部						1.12			H22年度に生活環境学部生活環境情報学科から生活環境学部生活マネジメント学科に名称変更。	
生活マネジメント学科	4	70	—	280	学士(生活環境学)	1.15	平成4年度			
環境デザイン学科	4	80	—	320	学士(生活環境学)	1.16	平成14年度			
食環境栄養学科	4	80	—	320	学士(生活環境学)	1.06	平成14年度			
国際情報学部 国際情報学科	4	170	10	170	学士(薬学)	1.16	平成24年度			
現代文化学部 国際社会学科	4				学士(国際社会学)		平成9年度		平成24年度より学生募集停止	
情報文化学科	4				学士(情報文化学)		平成9年度		平成24年度より学生募集停止	
コミュニティ福祉学科	4				学士(福祉社会学)		平成9年度		平成24年度より学生募集停止	
人間科学部 現代子ども学科	4	120	5	490	学士(人間科学)	1.17 1.20	平成14年度			
多元心理学科	4	110	5	220	学士(人間科学)	1.12	平成23年度			
心理学科社会心理学専攻	4				学士(人間科学)		平成14年度		平成23年度より学生募集停止	
心理学科臨床心理学専攻	4				学士(人間科学)		平成14年度		平成23年度より学生募集停止	
芸術・芸術療法学科	4	50	5	210	学士(人間科学)	1.11	平成14年度			
コミュニティ福祉学科	4	75	5	75	学士(コミュニティ福祉学)	1.10	平成24年度			



別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要														
(文学部音楽芸術学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
共通教育科目	I 建学の精神を学ぶ科目 ①キリスト教	キリスト教学(1)	1前	2			○							兼1
		キリスト教学(2)	1後	2			○							兼1
		芸術とキリスト教	1・2・3・4 前後		2			○						兼4
		現代とキリスト教	1・2・3・4後		2			○						兼8
		いのち・福祉とキリスト教	1・2・3・4前		2			○						兼1
		キリスト教精神と医療	1・2・3・4前		2			○						兼1
		文学とキリスト教	1・2・3・4 前後		2			○						兼4
		人間の尊厳とキリスト教	1・2・3・4後		2			○						兼4
		聖書の中の女性	1・2・3・4 前後		2			○						兼2
		②女性	歴史の中の女性	1・2・3・4 前後		2			○					
	世界の女性		1・2・3・4 前後		2			○						兼1
	いのち・福祉と女性		1・2・3・4前		2			○						兼1
	女性と文学		1・2・3・4 前後		2			○						兼1
	性差の科学		1・2・3・4後		2			○						兼1
	男女共同参画社会		1・2・3・4 前後		2			○						兼1
	③国際理解	国際問題	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		国際関係	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		グローバル・スタディーズ	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		異文化コミュニケーション	1・2・3・4 前後		2			○						兼2
		アジアの中の日本	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		世界の医療事情	1・2・3・4前		2			○						兼1
	多文化共生社会	1・2・3・4後		2			○						兼1	
	小計(22科目)	-	4	40	0		-		0	0	0	0	0	兼27
II 現代社会の教養の基礎となる科目	④教養基礎科目	哲学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		倫理学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		文化論	1・2・3・4 前後		2			○						兼2
		文学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		歴史学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		日本語学	1・2・3・4前		2			○						兼1
		心理学	1・2・3・4 前後		2			○						兼2
		文化人類学	1・2・3・4前		2			○						兼1
		地理学	1・2・3・4後		2			○						兼1
		法学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		日本国憲法	1・2・3・4 前後		2			○						兼2
		経済学	1・2・3・4 前後		2			○						兼2
		経営学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		社会学	1・2・3・4 前後		2			○						兼2
		政治学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		数学	1・2・3・4前		2			○						兼1
		統計学	1・2・3・4後		2			○						兼1
		情報学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		生物学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		薬学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		環境学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		健康科学	1・2・3・4前		2			○						兼2
		生命科学	1・2・3・4 前後		2			○						兼1
		芸術論	1・2・3・4 前後		2			○			1			
	小計(24科目)	-	0	48	0		-		1	0	0	0	0	兼29





科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
共通教育科目	IV 現代社会に必要なリテラシーを身につける科目	⑦ 外国語教育科目	中国語会話 (1)	1前		1			○							兼4	
			中国語会話 (2)	1後		1			○							兼4	
			中国語会話 (3)	2前		1			○							兼3	
			中国語会話 (4)	2後		1			○							兼3	
			韓国・朝鮮語 (1)	1前		1			○							兼4	
			韓国・朝鮮語 (2)	1後		1			○							兼4	
			韓国・朝鮮語 (3)	2前		1			○							兼3	
			韓国・朝鮮語 (4)	2後		1			○							兼3	
			韓国・朝鮮語会話 (1)	1前		1			○							兼4	
			韓国・朝鮮語会話 (2)	1後		1			○							兼4	
			韓国・朝鮮語会話 (3)	2前		1			○							兼3	
			韓国・朝鮮語会話 (4)	2後		1			○							兼3	
			⑧ 情報教育科目	情報リテラシー	1前		2				○						
	IT活用A	1・2・3・4 前後			2				○							兼2	
	IT活用B	1・2・3・4 前後			2				○							兼2	
	IT活用C	1・2・3・4 前後			2				○							兼1	
	IT活用D	1・2・3・4 前後			2				○							兼1	
	IT活用E	1・2・3・4後			2				○							兼1	
	IT活用F	1・2・3・4前			2				○							兼1	
	IT活用G	1・2・3・4後			2				○							兼1	
	⑨ キャリア開発教育科目	キャリア開発 A	1前	2					○							兼1	
		キャリア開発 B	1後	1					○							兼1	
		キャリア開発 C	2前		2				○							兼1	
		キャリア開発 D	2後		2				○							兼1	
		キャリア開発 E	3前		2				○							兼1	
		キャリア開発 F	3後		2				○							兼1	
		キャリア開発 G (1)	2後		2				○							兼1	
		キャリア開発 G (2)	3通		2				○							兼1	
	小計 (68科目)	-	11	72	0			-		0	0	0	0	0	0	兼56	
	V スポーツを通じた健康増進を図る科目	⑩ S & E 教育科目	スポーツ・アンド・エクササイズA	1・2 前後		1				○							兼3
			スポーツ・アンド・エクササイズB	1・2 前後		1				○							兼3
			スポーツ・アンド・エクササイズC	1・2 前後		1				○							兼3
スポーツ・アンド・エクササイズD			1・2 前後		1				○							兼3	
スポーツ・アンド・エクササイズE			1・2 前後		1				○							兼3	
スポーツ・アンド・エクササイズF			1・2 前後		1				○							兼3	
スポーツ・アンド・エクササイズG			1・2・3・4 前後		1				○							兼1	
スポーツ・アンド・エクササイズH			3・4 前後		1				○							兼1	
小計 (8科目)	-	0	8	0			-		0	0	0	0	0	0	兼13		
VI アクティブ・ラーニング科目	⑪ プロジェクト科目	海外研修A	2・3・4 前後		2				○							兼1	
		海外研修B	2・3・4 前後		2				○							兼2	
		海外研修C	2・3・4 前後		2				○							兼1	
		海外研修D	2・3・4 前後		2				○							兼1	
		海外研修E	2・3・4 前後		2				○							兼2	
		異文化体験	1・2・3・4 前後		2				○							兼2	
		ボランティア活動	1・2・3・4 前後		2				○							兼1	
		学生プロジェクト	1・2・3・4 前後		2				○							兼2	
小計 (8科目)	-	0	16	0			-		0	0	0	0	0	0	兼7		

科目区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態		専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教		助手			
共通教育科目	⑫ 単位認定科目	外国語検定（英語コミュニケーションA）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（英語コミュニケーションB）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（英語コミュニケーションC）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（英語コミュニケーションD）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（ドイツ語1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（ドイツ語3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（ドイツ語会話1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（ドイツ語会話3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（フランス語1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（フランス語3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（フランス語会話1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（フランス語会話3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（スペイン語1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（スペイン語3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（スペイン語会話1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（スペイン語会話3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（中国語1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（中国語3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（中国語会話1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（中国語会話3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（韓国・朝鮮語1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（韓国・朝鮮語3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（韓国・朝鮮語会話1、2）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
		外国語検定（韓国・朝鮮語会話3、4）	1・2・3・4 前後	2				○								兼1	
小計（24科目）				0	48	0		—		0	0	0	0	0	0	兼1	
日本語及び日本事情に関する科目	日本語科目	日本語201	1・2後	5				○								兼5	
		日本語202	1・2後	5				○								兼5	
		日本語300	1・2前	2				○								兼4	
		日本語301	1・2後	2				○								兼4	
		日本語400	1・2前	2				○								兼4	
		日本語401	1・2後	2				○								兼2	
	日本事情に関する科目	日本事情A	1・2前	2				○								兼1	
		日本事情B	1・2後	2				○								兼1	
		日本事情C	1・2前	2				○								兼1	
		日本事情D	1・2後	2				○								兼1	
		現代日本社会A	1・2前	2				○								兼1	
		現代日本社会B	1・2後	2				○								兼1	
		インディペンデント・スタディ	1・2 前後	2						○						兼2	
小計（13科目）				0	32	0		—		0	0	0	0	0	0	兼11	
専門教育科目	基礎科目	芸術学	2前	2				○			1						
		ソルフェージュ	1後	2					○		1					兼1	
		音楽理論	1前	2				○			1					兼1	
		西洋音楽史A	2前	2				○								兼1	
		西洋音楽史B	2後	2				○								兼1	
		小計（5科目）				—	10	0	0	—		2	0	0	0	0	0
	基幹科目	ピアノ奏法（1）	1前	2					○		2		1				兼8
		ピアノ奏法（2）	1後	2					○		2		1				兼8
		ピアノ奏法（3）	2前	2					○		2		1				兼8
		ピアノ奏法（4）	2後	2					○		2		1				兼8
		ピアノ奏法（5）	3前	2					○		2		1				兼8
		ピアノ奏法（6）	3後	2					○		2		1				兼8
		ピアノ奏法（7）	4前	2					○		2		1				兼8
ピアノ奏法（8）		4後	2					○		2		1				兼8	
												ピアノコース12 単位必修					

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数		授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教		助手	
専門教育科目	基幹科目	声楽（1）	1前	2				○		1				兼6	声楽コース12単位必修
		声楽（2）	1後	2				○		1				兼6	
		声楽（3）	2前	2				○		1				兼6	
		声楽（4）	2後	2				○		1				兼6	
		声楽（5）	3前	2				○		1				兼6	
		声楽（6）	3後	2				○		1				兼6	
		声楽（7）	4前	2				○		1				兼6	
		声楽（8）	4後	2				○		1				兼6	
		管楽器奏法（1）	1前	2				○		1				兼7	管楽器コース12単位必修
		管楽器奏法（2）	1後	2				○		1				兼7	
		管楽器奏法（3）	2前	2				○		1				兼7	
		管楽器奏法（4）	2後	2				○		1				兼7	
		管楽器奏法（5）	3前	2				○		1				兼7	
		管楽器奏法（6）	3後	2				○		1				兼7	
		管楽器奏法（7）	4前	2				○		1				兼7	
		管楽器奏法（8）	4後	2				○		1				兼7	
		小計（24科目）	—	0	48	0	—	—	—	2	2	1	0	0	兼21
		演習科目	音楽芸術学演習（1）	3前	1				○		2				
音楽芸術学演習（2）	3後		1				○		2						
音楽芸術学演習（3）	4前		1				○		2						
音楽芸術学演習（4）	4後		1				○		1	1					
卒業演奏・卒業作品・卒業論文	4通			6			○		4	2	1				
小計（5科目）	—	4	6	0	—	—	—	4	2	1	0	0			
展開科目	A群（音楽理論／音楽実技）	和声	2前	2				○						兼1	
		即興演奏A	1前	2				○		1					
		即興演奏B	1後	2				○		1					
		編曲法（1）	2前	2				○						兼1	
		編曲法（2）	2後	2				○						兼1	
		作曲学	3前	2				○		1					
		指揮法A	2前	2				○		1					
		指揮法B	3後	2				○		1					
		合唱	1前	2				○						兼1	
		合唱指導法	2後	2				○						兼1	
		ピアノ音楽史	3前	2			○				1				ピアノコース必修
		吹奏楽指導法	3後	2				○						兼1	管楽器コース必修
		副科ピアノ奏法A	1前	1				○						兼4	声楽・管楽器コース必修
		副科ピアノ奏法B	1後	1				○						兼4	声楽・管楽器コース必修
		副科声楽	1後	1				○			1			兼2	ピアノ・管楽器コース必修
		副科管楽器	2前	1				○						兼1	
		ピアノアンサンブルA	2前	2				○						兼1	
		ピアノアンサンブルB	2後	2				○						兼1	
		室内アンサンブルA	3・4前	2				○		1				兼1	
		室内アンサンブルB	3・4後	2				○		1				兼1	
		声楽アンサンブルA	2前	2				○		1					
		声楽アンサンブルB	2後	2				○		1					
		声楽アンサンブルC	3前	2				○		1					
		声楽アンサンブルD	3後	2				○		1					
		管楽アンサンブルA	2前	2				○		1					
		管楽アンサンブルB	2後	2				○		1					
		管楽アンサンブルC	3前	2				○		1					
管楽アンサンブルD	3後	2				○		1							
邦楽A	3前	1				○							兼1	集中	
邦楽B	3前	1				○							兼1	集中	
発音法	1前	2				○							兼1	声楽コース必修	



科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目 展開科目 C群(教養)	博物館展示論	2後		2		○									兼1
	博物館情報・メディア論	3後		2		○									兼1
	博物館教育論	3後		2		○									兼1
	英語による日本文化	2前		2		○									兼1
	中国語文化入門	1前		2		○									兼1
	Cross-Cultural Communication	2前		2		○									兼1
	日本の多文化事情	3前		2		○									兼1
	世界と日本のクラシック	2後		2		○									兼1
	日本語教育入門	1後		2		○									兼1
	日本語教育法A(1)	2前		2		○									兼1
	日本語教育法A(2)	2後		2		○									兼1
	日本語教育法B(1)	3前		2		○									兼1
	日本語教育法B(2)	3後		2		○									兼1
	日本語教育法C	4前		2		○									兼1
小計(99科目)		—	0	181	0	—			5	2	1	0	0	兼45	
教職に関する科目	教職入門	1・2・3・4後		2		○									兼2
	学校と教育の歴史	1・2・3・4前		2		○									兼1
	教育制度論	1前		2		○									兼1
	障害者教育論	3前		2		○									兼1
	教育課程論	3前		2		○									兼1
	音楽科教育指導法A	2通		4		○									兼1
	音楽科教育指導法B	2・3後		2		○									兼1
	音楽科教育指導法C	2・3後		2		○									兼1
	道德教育の理論と方法	3後		2		○									兼1
	特別活動の指導法	3後		2		○									兼1
	教育方法の理論と実践	2後		2		○									兼1
	教育の方法と技術(情報機器及び教材の活用を含む)	2後		2		○									兼1
	生徒指導の理論と方法	3後		2		○									兼1
	教育相談	1後		2		○									兼2
	教育実習A	3通		3				○							兼1
	教育実習B	4通		3				○							兼1
教育実習C	4通		5				○							兼1	
教職実践演習(中高)	4通		2				○							兼1	
小計(18科目)		—	0	43	0	—			0	0	0	0	0	兼13	
合計(376科目)			—	29	658	0	—		5	2	1	0	0	兼230	
学位又は称号		学士(音楽芸術)		学位又は学科の分野				音楽、文学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
【卒業要件】 共通教育科目28単位、専門教育科目70単位とし 自由履修26単位とあわせ124単位							1学年の学期区分		2学期						
							1学期の授業期間		15週						
							1時限の授業時間		90分						
【専門教育科目の履修方法】															
1) 音楽芸術学科に、ピアノコース・声楽コース・管楽器コースを置き、それぞれにコース必修科目を置く。															
2) 専門教育科目は、基礎科目、基幹科目、演習科目、展開科目A群(音楽理論・音楽実技)、展開科目B群(文化・鑑賞)、展開科目C群(教養)からなる。															
3) 専門教育科目の卒業要件は、次に示す科目区分ごとの条件を満たし、70単位以上の修得とする。															
① 基礎科目 10単位(いずれも必修科目)															
② 基幹科目 12単位(いずれもコース必修科目)															
③ 演習科目 4単位(いずれも必修科目)															
④ 展開科目 40単位(選択必修科目とコース必修科目の修得、展開科目A群から10単位以上修得、展開科目B群から10単位以上修得を条件とする)															

授 業 科 目 の 概 要			
(文学部音楽芸術学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目 I 建学の精神を学ぶ科目（金城アイデンティティ科目）	①キリスト教 キリスト教学(1)	キリスト教と聖書は、西洋世界の歴史と文化の基層であると同時に、宗教的存在としての人間の本質を明らかにする。それ故、キリスト教と聖書についての研究は、西洋文明と人間に関する深い理解を可能にする。本講義の目的は、聖書に現れているいろいろの主題やキリスト教の主要教理、キリスト教の歴史、現代におけるキリスト教の意義などについて研究することによって、キリスト教の真理を概括的に理解し、国際化されている今日、教養人としての基本的な素養を備えるようにすることである。	
	キリスト教学(2)	キリスト教は、古代から現代に至るまで、人間の多様な思想と文化に出会いながら人類に救いの道を開いてきた。「言は肉体になり、わたしたちのうちに宿った」(ヨハネによる福音書1・14)という告白は、このような事実を意味する。本講義は、前期に続いて、キリスト教の永遠の真理を理解しようとした様々な試みを研究する。すなわち、キリスト教の真理が教会の内外で、あるいは哲学、文学、芸術などの文化現象の中で、どのように具体化されたのかという問いに答えるのが、本講義の目的である。	
	芸術とキリスト教	(前期：美術) 西洋美術を通じてキリスト教を理解しキリスト教に親しみを持つ。同時に、キリスト教を知ることによって美術作品をより深く理解する。(オムニバス方式/全15回) (5 山脇一夫/8回) 前半は、初期キリスト教から中世、ルネサンス、バロックに至るまでのキリスト教美術の歴史を建築、彫刻、絵画によって主に様式の変遷をとおしてたどる。後半は、「絵で読む聖書」と題して、美術作品を通じて聖書の物語を理解する。 (26 柴田道子/3回) ヨーロッパの時代・地域によるマリア像の変遷をたどる。 (29 楚輪松人/4回) ウフィツィ、ロンドン・ナショナルギャラリー、ルーヴル、プラドのヨーロッパを代表する4つの美術館に所蔵されるキリスト教の名画を通じて、聖書の教えを読み解く。  (後期：音楽) 賛美歌を通じて、キリスト教を理解し、キリスト教に親しみを持つ。同時に、キリスト教を知ることによって、西洋音楽をより深く理解する。今日も世界のどこかで歌われている賛美歌のスタンダード・ナンバーのなかから、名曲を厳選し、メロディー、ハーモニー、リズム、歌詞の意味などを理解した上で、実際に歌ってみる。授業は、二人の教員によるコーディネート方式で、賛美歌という音楽ジャンルを多面的に捉えることを目的とする。他に例を見ない非常にオリジナルな金城ならではの授業となる。女性の賛美歌作者の作品にも注目していく。	オムニバス方式
	現代とキリスト教	キリスト教と関わる思想・思考や世界の様々なキリスト教徒の暮らし方などを学び、現代社会をキリスト教の観点から問い直す。(オムニバス方式/全15回) (18 太田正登/5回) 神社への初詣、教会での結婚式、寺院での葬式と1人の日本人がなぜいくつもの宗教と関わる事ができるのか。あるいは無宗教でいられるのか。民族性との関わりから、日本人の宗教観について検討する。 (23 櫻井のり子/5回) 「電気を使わない」「車に乗らない」— 現代アメリカにあって特異な生活スタイルで知られるアーミッシュはキリスト教プロテスタントの一派である。このような例を初めとし、世界各地のキリスト教徒の信仰のアイデンティティとそれに基づく日常の暮らし方を学ぶ。 (18 太田正登/5回) キリスト教と近現代の思想との関係を考える。例として、マックス・ウェーバーの著作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を紹介し、カルヴァン派、Calling、原始的蓄積など社会科学特有の概念・思考とキリスト教の関わりを考察する。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	いのち・福祉とキリスト教	なぜ「いのち・福祉とキリスト教」について学ぶのか。それは、キリスト教の日本における受容の際に、知識に加えてキリスト教の福祉実践も重要な役割を果たしたからである。この講義では、①「いのちとキリスト教」をどのようにとらえるか(生物学的背景とキリスト教的な生命観、ハンセン病者の支援等)、②クリスチャン・ソーシャルワーカーの足跡、③現代的な課題に応える(ホームレスや派遣切りにあった人、外国人労働者等への支援等)について、現場で実践されている方たちを講師としてお招きし、キリスト教の価値観や視点を学ぶ。	
	キリスト教精神と医療	イエスキリストは、難病や生まれつきの病いを負った人たちに寄り添い、時にはその御手で癒された。現代においても、イエスキリストの憐みの精神を受け次いで、難病患者の救済に生涯を捧げた多くの医療従事者がいる。本授業では、新約聖書時代の病気のとらえ方、治療法、死生観を学ぶ。また、近代において、難病を治療することや難病患者と寄り添うことに捧げた医療従事者たちのキリスト教精神について学ぶ。	
	文学とキリスト教	<p>本授業のねらいは、さまざまな文学者の感性や知性をとおしてキリスト教に触れること、および、言葉による作品すなわち「文学」としての聖書のありかたを知ることによって、教養としてのキリスト教への理解を深めることにある。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(69 北原ルミ/6回)</p> <p>キリスト教文化圏としての長い伝統を持つ欧米の文学において、聖書の登場人物、挿話、言葉を、個々の作家がいかに関心し、作品に取り込んだのかを紹介し、その意味を探る。</p> <p>(24 柴崎隆/3回)</p> <p>ヨーロッパにおける宗教改革と、聖書の俗語訳の普及とは切り離せない。聖書のドイツ語等の翻訳を紹介し、聖書の言葉の翻訳にからむ文化的問題を考える。</p> <p>(22 小室尚子/3回)</p> <p>日本で聖書が読まれるようになった明治期、聖書の言葉はどのような日本語に訳されたのか。新しい概念と日本の文化との葛藤について考える。</p> <p>(29 楚輪松人/3回)</p> <p>キリスト教文化圏としての長い伝統を持つ欧米の文学において、聖書の登場人物、挿話、言葉を、個々の作家がいかに関心し、作品に取り込んだのかを紹介し、その意味を探る</p>	オムニバス方式
	人間の尊厳とキリスト教	<p>キリスト教の人間観は、人間が神によって創造され、また愛される存在であるととめられる。そのような人間理解から、人間は一人ひとりかけがえのない貴重な存在であり、神から天賦の尊厳性を与えられたという「人間の尊厳」(human dignity)という概念が生じる。しかしながら、人間の尊厳性は、決して当たり前のもので守られていないのが現実でもある。現代の社会においては、精神的にも、また物質的にも、数多くの社会的弱者を量産しており、人間の尊厳性が失われてしまう危機にさらされている。本講義は、「人間の尊厳」について様々な分野から研究することによって、尊厳性を保つ人間の本質について考えることを目的とする。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(47 深井智朗/6回)</p> <p>「人間の尊厳」を思想的枠組みにおいてとらえる</p> <p>(67 上村千尋/3回)</p> <p>子どもの尊厳</p> <p>(65 大山小夜/4回)</p> <p>経済的弱者の尊厳</p>	オムニバス方式
	聖書の中の女性	『聖書』には、紀元前950年ころから紀元100年にかけて書かれた66の文書が収録されている。言うまでもなく女性観は、旧・新約を通して多様である。それは約千年にわたる聖書執筆の歴史的背景を反映しているからであるが、各時代の社会的影響を受けていながら、それでも聖書全体の間には一貫した女性観があることに気付かされる。本授業は、旧・新約聖書それぞれの女性観を読み解くとともに、聖書の根底を流れる女性理解を探ることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
② 女性	歴史の中の女性	女性が政治・経済的な公共領域に出現したのは、20世紀になってからである。権利を持つこと、自由に発言できることといった行為が、認められていなかった現実のなかでどのように女性解放思想が進化したのか。本講義では欧米に端を発したリベラリズム（自由主義）から女性たちの権利がどのように発展したのか、また日本の参政権運動、社会運動の流れを韓国との対比から見てゆく。また、近年第三世界の女性たちやイスラム文化地域の女性たちから考える〈人権〉の在り方が、欧米リベラリズムの議論に対してどのような立場になってくるのか議論し、トランスナショナル（越境的）・フェミニズムの行方を考える。	
	世界の女性	本講義では、戦後設立された国際連合がどのように世界の女性の問題に取り組んできたかをまず概観する。そして今現在、世界の女性たちが、どのような問題に直面しているのかを学び、解決の方法を模索する。女性は、①政治参画できているのか、②経済力をどの程度もっているのか、③市民としてふさわしい生活をおくれているのか、④社会的な身分はどうか、⑤教育を受けているのかといったことに注目していく。これらのカテゴリーのなかで外国人労働者問題、移民の法的権利、女性の健康に影響する伝統的慣行、人身売買などを扱う。	
	いのち・福祉と女性	歴史的にも現在も、女性が男性に対して劣位におかれているということ、それはジェンダー（社会的・文化的な性差）から派生する問題であるというフェミニズムの認識のうえに立って、女性のおかれている現代的状況を考察する。特に、福祉社会において女性が抱える諸問題―労働問題、家族問題、福祉制度、女性の生き方その他―を明らかにし、それらを解決するための制度の整備を検討する。講義をとおして、福祉社会のなかで女性が主体的に生きることについて考える。	
	女性と文学	文学と女性のライフストーリーとの関係をおもに日本の近代文学を材料にして講義する。文学は女性の人生を写すばかりではなく、女性のライフストーリーにたいして、いい意味でも悪い意味でも大きな影響力や規制力をもつ。この講義では、結婚、恋愛、性、家族、金銭などのテーマにそって、明治、大正、昭和にかけて多くの女性読者に読まれた小説を取り上げる。近代文学の母体となった明治30年代家庭小説、夏目漱石の新聞連載小説、女性信奉者が多かった有島武郎の小説などである。必要に応じて、外国文学にも言及して、比較検討をおこなう。	
	性差の科学	近年、男性と女性の間には存在する様々な差異：性差を研究し、医療や教育の現場に応用する試みが始まっている。その一方で、心と体の性別が一致しない性同一性障害等についても、社会の中で広く認知されるようになった。本講義では、性染色体によるヒトの性別決定のメカニズムや男性ホルモン・女性ホルモン等の働きを、生物学・生理学・薬理学を基礎として学ぶと共に、マスメディア等で頻繁に取り上げられる性差や男性脳・女性脳といった表現を様々な視点から吟味・検討し、男女共同参画社会の中で、性差を上手に活用する方法を考えていく。	
	男女共同参画社会	男女共同参画社会基本法は、性別に関係なく社会のあらゆる分野に参画し、責任をもつ社会をつくらうという法律である。そこでは5つの基本的理念（①男女の人権の尊重、②制度または慣行についての配慮、③政策などの立案及び決定への共同参画、④家庭生活における活動と他の活動の両立、⑤国際的協調）を掲げている。本講義では、初回に法律制定までの概要を説明し、その後、各基本的理念の現状と問題点を考える。各講義の最後に、講義内容を踏まえ、男女共同参画社会を実現するためには何が必要なのかを毎回考える。	
③ 国際理解	国際問題	20世紀国際政治史における「戦争と難民」の視点から「ネーションとは何か」を検討していく。ネーションの境界を画定し「国民国家」の建設と統合を促す最大の要因を戦争に据え、パワー・ポリティクスによる秩序構築と「国民国家」再編のなかで排除されてきた難民を中心に議論を進める。とくに、二つの世界大戦の帰結として生み出され、いまなおその渦中にある「パレスチナ難民」を取り上げる。大国中心の国際秩序の歪み、難民の歴史と現況、ひいては国際社会の関与のあり方についても検討していく。	
	国際関係	まず、国際関係論の基本的枠組であるリアリズムとアイデアリズムを軸に「戦争と平和」について考える。主権国家システム、安全保障、勢力均衡など基本概念の概説を踏まえ、総力戦体制の過程と帰結を中心に「世界戦争の時代」を振り返る。つぎに、冷戦後における国際秩序の変転を中心に「戦争と平和」を検討していく。グローバリズムと主権国家システムの変容、安全保障概念の多義化や戦争形態の変質を論じつつ、「対テロ戦争とその後」をテーマに大国と国際秩序の関係を考察する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	グローバル・スタ ディーズ	21世紀に生きる私たちは、国際社会、とりわけヨーロッパについてどれだけ理解しているのか。その理解は多くの場合、メディアによって切り取られた様々な「イメージ」や日本式に自家薬籠された物の範疇を越えることはない。この講義では、ヨーロッパとは何か、「文化」とは何かという問いを通して、ヨーロッパと日本の表層的な差異を掘り下げ、それぞれの文化の本質的な豊かさとは何かを考える。とりわけフランスをモデルに、人々の生活と社会を通じて、中世から現代までの変遷や今日のEUとその現状を把握し、ヨーロッパとその文化の総合的な理解を目指す。	
	異文化コミュニケ ーション	日本で暮らす外国人も増え、私たちは海外旅行や留学など海外に出た時だけでなく、国内にいても異文化に接し、交流する機会を多く持つようになった。そのような中、異文化をいかに理解できるか、また、自らの文化をいかに相手に理解してもらえるかが重要になっている。本講座では、文化間で起こる接触や交流の場で生じる様々な問題をみていきながら、それらの問題を解決できる能力を培い、多様な文化が共生する社会で生きるために必要な視野を身につける。	
	アジアの中の日本	日・中・韓三ヶ国は漢字文化と儒教文化とを共有しながらも、三国の文化間にはいろいろな違いも見られる。本講義はその三国文化の同質性と異質性とを究明することによって、アジアにおける日本の姿を浮き彫りにすることを目指す。まず宗教（仏教、儒教、道教）と言語（表意文字である漢字）の共有性からくる同質性を探究してみたい。それから、風土、言語、国民性の比較から、三国の文化の異質性、すなわち三国の文化それぞれの特徴を分析していく。テーマごとにアジアの中の日本についてアプローチする。	
	世界の医療事情	先進国各国においては、高齢化社会の進展、国際競争の激化、経済成長の鈍化などという共通の問題を抱えながら、良質で適切な医療を効率的に国民に提供していく方法を模索している。本講義では、医療を提供する上で大変重要な医療保障制度について特徴的な相違を持つ先進国を中心に取り上げ、各国の制度と最近の制度改革の動きや歴史的経緯などを学ぶ。 また、日本における医療保障制度の改革と歴史について学び、加えて今後の課題について最新の情報や世界の医療保障制度との比較により考察を行う。	
	多文化共生社会	経済・情報のグローバル化や冷戦終結後の政治情勢の変化といった状況の下に、国境を越えた地球規模での人間の移動によって、国籍や民族を異にする人びとからなるクロスボーダー社会が出現する一方、一国内部においても、学校や職場、地域などで文化や価値観、生活様式を異にする人びとからなる多様な生活空間が形成されている。こうした現状認識の下に、社会福祉援助技術を用いてこうした多文化共生社会を実現するために何が出来るのかについて具体例をまじえて学ぶ。	
Ⅱ 現代社会の教養の基礎となる科目	④ 教養基礎科目		
	哲 学	一般的に言えば、個々の私たちの関わる現代日本の生と死の問題について論じる。その問題とは、環境危機と呼ばれている生・死、生物種の絶滅という死、クローンや遺伝子操作といった生命の科学的操作の是非など、多岐にわたるものである。授業では、現代社会がもたらした生死の状況を説明し、生きとし生けるものの生命の尊厳性と死の厳粛性について論ずる。	
	倫理学	「自分と向きあう欲望論」をテーマに、現代の倫理的課題を考察する。「私とは何か」、「社会のなかの私」、「私と環境」、「私といのち」等々を、具体的な事柄を材料にして、受講者自身の問題として考える。	
	文化論	日本は明治維新をさかいに、前近代／近代という文化概念の相克に出会った。日本文化を把握する際にキー概念となる前近代／近代を検証するため、昭和という激動の時代に焦点を定め、昭和流行歌の変遷を分析することによって日本文化の概念装置をとらえ直す講義を行う。	
	文 学	和歌史をおさらいして『百人一首』の位置を確認し、その成立と展開を略述、合わせて藤原定家についても概説する。掛詞や本歌取りなど、和歌を読むための基礎知識についても、時間を割いて説明する。また、江戸期以降の享受の諸相にも目配りして、その文化史的な展開にも配慮する。テキストには影印を使用し、変体仮名にも慣れ親しむことをめざす。なお学期中に1回、実地踏査を実施する予定である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	歴史学	第二次世界大戦期のアメリカ社会、文化を事例として取り上げることで、歴史学的アプローチを学び、歴史に対する多角的な視点を養うことを目標とする。具体的には、アフリカ系アメリカ人（黒人）、日系アメリカ人、女性、性的マイノリティの視点から第二次世界大戦を再考することを通して、人種、エスニシティ、ジェンダー、階級、セクシュアリティなどさまざまな差異が交錯しながら、戦時下においてアメリカ人の国民意識がいかに構築されていったのか、またアメリカの掲げる「自由」の意味とは何だったのかを考える。	
	日本語学	日本語と日本とについての言説内容を検討することを通して、日本語をあらためて見つめなおす。大学生活あるいは社会人としての基礎となる言語事項を再確認する。	
	心理学	認知・社会・発達・臨床などの各心理学領域の主要な理論などをかいつまんで解説する。授業では、心理学の理論体系を概説的に論じるような難しい話をするのではなく、たとえばなぜUFOを見るのか(認知的錯視)、友人とうまくやっていくにはどうすればいいか(対人関係)、恋愛など人を好きになるメカニズムの解説(対人魅力)、血液型性格判断の罠(ステレオタイプ)など、身近なトピックを取り上げて人の心の動きについて解説していく。	
	文化人類学	異なる文化を理解することは自らの文化を理解することでもあり、さらに、異なる文化と関わりを持つことは自らの文化を変容させ、新たな文化を生じさせることにもつながる。本講義では、世界の様々な地域の家族や親族、信仰や世界観、生業形態や経済、政治や権力、法律や秩序、芸術や芸能などについて学ぶことによって、わたしたちが「あたりまえ」とする自らの諸制度や考え方や文化を問い直す。フィールドワークを行い、異文化との対話を通して、文化の多様性と普遍性を追求する文化人類学のアプローチを学ぶ。	
	地理学	「地理が得意か」と尋ねられると、多くの人が「苦手」と答えるのではなかろうか。しかしその一方で、旅行はブームにもなっているし、カーナビや災害ハザードマップなどに代表されるように地図は生活の一部となっている。本講義は地理学習の第一歩として、日本の都道府県を取り上げ、地形・気候といった自然的条件、歴史、伝統文化、集落、産業などの人文的条件の双方から、われわれの身近にある日本の諸地域について理解を深めることを目的とする。その過程で地図資料や統計資料にも触れることで、地理学的なものの見方・考え方を習得することを目指す。	
	法 学	現在の社会において、法律を理解することは重要な意味をもっている。例えば、部屋を借りる、アルバイトをする、就職をする、結婚をする、事故に遭うなど、法律は生活で起こる様々な場面で、私たちに影響を及ぼし、ときには、ある行為を強制する場合さえある。この授業は、民法だけでなく、労働法、商法、民事訴訟法、消費者保護法など生活のうえで私たちと強い係わりを持つ諸法律について問題解決のための一つの糸口を学ぶものである。	
	日本国憲法	日本国憲法も民法や刑法のように一つの「法」という形のテキストだが、日常生活で意識することはあまりない。しかしながら、憲法には、さまざまな人権と、政治の基本的枠組みとが定められている。憲法は、わたしたちの暮らしに関わる法律の土台となるものなのである。この授業では、日本国憲法について歴史から説き起こしながら、憲法の理念と内容について見ていく。授業を通して、憲法に書かれている内容の背景について理解できるようにする。	
	経済学	経済学は社会科学の一部門で、人間が営む日常的な経済活動を分析する学問である。その内容は、一国全体の経済活動や国際経済を扱うマクロ経済学と、家計や企業などの個別の経済主体の経済活動を扱うミクロ経済学に大別される。この講義では、一見難解に見える経済学の基礎概念を平易に解説し、それらの理解が、日々の経済活動や経済成長、経済政策、貿易・投資活動などを理解する上でどのように役に立つかを考える。	
	経営学	現代社会において企業活動というものは欠かせない存在になっている。これまで企業は、自ら目的をたて、その目的を効果的に実現するために、数多くの試行錯誤的な行動を繰り返してきた。こうした企業活動の経験を、一定の体系に沿ってまとめあげた学問が「経営学」となっている。本講義は、その体系の内容を簡単に紹介し、経営学という学問の全体像を知ってもらうということを目的とする。また、本講義は、テキストに沿って授業を進め、毎回、テキストの内容を問うミニテストをおこなう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会学	恋愛、受験、起業、ボランティア、地域再生等、学生にとって身近な素材を扱いながら、自我・規範などの行為論から集団論や組織論、さらには社会変動論の領域へと視野を広げ、人と人、集団と集団などの「つながり」や「出会い」のもつダイナミズムを理解し、かつ、現代社会の諸課題とこれらの解決可能性を探る。全体を「総論」「各論」「応用」「実践」の4部におき、社会関係資本論、ネットワーク論等における研究成果を主に検討する。こうした過程を通じて、社会学の基礎的な発想法を身につける。	
	政治学	まず、国際政治学の基本的枠組であるリアリズムとアイディアリズムを軸に「戦争と平和」について考える。主権国家システム、安全保障、勢力均衡など基本概念の概説を踏まえ、総力戦体制の過程と帰結を中心に「世界戦争の時代」を振り返る。つぎに、冷戦後における国際秩序の変転を中心に「戦争と平和」を検討していく。グローバリズムと主権国家システムの変容、安全保障概念の多義化や戦争形態の変質を論じつつ、「対テロ戦争とその後」をテーマに大国と国際秩序の関係を考察する。	
	数学	数学的、論理的な見かた、考え方を学ぶ。具体的には、代数を中心として学習を行う。数と式では、展開と因数分解の関係、2次方程式とグラフ、2次方程式の解と判別式の関係の基本問題から応用問題までを用い、その意味が理解できるように学習を進める。数列では、基本的な等差数列、等比数列について学び、級数、極限までを学習する。簡単な微分、積分についても学習する。有理関数を取り上げ、微分が傾きを表し、積分により面積が計算できることを実感できるように指導を行う。	
	統計学	平均や標準偏差、相関係数や回帰計数の求め方に習熟して統計学の基礎を一通りマスターする。何を議論しているかを明確にするために、1授業1テーマに絞って例題を提示し解説する。演習問題では、サンプルサイズ10程度のテストデータの平均・分散などの特性値を計算し、それらの意味を理解して、データから情報を読み取っていく。さらに、統計学の方法を身につけるための例題や演習、社会・経済現象や社会・経済分析に慣れるための例題や演習を適当に混ぜ、応用能力を開発することを目指す。そして、授業内容を定着させるために確認テストを実施する。	
	情報学	高度情報社会といわれる昨今、「情報」が大きな価値を持つようになった。情報をいかに収集し、分析し、編集加工し、配信するか、その力が問われる時代なのである。その範囲は、インフラの整備とともに、飛躍的に拡大し、地域社会、教育、行政など、社会全てに及ぶ。加えて、パソコンや携帯電話、携帯端末等、メディアの発展とともに、情報収集、発信の可能性が高まってきている。例えば、クラウドのような新しい情報の利用形態、CGMのような消費者を巻き込んだ新しい企業戦略がある。事例をもとに、情報社会の全貌を明らかにしたい。	
	生物学	動物の行動がどのように進化したのかを比較研究する「行動生態学」の考え方を紹介するとともに、系統の異なる動物の各グループごとに繁殖システムに注目して、興味深い行動の例を紹介する。具体的な内容としては、血縁選択、性選択、集団の機能、利他性の進化、行動のコストとベネフィット、進化的安定戦略などのキーワードを概説した上で、昆虫類、魚類、鳥類、ほ乳類などの実際の例を示し、特に霊長類の中でヒトの繁殖システムがどのように進化したかを考察する。	
	薬学	女性と薬学との関わりをテーマとして、女性が健やかに活躍するために必要な薬学関連の情報を、薬理学をベースとして、医薬品、栄養補助食品、化粧品、医薬部外品など、幅広いテーマの中から取り上げていく。具体的には、身近な医薬品・サプリメントや化粧品の上質な活用法、様々な肌のトラブルと対処法、頭痛・生理痛・アレルギー疾患等の治療薬とそのメカニズム、便秘薬、女性ホルモンの働き、性感染症、薬としての嗜好品、不眠症、うつ病とその対策などを取り上げる。	
	環境学	はじめに、環境倫理について解説し、「持続可能な発展」の重要性を理解させる。続いて、地球環境に影響を及ぼす様々な要因、宇宙線、太陽活動、太陽風、地磁気、大気、大気の成分、オゾン層等について解説する。さらに生命の誕生と進化についても述べる。科学の進歩は大量の物質を生産し、生活を豊かにする一方、様々な資源や生活環境を地球規模で消失・破壊している。例として、地球温暖化と石油資源の枯渇、異常気象、放射能汚染、環境ホルモン、新興感染症等について解説し、環境問題についてより理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	健康科学	近年、生活の簡便化により運動不足の時代、さらには飽食の時代といわれ、生活習慣病が老若問わず問題となっている。一方、特に成人女性においてやせ志向が問題視されている。日常生活でのエネルギー消費量やエネルギー摂取量を把握し、自分の生活を見直すとともに、現代社会における健康問題について理解を深める。また、運動刺激によってからだはどのように変化するか、運動に関わるからだのしくみや運動によって生ずるからだの変化を学び、健康管理のキーポイントを探る。		
	生命科学	女性は新しい生命を育む役割を受け持つ。自分のからだを情緒的にとらえるのではなく、自分という人間を、自然界のなかのヒトとして、生物学的に把握することによって、新しい精神世界を広げる。生命現象には、まだまだ解明されていない不思議な事柄が多く、微生物から動植物まで、この地球上に生きるものすべての存在を見通し、理解し、人間である現在の自分を考えるきっかけを作る。また、この授業では、サイエンス・リテラシー、すなわち科学の言葉で生命現象を理解し、かつ、表現することのできる力を養うことをめざす。授業には、イギリスBBC製作の生命科学のビデオ視聴や科学館見学も取り入れる。		
	芸術論	西洋近代美術の歴史とその思想の発展を主に20世紀前半を中心にたどる。私たちの時代である近代の、多様化した20世紀の美術について、西洋を中心にその主要な動向を学ぶ。分かりにくいといわれる近代美術の作品に秘められた美術家の思想を探り、20世紀の社会とのかかわりの中でどのように美術作品が作られてきたかを理解する。印象主義などの19世紀の美術に始まり、フォーヴィスム、キュビスム、表現主義、抽象美術などを経て、エコール・ド・パリ、シュルレアリスム、メキシコ・ルネサンスに至るまでの美術の流れを学ぶ。		
Ⅲ 幅広く 教養を 身につ ける科 目	⑤ 教養 展開 科目	日本文学講義A (1)	連歌俳諧史研究。連歌・俳諧作品の読解を通じて、その起源や特質、史的変遷を追いかけるとともに、広く中世から近世に至る韻文芸の諸相を探索する。適宜概説を交えながら、なるべく多くの作品を精読し、文学としての魅力を考えたい。おおかたは活字本によるが、時には写本や刊本のコピーを使用して変体かなの習熟にも努めることとし、さらに必要に応じて関係古典籍も紹介する。五・七・五にこめられた表現の深奥をたっぷりと味わう。	
		日本文学講義A (2)	連歌俳諧史研究。「日本文学講義A(1)」を承けて、引き続き俳諧・俳句作品を読解する。後期は近世を中心とし、さらに近代へも射程をのぼして韻文芸の諸相を探索する。適宜概説を交えながら、なるべく多くの作品を精読し、文学としての魅力を考えたい。おおかたは活字本によるが、時には刊本のコピーを使用して変体かなの習熟にも努めることとし、さらに必要に応じて関係古典籍も紹介する。五・七・五にこめられた表現の深奥をたっぷりと味わう。	
		日本文学講義B (1)	主人公光源氏の波乱に富んだ生涯を描く所から出発した『源氏物語』は、主人公が栄華を極めるあたりから微妙に主題が変化し、光源氏の人生を描くこと以上に彼を取り巻く女性たちの人生のあり方と心情に作者の関心が移っているといえ、宇治十帖では明らかに大君や浮舟らの女主人公が物語の中心をなしている。本講義では、『源氏』の最後を飾る「浮舟の物語」を、岩波文庫『源氏物語』をテキストに読み解いていく。『源氏』の全容も適宜説明し、物語に初めて出会う受講生にとっても理解しやすい講義になるよう配慮する。	
		日本文学講義B (2)	「日本文学講義B(1)」の後を受け、引き続き「浮舟の物語」を原文に即して読み解いていく。特に「手習」「夢の浮橋」の巻における浮舟の姿を深く掘り下げ、物語を通して語ろうとする作者のメッセージはどのようなものであったのかを考える。『源氏物語』は、今から千年以上前の、言語・風俗・制度を大きく異にする世界の物語だが、不思議と現代人の琴線に触れる優れた文学であり、近・現代小説を読むのと同じように、自分を見つめ人生を考えながら物語世界に浸れる文学であることを説く。	
		日本文学講義C (1)	明治期から大正期にかけての文学を、文化史および文学史の観点から講義する。文学史的な知識の形成のみではなく、日本近代社会の成立に近代文学が大きな影響力を持ったことを考察する。具体的には、この時期の小説を6つの項目に分け、1項目につき2コマの講義をおこなう。作品の概要説明、作品からの抜粋の講読により作品を理解し、社会的あるいは歴史的背景との関連について考察したり、海外の作品との比較検討などをおこなう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本文学講義C (2)	昭和期の小説を、大きく第二次世界大戦前と戦後にわけて、文化史および文学史の観点から講義する。近現代文学を日本の近現代史の中に置き、文学史的な知識の獲得のみならず、文学の社会的影響力についての理解を目指す。具体的には、戦前3項目、戦後3項目に分け、1項目につき2コマの講義をおこなう。作品の概要説明、作品からの抜粋の講読により作品を理解し、社会的あるいは歴史的背景との関連について考察したり、海外の作品との比較検討などをおこなう。	
	日本文化史(1)	日本文化万般を学ぶための入門講義。古代(太古～平安時代:12世紀末まで)から中世(鎌倉・室町時代:13～16世紀)の芸能や祭礼を中心に、日本文化について講義する。古代では舞楽、中世では世界無形文化遺産である能楽(能と狂言)を軸に、古代・中世の芸能史をその文化的背景に留意しつつ見渡し、ビデオやDVDを通して舞台を観ることにより、芸能や祭礼を通して、日本文化とその歴史に関心を持ってもらうことを目的とする。	
	日本文化史(2)	日本文化を学ぶための入門講義。近世(江戸時代:17～19世紀)から近代・現代(明治・大正・昭和・平成:1868年～現在)の芸能・演劇を中心に日本文化について講義する。近世では、世界無形文化遺産である人形浄瑠璃と歌舞伎、近代・現代では、新派、新劇、新国劇、小劇場演劇等を中心に、近世から近代・現代の芸能史を文化的背景に留意しつつ見渡し、ビデオやDVDにより舞台を観ることにより、芸能・演劇を通して、日本文化とその歴史に関心を持ってもらうことを目的とする。	
	日本語学講義A	日本語音声の特徴を解説する。共鳴、フォルマント、サウンドスペクトログラムのよみ方など、音響音声学的にみた音声の実像を解説する。続いて音声器官、調音音声学の原理・方法を解説し、音韻論解釈の原理・方法に言及する。その後、日本語音声の特徴を、多少の外国語音声(英・中・韓)と対照しながら解説する。ひと通りの基礎をマスターした後、日本語音声の実際を観察する実技(少しだけ外国語音声も)を行う。実際の音声を聴いて、その音色を国際音声記号で転写する練習を行う。アクセントも観察記述する。	
	漢文学概論(1)	中国の詩文を紹介しながら、文学史の流れを概説する。前期は、三国までを対象とする。具体的には、『毛詩』『論語』をはじめ『文選』などに収められている詩文を取り上げ、分析を進めることで、時代、思想、そして修辞に照らした理解を促したい。また、中国詩文の在り方は、日本文学に深く関わることでもあるから、中国文学を通じて日本文学の理解を深めることもまた大切な目的の一つである。併せて、種々の工具書類の使い方も適宜紹介する。	
	漢文学概論(2)	中国の詩文を紹介しながら、文学史の流れを概説する。後期は、六朝から唐の詩を扱う。具体的には、『文選』『唐詩選』『唐詩三百首』『三体詩』などに収められている詩を取り上げ、時代、思想、そして修辞に照らした理解を促したい。また、中国詩文の在り方は、日本文学に深く関わることでもあるから、中国文学を通じて日本文学の理解を深めることもまた大切な目的の一つである。前期と同様に、種々の工具書類の使い方も必要に応じて紹介する。	
	英米文学研究E	英米の文学作品を研究していくために、さまざまなアプローチについて学ぶ。具体的には、エミリー・ブロンテの小説『嵐が丘』を題材とする。取り上げる研究方法は、本文批評、歴史的・伝記的方法、新批評、精神分析批評、神話・原型批評、フェミニズム批評、その他である。文学作品についての素朴な感想文を書くことから脱皮して、より客観的で説得力のある研究論文を書くための基本について学んでいく。併せて、文学作品を研究することの意義についても考えていく。	
	英米文化研究E	この授業では、文化とは何かという問題から始め、文化を研究する際のさまざまなアプローチについて考察する。同時に、文化の背後には、どのような構造やシステムが潜んでいるかを考えていく。文化を研究するための基本的な考え方として、具体的には、構造主義、記号論、権力論、メディア論、歴史記述について考察する。後半では、近年盛んに行われているカルチュラルスタディーズ(文化研究)とポストコロニアル研究についても考察する。	
	多文化共生A	英語とフランス語を公用語とするカナダが、二言語多文化主義を採用するようになった歴史を概観した後、各州の現在の言語状況について見ていく。特にカナダの中で唯一フランス語系が大多数を占めるケベック州に焦点をあてる。そして、カナダにおいてマルチカルチャリズムがどのような実を結んでおり、何をめざしているかについて考える。またアメリカ合衆国とカナダを比較して、その違いに関心を向ける。さらに、日本の多文化共生の現状をカナダと比べてみる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	多文化共生B	オセアニアはオーストラリアとニュージーランドの先進国と、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアに分類される多数の小さな島嶼国や領土からなる。優れた航海民族であったオセアニア人の人々の先祖たちが西から東へ移住して作り上げた社会は、隣接する島々との関係、16世紀以降は西欧諸国や日本との関係、近年は移民やグローバル化などを通して多文化社会となった。本講義では、写真や映像を多く見ながら、オセアニアの諸国（領土）が多文化の共存する社会となった歴史とその現状について学ぶ。	
	バイリンガリズム	バイリンガリズムとは何かということを理解する上での問題について論じる。日本では、一般的に、バイリンガルは肯定的なイメージで捉えられる。それは例外的に有能な人物で、英語を流暢に操る日本人を指すことが多い。しかし、目を海外に転じれば、バイリンガルはごく一般的な出来事であり、日本人が気付きにくい多くの興味深い問題を含んでいる。バイリンガルのさまざまな側面を学ぶと同時に、それが内包している種々の問題についても考える。	
	日本語教育法A (1)	様々な外国語教授法について、その概要と背景となる考え方を理解する。その上で、日本語の初級教科書を利用して教授項目の抽出から、練習の組み立て、活動などの授業準備の方法などを学ぶ。最後に自分が今まで学習したことのある外国語を、他の学生に教える模擬授業を行なう。教授法については、講義形式で説明した上で、実際の授業の様子を収録したDVDを見てもらう。日本語の教え方については、やり方を説明した上で、実際に練習を組み立ててもらうなどの実践を適宜組み込んで理解を深める。	
	日本語教育法C	実際に、母語話者や学習者が産出した生の言語資料の分析を通して、談話分析の手法を体験するとともに、母語話者と日本語学習者の談話構造の違いに着目することで、日本語教育への応用も視野に入れていく。母語話者の日本語を分析し日本語の談話の特徴について考える。次に、学習者の産出する日本語を観察し、談話レベルでの問題点について考える。そして、日本語教育(特に会話教育と作文教育)では何を教えるべきかについて理解を深める。	
	商品学	商品学に関する新しいテーマについて基本的な知識や現代的課題を整理するとともに、商品開発や商品化に関する様々な事例を取り上げて具体的に考える。 テーマごとに関連する教材(補助資料や視覚教材)を用いながら、各自が具体的な事例について考えることを重視する。今後のライフタイムや商品選びを考えるときに役に立つような実践的な知識を習得することを目標としている。 授業中に、小レポートやコメントをまとめて提出してもらうことを通して、論理力や論述力を身につける。	
	情報統計学	現代社会では膨大な情報(データ)が溢れているが、日常生活における様々な情報の分析に適用される統計的方法について、コンピュータを利用して分析できる力を身につける。統計学は、実際のデータを分析して、そのデータが生成された元々の集団について推測する方法を学ぶ学問である。データに現れた特徴や各データ間の関係などを整理・要約して記述する方法(記述統計学)と、そのデータが抽出された集団に対する推定や検定の方法(統計的推測)を、表計算ソフトExcelを使って、実際に例題を解きながら学ぶ。	
	電子商取引	電子商取引の実際についてインターネット上でどのようなことが行われているかを確認し、電子商取引の発展の原因や経済効果などを解説する。電子マネーについては、マネーの定義についても詳しく行い、プリペイドカードとマネーの関係について法律の面から解説する。また、電子商取引におけるセキュリティ対策、特に暗号理論、公開鍵、RSA暗号についての数学的な理論も解説する。さらに、電子消費者契約法について、従来の契約法との違いを電子商取引の立場から解説する。	
	生活統計学	統計学を初めて学ぶ人を対象に統計学的見方を身につけ、統計的に処理された結果を正しく判断できる力を養うことを目的としている。授業では、統計学における最低知ってほしい概念を中心に、統計学とはどんなものであるかを修得する。 授業の前半で各単元の説明を行い、例題を解きながら統計学の重要項目を確認する。授業の後半で生活に関連したデータを元にした練習問題を各自が解き、手を動かして練習を積み重ね、統計の基礎知識を習得するとともに統計学からのデータに対する見方を習得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	生活マネジメント特論F	いわゆる日本型金融ビッグバン以後、金融の自由化が進み、生活者・消費者には、自己責任のもとで金融商品を選ぶことが求められている。本講義では、市場経済と金融市場の仕組みやその動向について基礎からわかりやすく解説する。また、具体的な取引価格や運用率を参照しながら株式や債券、投資信託といった金融商品について解説する。こうした学習を通して、生活者・消費者の視点を持ちながら自らの生涯を通じた資産運用をマネジメントする能力を育成する。	
	衣生活学	健康をキーワードに、人が生まれてから幼児期から成人へ・中年から老年に至るまでの生涯にわたる衣生活、すなわち人の成長や発達を支え、成人してから生活の上で重要な働きをする靴と健康の関係、年齢による身体の変化や障がいと衣服との関係を幅広く紹介する。「ライフサイクルと衣生活」「生涯衣生活設計」をキーワードに、生涯にわたる衣生活をより良く過ごす事のできる基礎知識を修得し、将来の衣生活に生かしていく力を養う。	
	住生活学	日本では高度成長期以降、膨大な住宅需要に対応した供給システムが肥大化してきたが、近年では人口減少やそれに伴う家族形態の多様化などにより、需給関係は大きな変化の時代を迎えている。特に高齢化や家族規模の縮小などこれまで経験しなかった社会状況に対応する「良い住まい」とは単に容れものとしての「住まい」を問題とするのではなく、周囲の「まち」や生活を支えるための「居住サービス」がうまく調和した状態と考えられるので、そのような新しい居住システムについて考える。	
	ファッションの歴史	ファッションは、現代の私たちの心身両面に影響を与えるものであり、ファッション関連産業は、わが国において重要な位置を占める産業である。講義の前半は、衣服の起源から現代までのファッションの歴史を振り返りながら、ファッションの種類や構成、さらにファッションと時代との関連を学ぶ。後半は、ファッションデザインについてアイテム、シルエット、素材、イメージなどの面から理解し、ファッションデザインとファッションビジネスとの関係を把握する。	
	居住福祉論	「居住福祉」(住宅福祉)は、誰もが自分にあった適切な住居や居住地(居住)を得る権利があるという、国際的な認識がベースになっている。日本ではこの考え方が十分に浸透していないが、例えば大震災により、誰もが居住福祉の危機に直面する可能性がある。より多くの人が居住福祉の考え方を学び、社会的な基盤づくりに寄与することが大切である。授業では、幅広い社会政策を展開している北欧などにおける高齢者住宅や施設、街づくりや公共交通機関に関する事例を見ながら、居住福祉の総合的なイメージをつかむとともに、日本において居住福祉の観点からみてどのような問題を抱えているかを把握し、そのあるべき方向について学ぶ。	
	人と物質の科学	現代の生活では、人は様々な物質に囲まれている。環境を守り、安全に生活するためには、これらの物質について理解することが重要である。はじめに、科学全般にわたっての基礎的な原理と知識を修得するために、原子、核化学、分子について学ぶ。つぎに、大気中の分子、ビタミン・ホルモン・脂肪・炭水化物などの体内の化学物質、香りと味の成分、医薬、麻薬・覚せい剤、農薬、石油化学製品(ポリマー)等、生活に関連した物質について解説する。また、放射線の利用(PETなど)や太陽電池など最新の科学についても解説する。	
	テキスタイル材料学(1)	アパレル界でのテキスタイル材料について講義する。具体的には、繊維については、繊維の種類と構造上の特徴を講義する。糸については、糸の分類、番手、撚り、単糸と合糸、縫糸の表示について講義する。紡糸に関しては、綿糸・毛糸の製造方法、生糸の製造方法、フィラメント糸・フィラメント加工糸の製造方法について講義する。布帛については、織物の製造方法、織物の組織と組織図について講義する。更に、繊維、糸および布帛の相違が、外観や着心地に与える影響について講義する。	
	テキスタイル材料学(2)	衣服素材として用いられる様々な布地について理解するために、テキスタイル材料学(1)に続けて行う講義である。授業の前半は、衣服の主(表)素材として用いられる編物、レース、皮革、複合製品などの布地の種類、製造法、布構造、性質について説明し、つづいて、裏地や芯地などの副素材の種類および主素材と副素材に要求される消費性能について講述する。後半は、衣服素材に求められる布地の力学的特性、外観性能、造形性能について述べ、素材に関する既製の苦情事例および防止策等を紹介する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	まちづくり論	<p>私たちの暮らしに身近な「地区レベルのまちづくり」の方法を、次の一連のプロセスを通して学習する。(1) まちの現状と問題点の把握、(2) まちづくり課題の抽出と課題相互の関係の整理、(3) 解決の方向と方法の検討、(4) まちづくりの計画目標とプログラムの設定。</p> <p>授業では学習の素材として、タイプの異なる幾つかのまちづくりの実践例を取り上げる。その中で取り上げられた主要な課題、課題解決のための様々な工夫、住民と行政のパートナーシップのあり方などに注目しながら、今日における住民主体のまちづくりの可能性について考える。</p>	
	西洋建築史	<p>古代から近世までの西洋建築の歴史について見ていく。古代については、後のヨーロッパ建築の古典となるギリシア建築とローマ建築を見ていく。中世については、キリスト教文化を基盤として西ヨーロッパを中心に形成されたロマネスク建築、ゴシック建築を、また東ヨーロッパで形成されたビザンツ建築を見ていく。近世については、中世を否定し、古典様式を再評価するルネサンス建築を、そしてルネサンスの均衡の感覚を破ったバロック建築を見ていく。</p>	
	食品栄養学	<p>ヒトは生命活動を営むために、植物や動物である食品を食物として摂食し、エネルギーや栄養素を補給する。体内に取り込まれた食品成分や体内での栄養素の働きを学び、健康を維持するための食品と栄養素について学ぶ。そのうえで食生活に起因する身体状況、生活習慣、環境などさまざまな問題を理解し、食生活の目的と意義を習得する。本講義の目的は、食品栄養学を礎として受講生自らが自分の食生活をデザインし構築する力を養うことである。</p>	
	観光産業論	<p>「観光」の本来の意味と意義を再確認した上で、それが地域社会（地域経済や地域文化など）にもたらすさまざまな効果や問題点について考察しながら、よりよい地域づくりと観光との良好な関係性について考えていく。観光とは、単なる第3次産業的な営為ではなく、地域丸ごとで取り組む、いわば「第6次産業」的営為であることを理解できるようにする。具体的な内容としては、「観光」へのニーズの変容として、マストゥリズムからオルタナティブトゥリズムへの変容に関する概念を学ぶ。</p>	
	現代社会とキリスト教	<p>ヨーロッパ・キリスト教社会と文化の成り立ちを、多文化、多宗教共存の観点から考察する。</p> <p>特にキリスト教、イスラーム教、ユダヤ教が共存することで作り上げられたイベリア半島地域の歴史や文化事例を具体的に取り上げながら、テーマの深い理解につなげていきたい。</p>	
	マーケティング論	<p>マーケティングの基本である4Pについて、レジメを中心に学んでいく。4Pとは、PRODUCT(製品)、PRICE(価格計画)、PLACE(流通計画)、PROMOTION(広告・販売促進計画)のことをさし、これに消費者行動とマーケティング事例を考慮しながら、マーケティングの概念について理解する。また、マーケティング戦略の成功・不成功が勝負を決めると言われている。そこで次のことを中心に戦略について考える。1 マーケティング的(顧客優先思考)発想の基本を学ぶ。2 メーカー主導型商品開発と消費者参加型開発の事例を学ぶ。3 指示待ち人間から提案型人間への発想転換の必要性を学ぶ。4 企業社会、IT業界の潮流について学ぶ。</p>	
	インターネット・ビジネス	<p>インターネットの普及により、各種のビジネスモデルが誕生している。さらにブロードバンドの普及により、より安価・高速・大容量に情報が送信できることになり、ますます加速度がついている。これら最新のインターネット・ビジネスをクリッピング作業により、毎回「今週のインターネットビジネスピックアップ」として紹介し、各種問題点についても解説する。</p>	
	生物の情報戦略	<p>生物は様々な場面と様々なレベルで情報を利用している。この講義では、まず生物における情報の利用場面と意義について概観した上で、動物の同種・異種間コミュニケーションや環境からの情報の利用に焦点をあてて、その実態を紹介する。また、この中では生物にとってもっとも重要なオス・メス間の情報交換とその意義にも焦点をあてる。</p>	
	Web制作C (Web運営)	<p>本授業では主にWebの運営・管理面、Webでの情報の共有などについて実習を通じて学ぶことを目的とする。ここ数年でクラウドコンピューティングという言葉が聞かれるようになってきた。メールをはじめ、カレンダー、ドキュメント、画像、動画などコンピュータで扱う様々な情報をインターネット上で編集、共有、管理できる。しかし、便利なツールには必ずリスクを伴う。注意点や問題点も含め様々な環境からアクセスできるツールを利用し、自分にあったワンランク上のインターネット活用法を身につけていただきたい。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	マルチメディア表現及び技術	デジタルデータの基本やコンピュータやネットワークの基礎や原理を学ぶことでその性質や特徴を確実に捉える。さらに社会的な応用に至るまで、マルチメディアを取り囲む様々な視点からアプローチすることで総合的な理解を追究する。授業ではマルチメディア検定ベーシック、エキスパートにも対応した解説を加え、簡単な小問題を解くことで確実に力をつける。	
	広告コピー制作論	広告は企業、商品、サービスと生活者をつなぐ現代における主要なコミュニケーションの一つである。そのための広告表現には科学的、理論的な側面と、人の心に届く芸術性、創造性も必要とされる。この授業は広告表現、コピーライティングを中心に、事例紹介、映像資料等を使いながら基本的な知識の習得と、広告のアイデアや発想法、表現手法について学び、具体的な制作実習を行う。広告だけにとどまらず多面的なアイデア、発想、創造性を伸ばしたい人の授業でもある。	
	情報と流通	流通とは、生産と消費を橋渡しするための多様な経済的・社会的な活動であるといえる。社会における流通の役割は重要だと考えられ、本講義では、そうした流通の概念と機能について学ぶことを第一の目的とする。本講義を通じて、流通についての一定の知識を獲得すること、新聞・ニュースなどで取り上げられる企業の流通の機能や特徴がわかるようになること、自分たちで調べてきた流通機能の実態を報告し議論できるようになることを、本講義の目標とする。	
	メディア論	コミュニケーション・メディア・インフォメーションの違いから次第にメディア論の中心的な概念を説明していく。文字の出現が人類に与えたインパクト、活字というメディアが近代文明に及ぼした影響、とりわけコンピュータが出現して以来のメディアの変化を多面的な角度から解説する。テレビとかインターネットというメディアについて、その役割を本質から読み解くことは、内容的に難しいが、理解できたときの面白さは格別のものであると信じている。	
	情報化社会論	インターネットをはじめとする劇的な技術革新や手軽で安価に利用できるようになったブロードバンドの浸透によって、高度な情報化社会の到来を迎えた。しかし、私たちを取り巻く社会環境において情報は氾濫しており、本当に有用な情報は何なのか、日々の確な判断が求められている。本講義では、情報化社会の基盤となる技術やしくみの解説を行い、社会、企業、教育、行政などにおける情報技術の活用に関する具体的な事例を通じて、社会の変化を理解する。	
	東アジアの社会と福祉	国際比較の視点に立って、主に中国と日本の社会が抱えている格差、貧困、環境、高齢化、医療といった共通問題を取り上げて分析、検証する。さまざまな具体的な社会問題に対する検証によって、社会政策の理念、仕組み、実施などを理解できるようにする。例えば、経済成長至上主義の代償の結果、「調和のとれた社会」の実現が困難になっている現状をふまえ、特に格差社会の急激な進行によって立ち遅れた農村を豊かにするための福祉施策を学ぶ。	
	コミュニティ福祉論	人口減少社会、格差社会という今日においては、コミュニティは多くの困難な課題を抱えている。そしてそれらの課題を解決するためにコミュニティは大きな期待をもたれている。 本講義では、今日のコミュニティに顕在化しつつある孤独死や児童・高齢者虐待、移民の課題などを具体的に取り上げ、コミュニティの希薄化、空洞化が何をもたらしたのかを明らかにする。そのうえでそれらの深刻化・複合化した問題を解決するために求められるコミュニティ福祉について考えていく。	
	社会調査法	はじめに、社会福祉に関するさまざまな官庁統計、調査報告書を取りあげ、各自でそれらを整理、分析し、報告する。つづいて、そこで用いられている種々の集計、解析手法について学ぶ。以上をふまえて、簡単なデータの収集を行い、これを用いて集計、図表の作成、およびプレゼンテーションを行う。	
	スポーツと福祉	障害者や高齢者などのスポーツ活動を支援・指導するためには、健康や安全管理についての理解が必要である。誰もがスポーツを楽しみ、その喜びを味わうためには、スポーツを取り巻く日本の福祉施策の理解やボランティアなどの支援体制を含めた地域や仲間とのネットワーク作りも重要な課題である。本講義では、アダプテッド・スポーツをキーワードに、ヒトとスポーツの関わりについて考えていく。具体的には、スポーツが、人間の生活や健康をより豊にするツールとして、どのように貢献しているのか、また、どのように発展していくべきなのかについて考える。さらに、個々人の違いを認めた上で、共に生きることの可能性をスポーツを通して考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	発達と学習	<p>「おとなになる」ということは、どのようなことを意味するのであろうか。人間は二十歳になれば、はたしておとなになるのか。本講義ではこのような疑問に対して、教育・発達心理学的な観点からとらえ、「子どもからおとなへ」の発達過程を、障害のある子どもたちを含め理解するとともに、その過程における学習や経験の役割を考えていく。青年期まで含む広義の子ども期の身体・運動的、認知的、社会・人格的発達と学習の過程および本科目関連領域の心理学関連用語等の理解を目指していく。</p>	
	現代子ども学概論	<p>子ども、とりわけ乳児期から児童期前期の子どもを教育学、心理学、社会学的な観点だけでなく文化人類学、行動科学などの視点も加味して多角的、総合的に考察し、「子ども」の本質、特性や特徴、発達の社会的課題についての認識を得る。子どもは児童観、教育観、発達観により異なった姿に見えるものであり、子ども観の歴史的变化を視野に入れて検討することにより、一層深い子ども理解を図る。これにより人間発達の初期にある子ども理解と育成のための理論的基盤を形成することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(66 小田節子/2回) 子どもの第二言語習得の過程やその理論について、「バイリンガル」、「話しことば・書きことば」の視点から学ぶ。</p> <p>(39 中野修身/2回) 子ども観、教育観について「子どもの発見」、「子どもにとって遊びとはなにか」をテーマに学ぶ。</p> <p>(135 小島一宏/2回) 子ども相互、子どもと大人のコミュニケーションの意味や形について、講師のアナウンサー経験を通じて考える。</p> <p>(55 南曜子/2回) 子どもの文化について、「イソップ寓話」、「わらべうた」を取りあげ、子どもの生活のなかで文化がどのような意味を持つものかを学ぶ。</p> <p>(180 野呂達也/2回) 子どもと自然の関わり、子どもは自然からなにを学ぶのかについて、自然の理解と生物多様性の観点から学ぶ。</p> <p>(89 日々野直子/2回) 子どもの養育と保育について、子どもの育ちの視点、親としての育ちの視点から、幼稚園教育の意義を踏まえつつ学ぶ。</p> <p>(52 増田公男/3回) 子どもの発達の心理について学ぶが、「子どものこころ」、「おとなのこころ」、「メディア社会の子どもたち」との3つのテーマを設定して学んでいく。</p>	オムニバス方式
	生命倫理	<p>1997年、ロスリン研究所によって生まれた「クローン羊ドリー」をめぐる全世界的な議論からもわかるように、生命倫理の問題は現代の社会において最も注目を浴びる主題である。とりわけキリスト教は、生命とは神から創造されるものであると告白している。したがって、キリスト教は、墮胎、脳死と臓器移植、安楽死、生命複製などの、いわゆる生命操作が行なわれる分野の問題に対して答えることが求められている。本科目は、生命倫理についての諸分野の考え方と対話しながら、現代社会におけるキリスト教的生命倫理の成立可能性について研究する。</p>	
	美術（絵画）	<p>鉛筆による静物デッサンの基礎。最初に簡単な基礎形態である円柱（石膏）のデッサンを行う。鉛筆で陰影を付け、明度の違いで立体感や質感を表現する基礎を学ぶ。次に、ピン・果物・ブロック・ヤカン・布など色や質感の違う静物を組み合わせたものを描いていく。最初と違い、複数のものの組み合わせであるので、ものともとの関係や空間にも注意して進めていく。主に実技形式で行われるが、学生一人一人の進度や技能に対応した個別指導になる。</p>	
	美術（彫刻）	<p>主に鉛筆で立体の基本となる単純な幾何形体、果物を持った自分の手などのデッサンを行う。次に材質の異なる静物（黒いガラス瓶、ヤシの実、白い石膏）画を描くことで質感の表現力を身につけるとともに、12段階のグラデーションをHBの鉛筆一本で作成することで幅広い表現力の育成を行う。最終段階では水彩画、コラージュなど想像力を必要とする自由制作を学生の実技能力にあわせた個人指導で行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	カウンセリング入門	本講義ではカウンセリングの種々の理論や技法、またその根本となる考え方を紹介する。心とは何か、意識とは何かといったことから、「治る」のか「治す」のかといった問題など「日常的にはあまり考えないが、カウンセリングの根本にある」問題について、深く考えてもらいたい。また、人と人が向かい合うこと、人の話を聴くことの本質について感じ、考えを深めてもらいたい。この半期の授業では、カウンセリング「入門」というほどのレベルまでは到達できないが、基本的な技法や理論について、自らの実感としてとらえ、考えていけるようにする。	
	生理心理学	ヒトの生理及び構造の基礎理解とともに、生理学的視野から心理・行動を説明する知見、及びその理論背景を紹介する。運動系においては、特定の認知パラダイムによって、行動を設定したとき、行動の計画・遂行にいたる一連の脳内情報処理がいかに行なわれているかを探らうとする。植物系においては、心身相関の視座より、心理（こころ）の生理に及ぼす影響を、ストレス刺激や感情、情動行動にたいする自律神経活動の反応を通して考察する。併せて、意識、認識、記憶等に関する最新の神経科学的所見について概説する。	
	メディア心理学	この授業では、現在、子どもだけでなく大人にも楽しまれることが多く、世帯普及率も高いTVゲーム（オンラインゲームも含む）について取り上げ、これらの使用が心理面や教育面、対人行動などに与える影響やその有効利用について概説していく。授業は、メディアの登場と共に浮上する悪影響論や反対の立場の効果論について説明し、実際の研究動向からそれらを検討していく。	
	化粧品概論	本講義では、化粧品配合成分及び処方設計の基本概念を理解し、皮膚との関わりを重視して化粧品に関する基礎知識を身につけることを目的とする。 ①化粧品の意義及び役割、②化粧品を構成する成分と処方設計の概要、③化粧品の品質、有用性・安全性・化粧品と皮膚との関係について概説する。また、化粧品の定義や医薬品、医薬部外品との違い、化粧品の成分表示、皮膚の構造や影響要因、カテゴリー別の化粧品の特長や配合成分等についても概説する。	
	サプリメント概論	生活習慣病とそれに関連する栄養素および機能性食品素材について理解し、近年健康の自己管理のために利用の高まっているサプリメントについて、素材、用途などを理解することを目的とする。企業で行われているサプリメントの製品開発に不可欠な技術、知識（素材、製造法、用途、関連法規等）を講義する。また海外のサプリメント素材、食品事情も紹介する。	
IV 現代社会に必要なリテラシーを身につける科目	⑥ 英語教育科目 英語コミュニケーションA（1）	テキストは、本授業を含めて「英語コミュニケーションD（2）」まで全学共通教材を用いる。また、受講者数を一定限度までとする少人数クラスで授業を実施する。教室では、話す練習をペアやグループで行い、さらにクイズ、インタビュー、ロールプレイなどを通してスピーキングの力を向上させる。学期中、2回のライティングの宿題提出が課せられる。それぞれ1稿目を提出し、教員の添削を受けて最終稿を提出する。受講者は、授業に積極的に参加することに加えて、授業の準備を十分行うことが求められる。本授業は前期科目であり、後期開講の「英語コミュニケーションA（2）」に引き続く。	
	英語コミュニケーションA（2）	授業は「英語コミュニケーションA（1）」に続く1年次後期科目として行う。少人数で授業を実施する。教室では、話す練習をペアやグループで行い、さらにクイズ、インタビュー、ロールプレイなどを通してスピーキングの力を向上させる。学期中、2回のライティングの宿題提出が課せられる。それぞれ1稿目を提出し、教員の添削を受けて最終稿を提出する。受講者は、授業に積極的に参加することに加えて、授業の準備を十分行うことが求められる。Special Projectとしてスクラップブックを作成する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語コミュニケーションB (1)	英語の音について、日本人と英語話者の発音を比較することで、英語の発音のしくみを学ぶ。この知識に基づいて、単語・短文などの発音練習を行い、英文を口頭で表現する場合に欠かせない「リズムとイントネーション」の使い方を身につけ表現力を一層高める。また、「目標語彙」(Target Vocabulary)を学習する。その後、教科書本文を「意味単位」(sense-unit)ごとに読むことで、日本語訳に頼らないで、英文の内容をよりの確に、しかも速く理解する力を養成する。こうした基礎訓練を通して、「読解力」「語彙力」を高めていく。	
	英語コミュニケーションB (2)	授業は「英語コミュニケーションB (1)」に続く1年次後期科目として行う。英語の発音のしくみを学んだ上で、単語・短文などの発音練習を行い、英文を口頭で表現する場合に欠かせない「リズムとイントネーション」の使い方を身につけ表現力を一層高める。また、「目標語彙」(Target Vocabulary)を学習した上で、教科書本文を「意味単位」(sense-unit)ごとに読むことで、日本語訳に頼らないで、英文の内容をよりの確に、しかも速く理解する力を養成する。こうした基礎訓練を通して、「読解力」「語彙力」を高めていく。	
	英語コミュニケーションC (1)	英語による会話に参加するために、リスニング、スピーキング、ペアワークなどの活動を通じて、モデル会話を学び練習する。また、英語による簡単なディスカッションができるようにする。さらに、自分自身の考えや意見を発展させ、英語で表現できるようにする。そして、口頭または作文による、英語のプレゼンテーション(個人)を行うために、自分の考えや意見をまとめられるようにする。本授業は前期科目であり、後期開講の「英語コミュニケーションC (2)」に引き続く。	
	英語コミュニケーションC (2)	授業は「英語コミュニケーションC (1)」に続く2年次後期科目として行う。したがって、英語による会話に参加するために、リスニング、スピーキング、ペアワークなどの活動を通じて、モデル会話を学び練習する。また、英語による簡単なディスカッションができるようにする。さらに、自分自身の考えや意見を発展させ、英語で表現できるようにする。そして、口頭または作文による、英語のプレゼンテーション(個人)を行うために、自分の考えや意見をまとめられるようにする。	
	英語コミュニケーションD (1)	英語運用能力を高めるために次のことを行う。(1)リスニングテキストを用いて15分程度、聴解力養成トレーニングをする。(2)CD(またはテープ)によるテキストの朗読を聴く。(3)重要な語句について学習する。(4)本文のポイント把握することによって、英文の内容を的確に理解する。(5)テキストの内容把握に関する練習問題に取り組む。(6)テキストの英文中、重要な箇所、難解な箇所について正しく理解する。	
	英語コミュニケーションD (2)	授業は「英語コミュニケーションD (1)」に続く2年次後期科目として行う。ついては、前期授業に引き続き次のことを行う。(1)リスニングテキストを用いて15分程度、聴解力養成トレーニングをする。(2)CD(またはテープ)によるテキストの朗読を聴く。(3)重要な語句について学習する。(4)本文のポイント把握することによって、英文の内容を的確に理解する。(5)テキストの内容把握に関する練習問題に取り組む。(6)テキストの英文中、重要な箇所、難解な箇所について正しく理解する。	
	英語コミュニケーションE (1)	3・4年次生を対象として、「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」の4技能を総合的に伸ばす。このことによって、中級レベルの英語運用能力を獲得する。授業では、教科書のユニットごとに、様々なトピックに関して4技能を用いたコミュニケーション活動や練習問題を行う。英語を書く練習には、文法問題と英作文の宿題が含まれる。	
	英語コミュニケーションE (2)	授業は「英語コミュニケーションE (1)」に続く後期科目として展開する。ついては、3・4年次生を対象として、「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」の4技能を総合的に伸ばすことによって、中級レベルの英語運用能力を獲得する。教科書のユニットごとに、様々なトピックに関して4技能を用いたコミュニケーション活動や練習問題を行う。英語を書く練習には、文法問題と英作文の宿題が含まれる。	
	英語コミュニケーションF (1)	3・4年次生を対象として、TOEICに出題された様々な問題を解くことによって、さらに英語運用能力を高める。学習の到達度を確認するため、学内で実施されるTOEIC I Pテストを各自が手続きをして受験し、スコアを提出させる。(到達目標としては、本試験で500点以上を獲得するレベルを目安としている。)また、授業の中で、数回の小テストを授業内容に関して実施する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
⑦外国語教育科目	英語コミュニケーションF(2)	授業は「英語コミュニケーションF(1)」に続く後期科目として展開する。すなわち、3・4年次生を対象として、TOEICに出題された様々な問題を解くことによって、さらに英語運用能力を高める。授業の中で、数回の小テストを授業内容に関して実施する。なお、学習の到達度を確認するため、学内で実施されるTOEIC I Pテストを各自が手続きをして受験し、スコアを提出させる。学習到達目標として、本試験で確実に500点以上を獲得できるようにする。	
	ドイツ語(1)	この授業では、ドイツ語の初級レベルの基本的文法理解の手ほどきをする。ドイツ語は、EUヨーロッパ連合で最大の話者数(9,000万人以上)を誇る言語であるばかりでなく、英語の姉妹語であり、両者の基本的文法構造と重要基礎語彙はかなり似ている。このことから、本授業では、教科書に沿ってドイツ語の初級文法をできるだけ英語と比較対照しながら進めていくとともに、ドイツ語圏諸国の文化紹介をビデオ等の補助教材を用いて行っていく。	
	ドイツ語(2)	前期に開講している「ドイツ語(1)」の後期開講の継続授業として展開する。教科書に沿って引き続きドイツ語の初級文法の学習をできるかぎり英語のそれと比較対照しながら進める。あわせて教科書に載っている練習問題を多くこなすことにより、ドイツ語の作文力を身につけ向上させていく。また、前期に引き続き、ドイツ語圏諸国(ドイツ以外にドイツ語を公用語としているオーストリアやスイス等の中欧の国々を含む)の文化紹介をビデオ等の補助教材を使って行う。	
	ドイツ語(3)	1年次に学習した「ドイツ語(1)」・「ドイツ語(2)」に引き続き、初級ドイツ語(発音練習、文法、簡単な読解)の学習を進める。長文読解は本授業では取り扱わない。基本的には、教科書に沿って授業を進めるが、各課毎にまず新しく学習する文法事項を説明し、教科書内の関連する練習問題および読解(ただし会話形式の文章)を行う。場合によってはプリントを用いたり受講者の理解度を確認するための小テストを行う。また、必要に応じて前学年次に学んだ事項の復習も行う。	
	ドイツ語(4)	これまでに学んだドイツ語をより発展的に学習する。ドイツ語という言語だけでなく、ドイツ語圏の地理、歴史、文化などにも多く触れる機会を設け、ドイツ語圏諸国全般にわたる理解をより深める。また、ドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタインといったドイツ語圏の国々の人々と旅行会話以上のコミュニケーションをとれるよう学習を進める。そのため、折を見てドイツ語圏の国々の文化等についてもさらなる紹介をし、ドイツ語圏諸国の知識を深める。	
	ドイツ語会話(1)	ドイツ語会話の入門としての授業である。すなわち、日常会話程度の基礎的なドイツ語コミュニケーション能力を総合的に養成する。例えば、ドイツ語圏の国々に旅行する際、簡単な会話を通して、ドイツ語で意思疎通ができるようなドイツ語の運用能力を身につける。取り扱う会話単位としては、発音練習、人と知り合いになる上での挨拶や自己紹介の仕方、簡単な日常会話、気持ちを伝えるための簡単な意思表示の仕方、など、基本的な会話が中心である。	
	ドイツ語会話(2)	前期開講の「ドイツ語会話(1)」で習得したドイツ語会話力をさらに高めることがこの授業の目的である。すなわち、簡単な会話を通して、ドイツ語で意思疎通ができるようなドイツ語の運用能力を身につける。前期同様、ネイティブスピーカーの教師のもとで学ぶことの有利性を活かし、会話を中心にドイツ語の総合的運用能力のさらなる育成を目指す。取り扱う会話単位としては、「趣味について」、「食事について」、「家族について」、「時刻と日付」などである。	
	ドイツ語会話(3)	1年次に学習した「ドイツ語会話(1)」・「ドイツ語会話(2)」に引き続き、ドイツ語の会話力をネイティブスピーカーの教師のもとでさらに高めていく。また、テキスト「Szenen 1」を使って、会話を中心にドイツ語の総合的運用能力(話す、聞く、書く、読む)のさらなる向上を目指す。会話単位としては、「道案内」、「一日の生活」、「休暇の過ごし方」、「手紙の書き方」、レストランとホテルで、「ショッピング」、「天気」、「病気」などさまざまなテーマを取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ドイツ語会話(4)	これまでの「ドイツ語会話(1)」～「ドイツ語会話(3)」までで学習したドイツ語コミュニケーション能力をさらに高めるとともに、受講者の自律、自習を促進することを目的とする。受講者の会話力を高めるために、時折り小グループやペアに分かれて授業を進める。また、テキスト「Szenen 2」を使って、街や旅行先のできごとを題材に、これまでに学んだドイツ語会話の総復習を行う。そして最終的には、ドイツ語技能検定試験の4級または3級の合格を視野に入れた語学力の養成を目指す。	
	フランス語(1)	フランス語の発音の仕方を覚えるとともに、簡単な文による意思疎通ができるようになるため、フランス語の骨格となる初級文法を学習する。後期開講の「フランス語(2)」へと続く一年間の授業の前半である。教科書に従ってフランス語の基本的文法を解説し、パターン練習を繰り返す。前期は特に、まずつづり字をフランス語風に読めるようになる(Parisは「パリス」ではなく「パリー」、toiletteは「トイレット」ではなく「トワレット」など)よう、発音の仕方の習得にもっとも力を入れる。	
	フランス語(2)	前期開講の「フランス語(1)」からの一年間の授業としての後期開講科目である。引き続きフランス語の発音の仕方を覚えるとともに、簡単な文による意思疎通ができるようになるため、フランス語の骨格をなす初級文法を学習する。ついでに、フランス語の基本を体系的に理解するとともに、知識をゆっくり確実に身につけて使いこなせるようにする。学習のため、実用フランス語技能検定5級の過去問等をのぞいてみたり、有名なシャンソンを聴いてみたりと、ヴァリエーションを広げて授業を進める。	
	フランス語(3)	1年次の文法の続きを学習し、簡単なフランス語を「読み、書き、話し、聴く」能力の基礎を完全に身につけるようにする。また、つづり字の読み方や既習の文法事項の重要な点(名詞の性数に伴う規則や重要な動詞の活用・複合過去・代名動詞など)については繰り返し復習するようにする。ミニ会話や例文を、つづり字と発音の規則を意識しながら読み、初めて見る文章でも大体正確に音読できるようになることを目指す。なお、CDを繰り返し聴いて、発音の練習をすることを課題とする。	
	フランス語(4)	「フランス語(3)」までの文法理解を基礎にして、さらにフランス語運用能力を高めていく。さまざまな種類の文章の読解を通して、文法事項の確認と有用表現の習得を目指す。そのため、会話やインタビュー、メール、説明文などいろいろなタイプの文を読み、文法事項が確実に理解されているかを確認する。その上で、フランス語文章の読解に必要な語彙や有用表現をできるだけ多く習得するとともに、CDを使った聴き取りや実際に使われているチラシやパンフレットなどから情報を読み取る練習を行う。	
	フランス語会話(1)	基礎的なフランス語会話を学習して、フランス語でコミュニケーションする態度を育てるのが本授業のねらいである。テキストとして使用するのは、日本の文化に興味を持ってやってきたパスカルというフランス人の男の子と「くみこ」という日本人の女の子の会話教材『パスカル オ ジャポン』である。このテキストを通じて、日常的なフランス語に触れながら、コミュニケーション能力を身につけていく。そして、基礎的な文法や日常生活に必要な言い回しを覚える。	
	フランス語会話(2)	「フランス語会話(1)」に続く授業として、引き続きテキストとして『パスカル オ ジャポン』を使用し、日常的かつ基本的なフランス語会話を学習する。挨拶の仕方や自己紹介の仕方を対話形式で練習したりするが、一番の目的としてはフランス語に親しむことに重点を置く。授業の中では、何をしているかを尋ねたり、場所を尋ねたり、あるいは「家族を語る」対話練習などを行う。また、文法として疑問文の作り方、否定文の作り方、否定疑問文の応答などについても学ぶ。	
	フランス語会話(3)	1年次に『パスカル オ ジャポン』で学習したことをもとに、テキストの後半を使ってフランス語会話の運用能力をさらに高めていく。授業では、教科書のビデオや写真を見ながら、フランス語の基礎的な表現を身近なものとして身につける。授業の中で多くの対話練習を行うが、具体的には「年齢の言い方」、「時刻の言い方」、「人の紹介の仕方」、「日常生活の表現」、「量を表す言い方」などを取り上げる。それらを通じて、フランス語やフランス文化により興味を持てるようにしていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	フランス語会話 (4)	1年次から学習してきた「フランス語会話(1)」～「フランス語会話(3)」までのフランス語会話の学びの総仕上げを行う。授業では、「命令形」や「比較級」の対話文、「過去のことを語る」対話文、「未来のことを語る」対話文などを使って、ペアで練習したり、教師(ネイティブスピーカー)と対話して正しく発音できるように指導していく。そして、フランス語を聞くだけでなく、日常的なことなら話題についてフランス語で話すことができるところまで会話力を高める。	
	スペイン語(1)	本授業は、スペイン語入門のためのコースである。スペイン語の発音の仕方を覚え、スペイン語の骨格を成す初級文法をマスターすることが授業の目的である。ついでに、教科書にしたがって、スペイン語の基本的な文法を解説するとともに、基本的な言い回しの練習を行う。そうしたことを通じて、スペイン語を運用するための基本となる文法知識を学ぶ。授業では最初に、スペイン語圏諸国の紹介を行い、続いてスペイン語の発音・アクセントから始まって、名詞、形容詞などの品詞の使い方などを説明する。	
	スペイン語(2)	前期開講の「スペイン語(1)」に引き続き、スペイン語の骨格を成す初級文法を学習していく。「スペイン語(1)」で取り扱った品詞以外の品詞の使い方や、人称代名詞直接目的格、現在形不規則変化動詞、所有形容詞などについて説明する。また、比較級や不定語と否定語についても説明する。授業の中では、練習問題や訳読を行い、そうしたことを通じてスペイン語を運用する上での基本となる文法知識や言い回しがしっかりと身につくようにしていく。	
	スペイン語(3)	1年次に学習した「スペイン語(1)」「スペイン語(2)」を基に、引き続き初級スペイン語の学習を進める。まずは、簡単なスペイン語の「読み、書き、話す、聴く」の4能力の基礎を確実なものにしていくことに重点を置く。具体的な授業内容としては、「点過去形規則動詞の活用と用法」、「点過去形不規則動詞の活用と用法」、「線過去形の活用と用法」、「未来形の活用と用法」、「直接法の解説」などである。なお、文法上の解説に合わせ、練習問題を行うとともに、訳読演習も行う。	
	スペイン語(4)	スペイン語(3)の教科書を引き続き使用し、既習の直説法の用法をふまえ、接続法と命令法を学ぶ。前半では接続法現在を名詞節、副詞節、関係詞節にわけて学ぶ。接続法現在の活用を覚えた後、後半では命令文を学習する。スペイン語の命令文は、肯定命令と否定命令で動詞の形や、人称代名詞の位置が異なるので、ドリル形式の問題や口頭練習を繰り返し行う。また、授業では随時、雑誌や新聞などのスペイン語圏の様々なメディアを使用するが、それらを通じてスペイン語圏の社会や文化についても学んでいく。	
	スペイン語会話 (1)	スペイン語会話の入門編の授業である。まずは、スペイン語を使って、簡単な挨拶等ができるようにする。授業では、毎回教科書に沿って進め、会話をドリル練習したりして文章を復唱することにより、慣用表現をしゅうとくすることに力を入れる。その意味でも、スペイン語の発音を重視して、しっかりした発音に基づく会話ができるように指導していく。また、会話を通じて、スペイン語の語彙や基礎的な文法も併せて学べるようにする。なお、スペインの日常生活や文化についても授業の中で紹介する。	
	スペイン語会話 (2)	前期開講の「スペイン語会話(1)」に引き続き、スペイン語会話の入門としての授業を、テキストに沿って会話練習を中心にして進める。前期からの授業同様、反復練習に重点を置くので、予習、復習、授業での積極的な参加が必要である。授業の中での会話のテーマとしては、「基本的な挨拶の仕方」、「自己紹介の仕方」、「数字、住所の言い方」、「時間、日にち曜日の言い方」、「家の中の様子の言い方」など、日常生活に直結したものを多く取り上げる。	
	スペイン語会話 (3)	1年次に学習したスペイン語会話に引き続き、ネイティブスピーカーの指導によりスペイン語の会話力をさらに高めていく。授業の中での会話のテーマとしては、「天候について話す」、「先のことや計画について話す」、「ホテルやレストランを予約する」、「料理や飲み物を注文する」、「買い物をする」、「値段を聞く」、「物を説明したり比べたりする」など、日常生活や旅行をしたときなどに役立つ表現を多く取り上げる。	
	スペイン語会話 (4)	2年間のスペイン語会話の総仕上げとしての授業を行う。授業の中で取り上げる会話のテーマも、「意見を言う」、「経験したことを話す」、「謝る、理由を述べる」、「電話で話す」、「体の調子について話す」、「交通のことを話す」、「許可を得る、禁止する」、「助けを求める、頼みごとをする」、「助言する」、「指示をする」など、コミュニケーションの幅を広げるために、日常よくある題材を多く取り上げる。そして、簡単なスペイン語なら聞き取ることができ、また自分の言いたいことを相手にきちんと伝えられるようにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中国語（１）	中国語の基本文型を学習し、文を正しい順序で作ることができるようにする。また文法に基づきながら、中国語の簡単な会話文を理解できるようにする。特に初級者を対象とするため、まず教科書にしたがって発音練習を行う。その後、中国語の基本文型を学習しながら、単語の入れ替え練習などで文法を習熟させる。また、教科書の会話に基づいて、簡単な自己紹介ができるようにする。そのほか、授業を通して中国語文化についても紹介し、中国語を広い視点から理解できるようにする。	
	中国語（２）	前期に引き続き、教科書本文の反復練習により、単語に習熟し、基礎文法を学習する。また、前期で学習した発音をチェックし、正しい発音で中国語が読めるようになっていない場合は、正しい発音の練習を行う。その上で、基本単語の習熟と基礎文法の学習に努め、教科書本文の会話を使って簡単な日常会話に対応できるように、また、文を正しい順序で作ることができるようにする。前期同様、中国語文化についても授業の中で紹介をし、中国語を広い視点から理解できるようにする。	
	中国語（３）	本授業は、中国語による簡単な文の読解を中心とし、文法に留意しつつ、中国語運用能力の創造的な向上を目指すことにある。については、1年次の「中国語（１）」と「中国語（２）」で学んだことを基礎に、引き続き中国語文化についての会話を使って、日本人が間違えやすい表現や複文の呼応についてなど、やや高度な文法知識に基づく学習をする。またあわせて、本文を通じて中国語文化に対する理解も得られるよう、授業を進めていく。	
	中国語（４）	「中国語（１）」～「中国語（３）」までの総復習をするとともに、中国語の運用能力に磨きをかけることが本授業のねらいである。授業では引き続き、テキスト『中国語実力アップ教本』による中国語文化についての会話を使って、さらに高度な文法知識を学習していく。また、あわせて中国語に対する知識習得に努め、広い視野で中国語を捉えることができるよう理解を深める。	
	中国語会話（１）	中国語会話の入門として、まずはきちんとした中国語が話せるように発音に重点をおいて練習・学習を進める。については、母音、鼻母音、子音、音調、軽声、変調など、発音上の注意事項を説明し、中国語の発音が理解できるようにする。また、自己紹介を中心に、日常生活のさまざまな場面の会話（名前の聞き方、物の尋ね方、年齢の聞き方、曜日や日にちの聞き方、場所の聞き方、など）を練習する。そして、学習した文型を利用しながら、自分が話したい内容を中国語で表現できるように指導する。	
	中国語会話（２）	前期の「中国語会話（１）」に続き、自己紹介を中心に、日常生活のさまざまな場面の会話を練習する。また、学習した文型を利用しながら、自分が話したい内容を中国語で表現できるように指導する。テキストには『一目瞭然中国語入門』を使用し、「あなたは何人家族ですか」「あなたはどんな趣味をお持ちですか」など、日常よくあるものを数多く取り上げ、日常会話に直結した会話の練習を行う。	
	中国語会話（３）	「中国語会話（１）」や「中国語会話（２）」で1年間学習した中国語の会話力（コミュニケーション能力）のさらなる向上を目指す。については、文法事項を説明しながら、入替練習を繰り返し行う。また、引き続き日常よくある会話例について、対話練習を重ねて応用力を養うとともに、より流暢に中国語で会話することができるようにする。	
	中国語会話（４）	これまでに学習した文型を運用して、実際に中国人との簡単なコミュニケーションがとれるようにする。そのため、文法事項を説明しながら、引き続き入替練習を繰り返しおこなう。また、授業においては日常生活のさまざまな場面を設定し、教科書の会話文型を利用しながら、自分の言いたいこと・話したいことの内容を表現してみる対話練習を多く行う。そして、応用力を養い、より流暢に中国語で会話することができるようにする。	
	韓国・朝鮮語（１）	韓国は、日本から見て地理的に一番近い国であり、歴史的にももっとも密接な関係を持っている国である。韓国の文字であるハングルの歴史と創製原理を考察し、韓国語の言語的特徴と構造を日本語と比較しながら学習する。文字の読み方・つづり方及び発音規則等の韓国語学習の基礎を固めるとともに、韓国語を通じて韓国人とその文化に対する理解を深めていくのが本授業の目的である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	韓国・朝鮮語(2)	発音の復習、発音規則の確認など、前期の授業(「韓国・朝鮮語(1)」)で学習した内容の復習から始め、さらに韓国語の基礎文法に対する知識を学習する。また、韓国の歴史や文化に関する話題も豊富に取り入れ、言葉の根底にある歴史的伝統や文化的背景に対する理解も深めていく。あわせて、発音規則に沿ったセンテンス読みの練習をしながら、基礎文法に対する正確な知識と基礎語彙を覚えていく。	
	韓国・朝鮮語(3)	文字の読み方、発音規則、助詞など、1年次で学習した内容の復習から始め、センテンスの自然な読み方と基礎文法を身につけていく。また、ドラマなどで見られる現代韓国を通して、韓国の歴史や文化に関する話題も豊富に取り入れ、言葉の根底にある歴史的伝統や文化的背景に対する理解をさらに深めていく。1年次での学びと同様、発音規則に沿った文の読み方をきちんと身につけることはもちろん、叙法と待遇法などの用語活用、疑問詞、数詞、過去形と副詞形語尾、否定文、といった基礎文法がしっかり身につくようにする。	
	韓国・朝鮮語(4)	前期の「韓国・朝鮮語(3)」に続き、基礎語彙で構成されている基本文型を通して、連体形、連用形などの用言の語尾活用を徹底的に練習していく。また、韓国語の慣用語句の学習を通して韓国人の生活感覚に接近していく。そして、文法の基礎知識を完全なものとするとともに、読解力と作文力を身につけ、最終的には韓国語能力試験の2級(ハングル検定4級)以上の合格レベルを目指して学習を進め、一人でも韓国旅行ができる必要最低限の知識を身につけていく。	
	韓国・朝鮮語会話(1)	韓国のテレビドラマを見ながら、挨拶・自己紹介・買い物などの日常生活に必要な表現や決まり文句などを、まずは文字から離れて耳と口で覚えていく。大きい声で繰り返して発音することによって、頭の中で言葉を組み立てるのではなく、自然に口から言葉が出てくるように練習する。その過程の中で、文字や文法に対する知識も身につけるとともに、ドラマを通して韓国人の慣習、文化、生活感覚に対する理解を深めていく。	
	韓国・朝鮮語会話(2)	前期の授業(「韓国・朝鮮語会話(1)」)に引き続き、韓国のテレビドラマを見ながら、挨拶などの日常生活に必要な表現や決まり文句などを、文字から離れて耳と口で覚えていく。前期授業と同様、大きい声で繰り返して発音することによって、頭の中で言葉を組み立てるのではなく、自然に口から言葉が出てくるように練習する。授業に中での会話練習では、願望・依頼・勧誘・許可・禁止・好き嫌い・可能・義務・意図・推量・後悔といった各表現の仕方を学ぶ。	
	韓国・朝鮮語会話(3)	ドラマで生きた韓国語に接することによって聞く(listening)、話す(speaking)能力を高めると同時に、韓国人の習慣、文化、生活感覚及び慣用語や流行語などに馴染んでいく。毎回の授業では、40分間程度、辞書の使い方を具体的に紹介しながらドラマの台詞を読んで解説し、20分間ドラマを見る。そして、残りの時間は会話の練習をする。韓国語会話のさまざまな表現を身につけると、辞書を使って台本を読解できる能力を養うことが本授業の目的である。	
	韓国・朝鮮語会話(4)	韓国語会話の総復習と総括をすることを通じて、会話を中心とした韓国語運用能力を韓国語能力試験の2級(ハングル検定4級)以上の合格レベルまで引き上げることが本授業の目標となる。前期同様、毎回の授業では、40分間程度、ドラマの台詞を読んで解説し、20分間ドラマを見る。そして、残りの時間を会話の練習に当てるが、授業時に配布するテキスト資料の会話例なども参考に、聞く(listening)、話す(speaking)能力をさらに高め、一人でも韓国旅行ができる必要最低限の会話力を身につけていく。	
⑧情報教育科目	情報リテラシー	高度に情報化の進んだ現在、私達はさまざまな情報の中で生活している。情報は、正しく利用すれば生きていくうえでとても役立つ知恵を与えてくれるはずで、そのためには最小限の知識とコンピュータの操作方法を学ばなくてはならない。本授業では、コンピュータの基礎機能や仕組みを知り、パソコンの基本操作、ワープロ機能、画像処理、情報倫理、情報検索・発信、表計算、プレゼンテーションと一通りの学習を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	I T活用A	<p>前期「3次元コンピュータ・グラフィックス」(53 西尾吉男) CG(コンピュータ・グラフィックス)ソフトを活用しながら3次元CGの基礎を身につけることを目的とする。Povray独特の記述方法の習得と3次元空間における表現の基礎学習により、操作方法とCGを作るプロセスを習得する。基本図形の制作や位置の調整、テクスチャの貼り付け方や質感の表現、光源の設定などをいくつかのサンプル作品を制作しながら覚えていく。また各自のアイデアによる作品の制作を通じて、CGを作る基本から応用までを学習し自らの表現力を磨く。</p> <p>後期「クラウド・コンピューティング」(78 後藤 昌人) Googleが企業向けのオンラインスイートGoogle Appsを発表してLotusやMicrosoftやサイボウズの領域に侵入している。本格的なクラウドコンピューティングを背景にして、ついに企業の本丸に殴り込んだのである。金城学院大学では2008年からGoogle Appsを導入している。本授業では多くの人にとって未知の可能性を秘めたクラウドコンピューティングの世界を知り、体験することを目的とする。この授業ではGoogle Appsコミュニケーションツール、コラボレーションツールを実際に使いながらクラウドコンピューティングの利便性の検証をする。</p>	
	I T活用B	<p>動画作成編集 動画コンテンツを作成することを目的とする。動画は視聴者に何か訴えるものが必要である。取材交渉の仕方や台本の書き方から始まり、ディレクター、MC(レポーター)、カメラマン、音声(サウンドエフェクト兼務)、照明係のチームとして動画の素材を一つ一つそろえるプロセスを修得する。そして動画編集ソフトを使って撮影した映像をデジタル編集する技術を学ぶ。また、この授業では地上デジタル放送時代における動画コンテンツを制作する側から実際に体験することを目標にすると同時に、インターネット放送という新しいメディアを見据えた動画コンテンツのあり方を学ぶ。</p>	
	I T活用C	<p>Webプログラミング入門 クラウド・コンピューティングの時代を迎え、Web上で速やかに動くアプリケーションの開発が注目されている。授業では、このような開発を行うためのWebプログラミングを初歩から学習し、アプリケーションを含むグラフィカルなWebページを作成していく。授業内容には、プログラムの基本構造、データや変数の概念、制御構文、例外処理、グラフィックス・メソッドなどプログラミング言語に不可欠な学習も含まれるが、プログラム開発環境を使用して、わかりやすく解説していく。</p>	
	I T活用D	<p>Webページデザイン インターネットは、情報収集・検索する手段を与えてくれたばかりでなく、世界に向けて情報を発信する新しいコミュニケーション手段を与えてくれた。授業では、インターネット上で情報を発信するための言語であるHTML(Hypertext Markup Language)とスタイル部分を担当するCSS(Cascading Style Sheet)を学習して行く。HTML・CSSおよびWebページ開発ソフトを用いて、自らデザインしたWebページを作成する。Webサーバに関する知識や取り扱い、データ転送技術も学習する。</p>	
	I T活用E	<p>データベース入門 現在では様々な情報の管理・利用がコンピュータによって行われ、それらの情報はデータベースとして蓄積されている。この情報が効率的に整理され、いつでも必要な情報を取り出し、自由に組み合わせる利用ができるデータベースを、自分で設計し、作成できる能力を身につける。リレーショナルデータベースのアプリケーションソフトウェア(Access)を用いて、実際にデータベースを設計・作成し、クエリー・レポートの作成を中心とした演習を実施し、データベースの応用分野を考慮しながら、演習を行う。</p>	
	I T活用F	<p>デスクトップ・パブリッシング入門 現在の印刷物の多くは、DTP(デスクトップ・パブリッシング)と呼ばれる技術で制作されている。この授業では、写真、イラスト、グラフィックスを統合したイメージ・ビジュアル制作の基礎を学びながら、文書と画像で構成されるパンフレットや雑誌等の編集技術を学んでいく。画像処理や文字指定、レイアウトといった要素の入った印刷媒体の作品の制作を通し、将来、出版社や一般企業の広報部門など様々な分野で仕事する上で役立つスキルを習得する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	I T活用G	<p>コンピュータ・デザイン</p> <p>コンピュータを活用すると、写真画像からイラストや絵画などを簡単に作成ができる。この授業では画像ソフトを使用し、描画や画像処理などの基礎的な知識・技術とその活用法を実際の制作を通じて紹介する。</p> <p>コンピュータはMacを使用し、CGソフトはPhotoshopやIllustratorを予定している。毎時間、最初にCGソフトの操作方法を概説し、その後、各自に制作をしてもらうことで知識と操作スキル、そして作品上での表現をトータル的に学習する。</p>	
⑨ キャリア開発教育科目	キャリア開発A	<p>今日の社会では人生の選択肢が広がり、自分らしい生き方の開拓、すなわち自律的なキャリア開発が強く求められている。本授業の目的は、講義と体験学習の両面からアプローチし、キャリア開発に必要な基礎知識とスキルの修得を目指す。授業では、まずキャリア・デザインの重要性について学ぶ。次に、自分のこれからの大学生活や卒業後の進路について考える。そのために、自己分析のためのキャリア・アセスメントの実施、職業・資格研究、そして自らの今後のキャリアをデザインし、そのプレゼンテーションなどを行う。またそのほか、マナー講習や講演会なども予定する。</p>	
	キャリア開発B	<p>社会生活において円滑な人間関係を築くには、基本的なマナーを身につけ、コミュニケーション能力を高めることが不可欠である。授業では、講義をとおしてマナーとコミュニケーションに関する知識を習得し、ロールプレーや実技によりソーシャルスキルを向上させる。また、マナーの背後にある他者への思いやり、相手の考え方や気持ちをきちんと受け止めること、自分の考えや気持ちを適切に相手に伝えることの重要性について理解を促し、共感能力を高め、人間力を養うことを目指す。</p>	
	キャリア開発C	<p>わが国における女性のライフスタイルは、この数十年間で大きな変貌を上げている。女性の生き方の多様化は、職業観、結婚観、家庭観などにも大きく影響し、その結果かえって生き方に悩む女性も見受けられる。社会人になる前段階の大学生活において、時間をかけて将来の生き方を考えることは重要な課題であろう。本授業では、結婚、出産、育児、仕事と家庭の両立、子育て後の家庭生活などのテーマについて具体的な事例やトピックを紹介し、ディスカッションを交えながら、豊かで実り多い人生設計の指針を得ることを目的とする。</p>	
	キャリア開発D	<p>キャリア開発A～Cで学んだキャリアに関する基礎知識を、より自分に身近で現実的な課題として理解・考察することが本授業のねらいである。そのため本授業では、「社会でいきいき働く女性たち」をテーマに、社会の諸領域で活躍しているゲストによるミニ講演を中心に授業を進める。ゲストは、航空、マスコミ、ファッション、人材派遣などの業界の企業の一員として、また、税理士、研究者などの専門職としてキャリアを築いている本学の卒業生約10名を予定し、就業のきっかけ、仕事の喜び、やりがい、苦労したことなども語ってもらう。</p>	
	キャリア開発E	<p>授業のサブタイトルを、「大企業のトップに学ぶ“キャリアの本当の意味”」とし、東海地区の大企業11社より、会長あるいは社長レベルの方を客員教授としてお招きして、ご自身のワークキャリアやライフスタイルについての経験やお考えを伺う。それを通じて、「職業」や「働くこと」さらには「人生」についての理解を深める。各回とも、講話の感想については小レポートを求める。さらに、最終授業では総括としてのまとめのレポートを求める。また、講話を参考に、授業の初回および中間の2回では、職種別の業界研究や企業・会社研究を行う。</p>	
	キャリア開発F	<p>本授業では、これまでのキャリア開発の授業を踏まえ、働く女性の現状を復習した後に、社会人生活の初期に直面するキャリア上の課題を考えていく。その上で、上司との関係、メンタルヘルス、仕事と家庭の両立といった社会人生活を送る上で重要なテーマを取り上げる。次に、企業における女性キャリア支援策の実態や人事評価の実態などについて演習を通じて理解を深める。すなわち本授業のねらいは、将来の職業生活に役立つ知識の獲得にある。</p>	
	キャリア開発G (1)	<p>本授業のねらいは、インターンシップの目的やそのメリットを学び、仕事や就職に対する意識を高めることにある。については、インターンシップに向けて、企業で求められるマナーやビジネススキルを、実践を通じて学ぶ。また、企業内で様々な職務を行う際に求められる基本的な問題解決能力や論理的思考についても演習形式で習得を目指す。本授業を通じて、自信を持ってインターンシップ体験が出来る準備を行うと同時に、近い将来社会人となる「社会人予備軍」としての自覚を高める。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	キャリア開発G (2)	授業に支障のない夏期休暇期間を中心に、実際に企業・団体で就業体験を行う。研修内容は企業・団体によって異なるが、就業上の実体験をする点で共通である。1年次に必修科目として受講した「キャリア開発A」や2年次でインターンシップ準備として受講した「キャリア開発(1)」等、キャリア開発教育科目のまとめとしての科目となる。学内(教室)で行う授業は、4月に1回、5～6月に開催するビジネスマナー研修3回、11月下旬に行う事後報告会1回の計5回である。なお、本授業を履修するためには、「キャリア開発G(1)」を先に受講していることが必要である。	
V ス ポ ー ツ を 通 じ て 健 康 増 進 を 図 る 科 目	⑩ S & E 教 育 科 目 ス ポ ー ツ ・ ア ン ド ・ エ ク サ サ イ ズ A	種目はテニス/テニスの基本技術を習得し、生涯スポーツの一種目として実践できるようにする。前半では、基本技術の反復練習に多くの時間を割く。必要に応じてVTR撮影により各自のフォームをチェックする。徐々に応用練習を加え、ミニ・ゲームなどによりゲームにおける基本技術の重要さを認識する。後半では、グラウンド・ストロークのコースの打ち分けとランニング・ショットなど、技術の応用を学ぶ。最終的にはフルコートのゲームを楽しめるようにする。	
	ス ポ ー ツ ・ ア ン ド ・ エ ク サ サ イ ズ B	種目はゴルフ/ゴルフの基本技術を習得し、生涯スポーツの一種目として実践できるようにする。そのためにはどのように体を動かす事が合理的であるかといった基礎知識を得ることを中心に進める。必要に応じてVTR撮影によるフォームのチェックを行う。技術の向上は打球数に比例するともいわれることから、できるだけボールを多く打つことを心がける。実際にコースに出ることはないが、ゴルフ場でのマナーや競技上のルールについても理解を深める。	
	ス ポ ー ツ ・ ア ン ド ・ エ ク サ サ イ ズ C	種目はバドミントン/バドミントンの基本技術を習得し、生涯スポーツの一種目として実践できるようにする。ねらった場所にシャトルが打てるようになるための基本技術の反復練習と、ルール等の基礎知識を得ることを中心に進める。できるだけラリーを続けることを心がけるが、比較的早い段階からゲームを取り入れ、実戦的な練習も多く行う。必要に応じてVTR撮影によるフォームのチェックを行い、技術の向上を目指す。	
	ス ポ ー ツ ・ ア ン ド ・ エ ク サ サ イ ズ D	種目は卓球/卓球の基本技術を習得し、生涯スポーツの一種目として実践できるようにする。基本技術の反復練習と、ねらった場所にボールを打てるようになるためにはどのように体を動かす事が合理的であるかといった基礎知識を得ることを中心に進める。できるだけラリーを続けることを心がけるが、比較的早い段階からゲームを取り入れ、実戦的な練習も多くおこなう。必要に応じてVTR撮影によるフォームのチェックをおこない、技術の向上を目指す。	
	ス ポ ー ツ ・ ア ン ド ・ エ ク サ サ イ ズ E	種目はバレーボール/バレーボールの基本技術を習得し、生涯スポーツの一種目として実践できるようにする。バレーボールは高校までの学校体育の中で、多くの人が最も回数多く経験しているにもかかわらず、基本技術の習得が不十分で、ゲームの理解も非常に未熟な種目である。大学では基本技術とゲームの理解の向上が、直接ゲームを楽しむことに結びつくような形で授業を進める。	
	ス ポ ー ツ ・ ア ン ド ・ エ ク サ サ イ ズ F	種目はライトスポーツ/これまであまり体験する機会の少なかったスポーツ種目を複数取り上げ、スポーツを行う楽しさを実感し、運動を嫌う人たちが生涯に渡ってスポーツを実践するきっかけをつくとともに、運動の持つ様々な意味を生生涯スポーツの観点から学ぶ。ソフト・バレーボール、キック・ベースボール、サッカー、アルティメット・フリスビー、グラウンド・ゴルフ、インディアカ、エアロビクス・ダンス、ダンベル体操、ウォーキングなどの種目の中から、天候を考慮してその時間に行う種目を決める。この授業はできるだけ楽しく運動に親しむことを目指す。	
	ス ポ ー ツ ・ ア ン ド ・ エ ク サ サ イ ズ G	種目は野外スポーツ実習/生涯スポーツの一つとなり得るウェイクボードやカヤックなどの水上スポーツ、トレッキング(夏期)、スキー、スノーボード等の雪上スポーツ(冬期)など、さまざまな野外スポーツにおける基礎的な技術の習得を図るとともに、安全に野外スポーツを行うための知識を身につける。そして、各野外スポーツの持つ特性を理解し、人間と自然との関わりや共同生活を通じた社会性の育成について理解する。また、新しい体験やチャレンジを通して、知性・感性豊かな社会人としての素養を身につける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	スポーツ・アンド・エクササイズ H	種目はヘルシーエクササイズ／運動不足を感じている3・4年次生を対象に、生涯スポーツの重要性と健康体力の維持・増進を目的として開講する。したがって、特定スポーツの技術習得よりも、むしろ健康体力メカニズムの理解、健康体の維持・増進の実践的方法の習得に重点を置く。日常的に実践できるストレッチ体操なども紹介する。体力に関しては、より客観的に把握するために体力診断テストも導入して実施する。	
VI アクティ ブ・ラー ニング 科目	⑪ プロ ジェ クト 科目		
	海外研修A	海外での語学研修プログラムに参加するなどして、一定期間を海外で過ごすことで様々な体験をし、それによって国内では学び得ないようなことを学ぶ。大学主催のプログラムだけでなく、学生自身が興味深いと思うプログラムでも単位取得に値すると判断される場合は、それに参加して十分な成果をあげた学生に対して単位取得を認める。(研修先が北米の場合)	
	海外研修B	海外での語学研修プログラムに参加するなどして、一定期間を海外で過ごすことで様々な体験をし、それによって国内では学び得ないようなことを学ぶ。大学主催のプログラムだけでなく、学生自身が興味深いと思うプログラムでも単位取得に値すると判断される場合は、それに参加して十分な成果をあげた学生に対して単位取得を認める。(研修先がイギリスの場合)	
	海外研修C	海外での語学研修プログラムに参加するなどして、一定期間を海外で過ごすことで様々な体験をし、それによって国内では学び得ないようなことを学ぶ。大学主催のプログラムだけでなく、学生自身が興味深いと思うプログラムでも単位取得に値すると判断される場合は、それに参加して十分な成果をあげた学生に対して単位取得を認める。(研修先がオーストラリアの場合)	
	海外研修D	海外での語学研修プログラムに参加するなどして、一定期間を海外で過ごすことで様々な体験をし、それによって国内では学び得ないようなことを学ぶ。大学主催のプログラムだけでなく、学生自身が興味深いと思うプログラムでも単位取得に値すると判断される場合は、それに参加して十分な成果をあげた学生に対して単位取得を認める。(研修先が中国の場合)	
	海外研修E	海外での語学研修プログラムに参加するなどして、一定期間を海外で過ごすことで様々な体験をし、それによって国内では学び得ないようなことを学ぶ。大学主催のプログラムだけでなく、学生自身が興味深いと思うプログラムでも単位取得に値すると判断される場合は、それに参加して十分な成果をあげた学生に対して単位取得を認める。(研修先が北米、イギリス、オーストラリアおよび中国以外の場合)	
	異文化体験	国の内外を問わず、異文化交流を行い、その体験を通して異文化理解を図る。海外でのボランティア活動、定住外国人への日本語教育支援など様々な活動を通しての異文化体験が対象となる。学生自身が興味深いと思うプログラムが単位取得に値すると判断される場合は、それに参加し十分な成果をあげた学生に対して単位取得を認める。	
	ボランティア活動	障がい学生支援など、学内にも大学主催のボランティアプロジェクトがいくつか存在する。それらに参加することによって、学生はボランティアの意義を体験的に学び、社会での様々なボランティア活動に積極的に参加する姿勢を身につける。また、支援活動を通じて、人とどのように関わるかについても学ぶ。学外でのボランティア活動を含め、そのボランティア活動の内容が単位取得に値すると判断される場合は、それに参加し十分な成果をあげた学生に対して単位取得を認める。	
	学生プロジェクト	学生自身が何かの問題に関心を持ち、それを解決するための方策を考案し、実施し、成果をあげるという過程を通じて、問題解決型の学習をする。一つの取組をチームで行うこともできる。したがって、どのようなテーマであれ、学生(共同の場合を含む)が取り組む企画を提案してきた場合で、その取組内容が単位取得に値すると判断される場合は、これを「学生プロジェクト」の科目名で単位取得を認める。	
単位 認定 科目	外国語検定(英語コミュニケーションA)	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定(英語コミュニケーションA)」は、実用英語技能検定試験(英検)準1級合格、TOEFL510点、TOEIC750点、国際連合公用語・英語検定試験(国連英検)B級合格、ケンブリッジ大学英語能力検定試験CAE(1級)合格までの会話とライティングを中心とする成果に係る学修に相応する科目として設定している。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	外国語検定（英語コミュニケーションB）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（英語コミュニケーションB）」は、実用英語技能検定試験（英検）2級合格まで、TOEFL510点まで、TOEIC650点まで、国際連合公用語・英語検定試験（国連英検）C級合格まで、ケンブリッジ大学英語能力検定試験PET（2級）合格までの成果に係る学修（会話とライティングを除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（英語コミュニケーションC）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（英語コミュニケーションC）」は、実用英語技能検定試験（英検）1級合格、TOEFL511点以上、TOEIC751点以上、国際連合公用語・英語検定試験（国連英検）A級合格、ケンブリッジ大学英語能力検定試験CPE（特級）合格に対する成果に係る会話とライティングを中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（英語コミュニケーションD）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（英語コミュニケーションD）」は、実用英語技能検定試験（英検）準1級合格以上、TOEFL511点以上、TOEIC651点以上、国際連合公用語・英語検定試験（国連英検）B級合格以上、ケンブリッジ大学英語能力検定試験CAE（1級）合格以上の成果に係る学修（会話とライティングを除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（ドイツ語1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（ドイツ語1、2）」は、ドイツ語技能検定試験2級合格までの成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（ドイツ語3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（ドイツ語3、4）」は、ドイツ語技能検定試験準1級以上の合格に対する成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（ドイツ語会話1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（ドイツ語会話1、2）」は、ドイツ語技能検定試験2級合格までの成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（ドイツ語会話3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（ドイツ語会話3、4）」は、ドイツ語技能検定試験準1級以上の合格に対する成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（フランス語1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（フランス語1、2）」は、実用フランス語技能検定試験2級合格までの成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（フランス語3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（フランス語3、4）」は、実用フランス語技能検定試験準1級以上の合格に対する成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（フランス語会話1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（フランス語会話1、2）」は、実用フランス語技能検定試験準1級合格までの成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	外国語検定（フランス語会話3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（フランス語会話3、4）」は、実用フランス語技能検定試験1級合格に対する成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（スペイン語1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（スペイン語1、2）」は、スペイン語技能検定試験3級合格までの成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（スペイン語3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（スペイン語3、4）」は、スペイン語技能検定試験2級以上の合格に対する成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（スペイン語会話1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（スペイン語会話1、2）」は、スペイン語技能検定試験2級合格までの成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（スペイン語会話3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（スペイン語会話3、4）」は、スペイン語技能検定試験1級合格に対する成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（中国語1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（中国語1、2）」は、中国語検定試験2級合格までの成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（中国語3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（中国語3、4）」は、中国語検定試験準1級以上の合格に対する成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（中国語会話1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（中国語会話1、2）」は、中国語検定試験準1級合格までの成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（中国語会話3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（中国語会話3、4）」は、中国語検定試験1級合格に対する成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（韓国・朝鮮語1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（韓国・朝鮮語1、2）」は、韓国語能力試験4級合格またはハングル能力検定試験2級合格までの成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（韓国・朝鮮語3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（韓国・朝鮮語3、4）」は、韓国語能力試験5級以上またはハングル能力検定試験準1級以上の合格に対する成果に係る学修（会話を除く）に相応する科目として設定している。	
	外国語検定（韓国・朝鮮語会話1、2）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（韓国・朝鮮語会話1、2）」は、韓国語能力試験5級合格またはハングル能力検定試験準1級合格までの成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	外国語検定（韓国・朝鮮語会話3、4）	教育上有益と認められるときは、外国語検定試験等の合格または成果に係る学修を、その内容の程度に応じて、本学において修得したものとみなし、単位認定する。「外国語検定（韓国・朝鮮語会話3、4）」は、韓国語能力試験6級合格またはハングル能力検定試験1級合格に対する成果に係る会話を中心とする学修に相応する科目として設定している。	
日本語及び日本事情に関する科目	日本語201	「日本語202」の前期科目として開講する。日本語検定3～4級程度の、主として非漢字圏の留学生を対象とし、日本語運用能力の向上を目指す。読む、書く、聞く、話す、の日本語の4技能を個別の科目で学習させるのではなく、それを統合した総合的科目として設定し、複数の担当者が授業目標・教授法・教材等に関するコーディネーションのもとに週5回（中級レベル）の授業を行う。	
	日本語202	「日本語201」の後期科目として開講する。日本語検定3～4級程度の、主として非漢字圏の留学生を対象とし、日本語運用能力の向上を目指す。読む、書く、聞く、話す、の日本語の4技能を個別の科目で学習させるのではなく、それを統合した総合的科目として設定し、複数の担当者が授業目標・教授法・教材等に関するコーディネーションのもとに週5回（中級レベル）の授業を行う。	
	日本語300	「日本語301」の前期科目として開講する。読む、書く、聞く、話す、の日本語の4技能を個別の科目で学習させるのではなく、それを統合した総合的科目として設定し、複数の担当者が授業目標・教授法・教材等に関するコーディネーションのもとに週2回（中・上級レベル）の授業を行う。	
	日本語301	「日本語300」の後期科目として開講する。読む、書く、聞く、話す、の日本語の4技能を個別の科目で学習させるのではなく、それを統合した総合的科目として設定し、複数の担当者が授業目標・教授法・教材等に関するコーディネーションのもとに週2回（中・上級レベル）の授業を行う。	
	日本語400	上級日本語能力の養成を目的とする。 [二杉] ディベートを通じて日本語能力の養成を行う。ディベートは、資料を読み、立論と反駁カードを書き、相手の意見を聞き、的確に反論する（話す）、「ことばによるゲーム」である。現代社会の公共的なテーマについて公衆の前で日本語を話すことに特色があり、ディベートを通して日本語による討論技術、運用能力を総合的に鍛えることをねらいとしている。 [秋山] 現代日本社会、国際社会への理解を、日本語を通して深めていく。それに必要な語彙や表現の獲得を目指す。脱国家的な地球的問題群のひとつを共通テーマとして取り上げる。テーマについての理解を深める過程で4技能の向上を目指す。最終目標は、レポートの作成と発表である。	
	日本語401	上級日本語能力の養成を目的とする。 [岩崎] 専門書購読入門としての読解活動を行い、専門書や専門論文の言語的形式や固有の表現を獲得することを目指す。専門論文、解説書の講読を行い、日本語の表現方法を深め、専門教育への橋渡しを行う。 [神作] 日本文学作品、新聞記事、評論などさまざまな文献を取り上げて、読解力と表現力の向上をめざす。併せて、手紙やメールなどを書く技術に関しても適宜指導する。日本語の知識を吸収し、日本文化にふれることで、あらためて各自の母国の文化を振りかえる契機とする。	
日本事情に関する科目	日本事情A	日本の自然環境における四季の重要性を示し、それが日本人の生活や農林漁業と強いかわりをもつことを示す。また、日本独特の自然現象を概説するとともに、環境問題に対する各国の取り組みや考え方を紹介する。	
	日本事情B	国家、経済、人々が盛んに行き交う時代、いわゆるグローバル化は世界を一つにするのか、あるいは分断してしまうのか。現代世界の行動主体に焦点をあて、グローバル化がもたらす正負の側面を概観する。遠く離れた場所で起きたできごとや自分がまったく知らないできごとが距離・時間の隔たりなく人々の生活、健康などに影響をあたえるようになった。さらに貿易、資本、情報の流れにおける国境だけでなく、考え方や規範、価値観といった面でも国境の存在が薄らいできた。このような空間の縮小、時間の短縮、国境の消滅といった背景の中での日本の事情を概説する。	
	日本事情C	日本人の日常生活の体験から生み出され、俳句のような伝統的文芸においてだけでなく、今日も季節の言葉として広く使われている代表的な「季語」をとりあげ、それらが日本の風土や季節の変化をどのように表現しているかを説明する。あわせてこれらの「季語」と日本人の生活体験とのかわりを解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本事情D	江戸時代末期の開国から明治時代の日本社会の主要な歴史事象を学び、日本近代社会の特色を理解する。あわせて、それが現代日本社会とどのように関係しているのかを考察する。	
	現代日本社会 A	現代日本社会の諸側面、諸制度、継承されている伝統文化等について理解を深める。コーディネーションのもと、日本の民話、日本の歴史と文化、日本の文芸、日本のわらべうた・童話、日本の住まい、伝統的な日本の物語、日本人の宗教観、日本のシャーマニズムとスピリチャリティ、現代日本映画、などのテーマについて、15回の授業を通じて10～12名程度の講師を招いて解説を行う。学生は授業後にレポートを提出する。	
	現代日本社会 B	現代日本社会の諸側面、諸制度、継承されている伝統文化等について理解を深める。コーディネーションのもと、日本の社会問題、現代に残る江戸文化、日本の作家、日本の童謡、日本の近代化と経済発展、日本の観光名所、浮世絵、日本のサブカルチャー、日本演劇にみられる異性配役、日本の家族、などのテーマについて、15回の授業を通じて10～12名程度の講師を招いて解説を行う。学生は授業後にレポートを提出する。	
	インディペンデント・スタディ	2学期間履修の留学生のうち希望する者は、日本社会、日本文化に関する特定のテーマを決め、そのテーマと関連する分野のアドバイザー（専任教員ボランティア）の指導のもとに、自主的に調査・研究を行い、日本語または英語による研究レポートを提出する。アドバイザーと定期的に面談し、アドバイスを受け、レポートを作成する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基礎科目		
	芸術学	西洋のギリシア哲学、中世、近代、現代の哲学・美学芸術学史を論ずる。古代ギリシアのソクラテス、プラトン、アリストテレス、中世のアウグスティヌス、トマス・アクイナス、ルネサンスでは、ヒューマニズム、プラトン・アカデミアの興隆、近代のデカルト、パスカル、スピノーザ、ライプニッツ、ロック、ルソー、カント、ヘーゲル、ニーチェらを概観する。こうした西洋哲学の発展を把握することは、藝術活動、創作活動、解釈学、演奏論、時間論などへの関心と理解を深めることとなる。	
	ソルフェージュ	本講義では、ソルフェージュの基礎項目である「視唱」「聴音」をはじめとし、「コードネーム付メロディーのひきうたい」「メロディーの伴奏付」「初見演奏と移調奏」「移調楽器を含むスコアリーディング」など実践的な音楽能力の育成を行っていく。特に重点項目となるのは、「コードネーム付メロディーのひきうたい」で、安定的な音程把握力を培うとともに、指示されたコードネームによる和音進行でひきうたいを行うことにより、メロディーに内在する和音を感じとる能力の育成を図る。	
	音楽理論	本講義では音楽を学ぶ上で基礎となる「音名」「音程」「拍子とリズム」「調とその相互関係」「音部記号」「楽語」「各種の和音とその進行」「楽式」について総括的に扱い理解を含めていく。特に、楽曲アナリーゼ・即興創作・編曲に不可欠な知識である「各種の和音とその進行」については、基本的な固有和音のみだけではなく、各種の副属七、長調短調における変化和音について、機能和声としての理解とコードネームによる理解の両面から重点的に扱う。	
	西洋音楽史A	古代から前古典派時代までの西洋音楽史を学ぶ。西洋音楽史の知識を身につけるとともに、それぞれの時代の音楽を聴き、様式的特徴を識別できるようにすることを目標とする。西洋音楽史の時代区分に沿って授業を進め、各回の授業では、時代ごとの歴史背景や音楽文化について学んだ上で、楽譜を見ながら音楽を聴き、様式的特徴を「目と耳から」具体的に把握する。中間テストと期末テストでは、記述問題とリスニング問題を出題し、西洋音楽史の総合的な知識の定着を図る。	
西洋音楽史B	古典派時代から現代までの西洋音楽史を学ぶ。西洋音楽史の知識を身につけるとともに、それぞれの時代の音楽を聴き、様式的特徴を識別できるようにすることを目標とする。西洋音楽史の時代区分に沿って授業を進め、各回の授業では、時代ごとの歴史背景や音楽文化について学んだ上で、楽譜を見ながら音楽を聴き、様式的特徴を「目と耳から」具体的に把握する。中間テストと期末テストでは、記述問題とリスニング問題を出題し、西洋音楽史の総合的な知識の定着を図る。		
基幹科目	ピアノ奏法(1)	一人45分の個人指導で行う。ピアノ奏法(1)では、ピアノ演奏の基礎的なテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード(ツェルニー50番、モシュコフスキー、ショパンエチュード等)を用い習得させる。また、バッハ、スカルラッティ、クープラン、ラモーなどバロック期の作曲家の作品や、モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルトなど古典派の時代の作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	
	ピアノ奏法(2)	一人45分の個人指導で行う。ピアノ奏法(1)に引き続きピアノ奏法(2)では、ピアノ演奏の基礎的なテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード(ツェルニー50番、モシュコフスキー、ショパンエチュード等)を用い習得させる。また、バッハ、スカルラッティ、クープラン、ラモーなどバロック期の作曲家の作品や、モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルトなど古典派の時代の作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	
	ピアノ奏法(3)	一人45分の個人指導で行う。ピアノ奏法(3)では、ピアノ演奏のテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード(モシュコフスキー、ショパン、リストのエチュード)を用い習得させる。モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルトなど古典派の時代の作曲家の作品に加え、メンデルスゾーン、ショパン、シューマン、リスト、ブラームスなど、ロマン派の作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ピアノ奏法（４）	一人 45 分の個人指導で行う。ピアノ奏法（３）に引き続き、ピアノ奏法（４）では、ピアノ演奏のテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード（モショコフスキー、ショパン、リストのエチュード）を用い習得させる。モーツァルト、ハイデン、ベートーヴェン、シューベルトなど古典派の時代の作曲家の作品に加え、メンデルスゾーン、ショパン、シューマン、リスト、ブラームスなど、ロマン派の作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	
	ピアノ奏法（５）	一人 45 分の個人指導で行う。ピアノ奏法（５）では、ピアノ演奏のテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード（ショパン、リスト、ドビュッシーのエチュード）を用い習得させる。メンデルスゾーン、ショパン、シューマン、リスト、ブラームスなど、ロマン派の作曲家の作品に加え、ドビュッシー、ラヴェル、フランク、フォーレ、などのフランス印象派の作曲家と、グリーグ、シベリウスの北欧の作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	
	ピアノ奏法（６）	一人 45 分の個人指導で行う。ピアノ奏法（５）に引き続き、ピアノ奏法（６）では、ピアノ演奏のテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード（ショパン、リスト、ドビュッシーのエチュード）を用い習得させる。メンデルスゾーン、ショパン、シューマン、リスト、ブラームスなど、ロマン派の作曲家の作品に加え、ドビュッシー、ラヴェル、フランク、フォーレ、などのフランス印象派の作曲家と、グリーグ、シベリウスの北欧の作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	
	ピアノ奏法（７）	一人 45 分の個人指導で行う。ピアノ奏法（７）では、ピアノ演奏のテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード（ショパン、リスト、スクリャービン、ラフマニノフのエチュード）を用い習得させる。ドビュッシー、ラヴェル、フランク、フォーレ、などのフランス印象派の作曲家の作品に加え、スクリャービン、ラフマニノフ、プロコフィエフ、ムソルグスキー、チャイコフスキー、ショスタコーヴィッチなどのロシアの作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	
	ピアノ奏法（８）	一人 45 分の個人指導で行う。ピアノ奏法（７）に引き続き、ピアノ奏法（８）では、ピアノ演奏のテクニックを各々の学生のレベルに合ったエチュード（ショパン、リスト、スクリャービン、ラフマニノフのエチュード）を用い習得させる。ドビュッシー、ラヴェル、フランク、フォーレ、などのフランス印象派の作曲家の作品に加え、スクリャービン、ラフマニノフ、プロコフィエフ、ムソルグスキー、チャイコフスキー、ショスタコーヴィッチなどのロシアの作曲家の作品を中心に、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。	
	声楽（１）	ベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一對一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。	
	声楽（２）	声楽（１）に引き続きベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一對一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。具体的には初歩的イタリア歌曲と日本歌曲を適宜加えてゆく。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。	
	声楽（３）	声楽（２）に引き続きベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一對一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。具体的には難易度中級のイタリア歌曲と日本歌曲を適宜加えてゆく。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	声楽（４）	<p>声楽（３）に引き続きベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。具体的にはトスティ、スカラッチェらの作品を適宜加えてゆく。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。</p>	
	声楽（５）	<p>声楽（４）に引き続きベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。具体的にはモーツァルト、ロッシーニらの作品を適宜加えてゆく。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。</p>	
	声楽（６）	<p>声楽（５）に引き続きベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。具体的にはグノー、シューマンらの作品を適宜加えてゆく。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。</p>	
	声楽（７）	<p>声楽（６）に引き続きベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。具体的には難易度の高いオペラアリアを適宜加えてゆく。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。</p>	
	声楽（８）	<p>声楽（６）に引き続きベルカント発声法を学ぶ。声楽は直接身体を媒介として演奏するから、身体の呼吸、息の流れのコントロール、共鳴、それらの為の下腹部の支えなどが重要となる。こうしたテクニックをベルカント発声法と総称するが、その習得と個々に適した応用研究を行う。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた声楽教則本や声楽作品を選択する。具体的にはブッチェリ、ヴェルディらの作品を適宜加えてゆく。そして読譜・読解力、美しい発音、正しい発声技術に支えられた自然な音楽表現の実現を目指す。常に自己の身体と心に向き会い、豊かな音楽性とゆるぎない技術、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた声楽家を育成する。</p>	
	管楽器奏法（１）	<p>それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、基本奏法をしっかりと身につける。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。</p>	
	管楽器奏法（２）	<p>管楽器奏法（２）では管楽器奏法（１）に引き続き、それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、基本奏法をしっかりと身につける。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。具体的にはヴィヴァルディ、コレリらの作品を適宜取り上げる。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
演習科目	管楽器奏法（3）	管楽器奏法（3）では管楽器奏法（2）に引き続き、それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、基本奏法をしっかりと身につける。一对一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。具体的にはヘンデル、C. P. E. バッハらの作品を適宜取り上げる。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。	
	管楽器奏法（4）	管楽器奏法（4）では管楽器奏法（3）に引き続き、それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、基本奏法をしっかりと身につける。一对一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。具体的にはJ. S. バッハ、シュタミッツらの作品を適宜取り上げる。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。	
	管楽器奏法（5）	管楽器奏法（5）では管楽器奏法（4）に引き続き、それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、より進んだ奏法をしっかりと身につける。一对一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。具体的にはモーツァルト、ベートーヴェンらの作品を適宜取り上げる。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。	
	管楽器奏法（6）	管楽器奏法（6）では管楽器奏法（5）に引き続き、それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、より進んだ奏法をしっかりと身につける。一对一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。具体的にはウェーヴァー、ロッシーニらの作品を適宜取り上げる。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。	
	管楽器奏法（7）	管楽器奏法（7）では管楽器奏法（6）に引き続き、それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、より進んだ奏法をしっかりと身につける。一对一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。具体的にはブラームス、ドヴォルザークらの作品を適宜取り上げる。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。	
	管楽器奏法（8）	管楽器奏法（8）では管楽器奏法（7）に引き続き、それぞれが専攻する楽器の基礎知識や特色を勉強し、より進んだ奏法をしっかりと身につける。一对一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。具体的にはR. シュトラウス、フォーレらの作品を適宜取り上げる。そして学生一人一人の個性を尊重しながらより良い音楽性が自然に発揮できるようにするために、さらに高度な技術を習得させる。優れた演奏技術、人間性を育む環境を整え、音楽を心から愛する優秀な演奏家、指導者を育てる授業にしたい。	
	音楽芸術学演習（1）	（2 小松長生） 協奏曲を中心に、構造分析を行う。作曲者が明確に意識して構築した楽曲構成を把握する。各曲を取り巻く時代背景の理解も重要となろう。長大な楽曲を漠然と聴くのではなく、曲の設計図を明確に見据えながら作曲家・作品が伝えたいことに注意が向けられるようにする。また指揮者の立場からリハーサル技術、演奏論なども授業で取り上げる。受講者が授業時に演奏しそれを教官が指導する所謂「マスタークラス」も定期的に行う。管弦楽曲のスコアを読解出来るようにし、曲の構造図を常に意識して曲の意図を汲み取る能力を習得する	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(1 飯田真樹)</p> <p>本演習はキーボード楽器によるアンサンブル実習を通じて、演奏を音楽的に高めるための「演奏の良否を具体的に把握できる能力」と「演奏改善の為のアプローチ」を学ぶものである。「演奏の良否を具体的に把握できる能力」とは、演奏の問題点を、テンポ、アゴーギク、ダイナミクス、フレーズングとアーティキュレーション等の音楽演奏の諸要素をもって捉える力であり、表現の媒体となる楽器に拘らずその演奏内容を捉え、改善に導くための能力である。(1)の段階では、教員が中心となって演奏の問題点を問いかけ、改善に導いていく。</p>	
	音楽芸術学演習 (2)	<p>(2 小松長生)</p> <p>演習(1)に引き続き、演習(2)では交響曲を中心に構造分析を行う。作曲者が明確に意識して構築した楽曲構成を把握する。各曲を取り巻く時代背景の理解も重要となろう。長大な楽曲を漠然と聴くのではなく、曲の設計図を明確に見据えながら作曲家・作品が伝えたいことに注意が向けられるようにする。また指揮者の立場からリハーサル技術、演奏論なども授業で取り上げる。受講者が授業時に演奏しそれを教官が指導する所謂「マスタークラス」も定期的に行う。管弦楽曲のスコアを読解出来るようにし、曲の構造図を常に意識して曲の意図を汲み取る能力を習得する。</p> <p>(1 飯田真樹)</p> <p>本演習はキーボード楽器によるアンサンブル実習を通じて、演奏を音楽的に高めるための「演奏の良否を具体的に把握できる能力」と「演奏改善の為のアプローチ」を学ぶもので、(1)から発展した段階として、学生が中心となって演奏の問題点を発見し、改善に導いていく。さらにこの段階では「楽曲解釈の領域」にも言及し、同一の楽曲に対しての様々な演奏について比較分析を行い、異なる演奏スタイルの中での各々の演奏の音楽的必然性がどこにあるかを把握し、意思を持った演奏とそうでない演奏との音楽的な訴求力の差を感得できる力を養う。</p>	
	音楽芸術学演習 (3)	<p>(2 小松長生)</p> <p>演習(2)に引き続き、演習(3)ではロマン派管弦楽曲を中心に構造分析を行う。作曲者が明確に意識して構築した楽曲構成を把握する。各曲を取り巻く時代背景の理解も重要となろう。長大な楽曲を漠然と聴くのではなく、曲の設計図を明確に見据えながら作曲家・作品が伝えたいことに注意が向けられるようにする。また指揮者の立場からリハーサル技術、演奏論なども授業で取り上げる。受講者が授業時に演奏しそれを教官が指導する所謂「マスタークラス」も定期的に行う。管弦楽曲のスコアを読解出来るようにし、曲の構造図を常に意識して曲の意図を汲み取る能力を習得する。</p> <p>(4 馬場マサヨ)</p> <p>この授業では、学生各々がプログラミングしている卒業演奏曲を題材に、それら楽曲の成り立ち、背景、分析などについてまとめたものを、自らの演奏をまじえながら発表する。その発表を聞いた学生同士が、楽曲に内在する作曲家のメッセージとその解釈について意見を述べ合い、演奏表現がどのようになされているか、またどのように伝わっているかについても率直に意見を交換する。自らの演奏の研究を極めた上で、お互いの演奏や研究についての新たな発見を見出すことで、柔軟な感性を養い、演奏における表現についての深い学びを目的とする。</p>	
	音楽芸術学演習 (4)	<p>(8 中根浩晶)</p> <p>この授業では、音楽を演奏する際に重要な音楽性・表現力・理解力を個人レッスンとは違う視点で養っていくことを目的とする。主にピアノコースの学生を中心に、演奏法・音楽分析・音響学などを学び、学生がより高い認識で練習に取り組むことができるように導く。適宜DVD等の鑑賞をし、意見を述べ合う機会も作る。また、卒業演奏試験の準備としての実技指導も行い、学生に試演の場を与えるとともに、授業で学んだ知識をもとに応用力を高めたいけるよう指導する。</p> <p>(2 小松長生)</p> <p>演習(3)に引き続き、演習(4)では近・現代の管弦楽曲を中心に構造分析を行う。作曲者が明確に意識して構築した楽曲構成を把握する。各曲を取り巻く時代背景の理解も重要となろう。長大な楽曲を漠然と聴くのではなく、曲の設計図を明確に見据えながら作曲家・作品が伝えたいことに注意が向けられるようにする。また指揮者の立場からリハーサル技術、演奏論なども授業で取り上げる。受講者が授業時に演奏しそれを教官が指導する所謂「マスタークラス」も定期的に行う。管弦楽曲のスコアを読解出来るようにし、曲の構造図を常に意識して曲の意図を汲み取る能力を習得する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	卒業演奏・卒業作品・卒業論文	4年間の大学での学びの集大成として、卒業演奏・卒業作品・卒業論文という形で結実させる。各自の選んだテーマにしたがい、4年間の研鑽の成果を発表する卒業演奏、作曲作品を発表する卒業作品、楽曲分析等を論文にまとめる卒業論文に、それぞれ関連する専門分野の教員の指導のもとで取り組み完成させる。	
展開科目	A群(音楽理論/音楽実技) 和声	西洋音楽理論の基礎となる和声法の習得を目指す。和音が連続する「和声進行」は、特に西洋の機能と声に基づく調性音楽において重要な理論体系であり、作品構造の理解、作曲、編曲、伴奏付けなどの為には必要不可欠の理論である。この授業では基本的な和音の機能と和音進行の原則、和音連結に伴う運声法と禁則についてソプラノ課題、バス課題を併行しながら実習を通じて学んでいく。また、楽曲分析や作曲/編曲における和声法の応用方法についても理解を深める。	
	即興演奏A	本科目における即興演奏は鍵盤演奏を前提とし、与えられた楽曲を瞬時に指示された高さに移調する「移調奏」、与えられたメロディーに即座に適切な和音設定を行う「伴奏付け」(ひきうたいを含む)、伴奏付けを行った楽曲の「変奏」、与えられた短いモチーフを発展させ楽曲にまとめる「モチーフ即興」及び「初見演奏」を扱う。「即興演奏A」では、その取り扱う音楽内容を、シャープ、フラット3つまでの長短調、8小節の大楽節から各種副属七の和音を含む3部形式の楽曲までとし、鍵盤上における和音把握に習熟することで鍵盤演奏の即時反応力を高めていく	
	即興演奏B	本科目における即興演奏は鍵盤演奏を前提とし、与えられた楽曲を瞬時に指示された高さに移調する「移調奏」、与えられたメロディーに即座に適切な和音設定を行う「伴奏付け」(ひきうたいを含む)、伴奏付けを行った楽曲の「変奏」、与えられた短いモチーフを発展させ楽曲にまとめる「モチーフ即興」及び「初見演奏」を扱う。「即興演奏A」では、その取り扱う音楽内容を、シャープ、フラット6つまでの長短調、各種副属七及び変化和音、近親調への転調を含む複合3部形式の楽曲までとし、鍵盤上における和音把握に習熟することで鍵盤演奏の即時反応力を高めていく。	
	編曲法(1)	合唱作品や合奏作品の実例に基づいてその構造を分析し、その後、編曲技術を身につけるため、既成の小曲を合唱や合奏の形態に編曲する。実際の教育現場で、編曲作品が要求される場合を想定して、各パートの演奏技術は難しすぎず、しかし最大限の演奏効果を引き出せる編曲法を身に付ける。編曲法1では、合唱作品を中心として、和声学における和声進行法や運声法をふまえながら、合唱作品特有の対位法的手法も用いつつ、同声三部合唱や混声三部合唱の編曲を行い、最終段階では混声四部合唱の編曲を行う。	
	編曲法(2)	木管楽器、金管楽器を中心とした様々な楽器編成による合奏作品の実例に基づいて、その構造や楽器特有の書法を研究し、その後、編曲技術を身につけるため、既成の小曲を木管、金管楽器を用いた小編成の合奏の形態に編曲する。実際の教育現場で、編曲作品が要求される場合を想定して、各パートの演奏技術は難しすぎず、しかし最大限の演奏効果を引き出せる編曲法を身に付ける。段階が進むとともに楽器編成を大きくし、最終的には標準編成の吹奏楽編曲を行い、演奏に必要なパートの作成も行う。	
	作曲学	作曲及びその作品の楽譜化を行うことは音楽の総括的能力を育むとともに、演奏を専攻とする者にとって、作曲家の意図を楽譜から読み取る能力の向上につながる。この授業は、音楽理論・ソルフェージュ・和声学等の履修を経て、指定された和音進行上でのメロディー創作、メロディーへの適切な和音進行の設定等の基礎的訓練、クラシック名曲や映画音楽等実作品の研究、さらに近現代の和声法の学習等を行いながら、最終的に任意の楽器編成による作曲及びその演奏と楽譜化を行う。	
指揮法A	基礎的指揮技術を習得する。基本姿勢と指揮棒の持ち方・構え方、4拍子、3拍子、2拍子、6拍子、強弱、アクセント、クレッシェンド、デクレッシェンド、リタルダンド、アチレランド、フェルマータ、各声部の出だしの指示などを学ぶ。随時小人数のグループに分かれてそれらの技法を実践し、グループをまとめる経験を積んでリハーサル能力も培う。合唱曲やソナチネアルバムなど簡易なものを教材として応用する。舞台での振舞い方や服装も論じてゆく。器楽アンサンブルや合唱を指導するのに必要な基礎的指揮法を身につける。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	指揮法B	<p>基本的指揮法を習得した学生を対象に、スコア・リーディングに重点を置き、より専門的かつ実践的な指揮法を学ぶ。キーボードを使ってオーケストラ総譜（スコア）を細部まで読み込む訓練を行う。更にキーボード奏者たちをオーケストラの各セクション・楽器に見立てて指揮及びリハーサルを行う。ハイドン、モーツァルトの弦楽四重奏曲、ベートーヴェンの交響曲、ベルリオーズ、チャイコフスキー、R・コルサコフらの管弦楽曲を読み込んでゆく。また合唱曲、吹奏楽曲も併せて取り上げ、学生が将来顧問として部活動の指導にあたる際にも役立つようにする。</p>	
	合唱	<p>合唱は西洋音楽において重要な分野であり、歴史も非常に長い。この講座を通して、合唱の歴史に触れ、そして作品に取り組み、西洋音楽の伝統の認識度を高める。一方で、日本は世界で稀に見る合唱大国である。日本の合唱作品にも取り組み、自国の音楽文化への興味を増進させる。合唱の醍醐味は、人間の最も根源的な声を駆使してハーモニーを作ることにある。そのためには声を合わせ、気持ちを合わせ、考えを合わせ、協調することが求められる。合唱を通して、協調するとはどういうことかを考えさせる機会にもしたい。</p>	
	合唱指導法	<p>日本は合唱が非常に盛んである。それゆえ、合唱指導者の需要も多い。その需要に応えられる指導者を育成することが最大の目標である。そのためには、指揮法だけでなく、様々な人々が集まる合唱団をまとめ、団員がストレスなく合唱に打ち込める環境の作り方を教授する必要がある。複数の合唱団のモデルケースを想定し、それぞれにあった指導法を探り、対応力があり、音楽的であり、人間的な合唱指導者を育成する。特に、学校教育における合唱指導は、単なる音楽教育に留まらず、生徒あるいは学生の人格形成にも重要な役割を果たすことを認識させる。</p>	
	ピアノ音楽史	<p>ピアノの誕生から近代までの構造の発達の歴史はもとより、時代を反映した楽曲の様式の変化、またピアノ作品の大作作曲家達について幅広く解説していく。授業は単に歴史的な知識を与えることに留まらず、作曲家に関するエピソードや時代毎の奏法・演奏の趣向に関する解説なども取り入れる。楽曲をより深く解釈し理解できるようにすると同時に学生の演奏に対する意欲を高め、演奏の表現力を向上させていくことを目標とする。授業は講義形式であり、随時CD・DVDを用い鑑賞をしながら進める。</p>	
	吹奏楽指導法	<p>音楽教員として赴任した場合、吹奏楽部の顧問・指導者としても期待されることとなろう。まず管楽器の基礎知識から始める。即ち吹奏楽の様々な管楽器の調性・音域、記譜音と実音の関係を理解し、指揮者用楽譜（スコア）の読めるようにする。各楽器のウォームアップ・基礎練習の仕方を理解し、チューニング、ハーモニーの合わせ方、バランスの取り方を学ぶ。更にリハーサルの進め方、演奏会やコンクールに向けての練習計画の立て方なども学び、吹奏楽指導を効率よく行える能力を身につけることを目指す。仲間と合奏する喜びを生徒たちに感じてもらうことがいかに大切であるかも強調してゆきたい。</p>	
	副科ピアノ奏法A	<p>一人 30 分の個人指導で行う。ピアノの基本的なテクニックと、ピアノによる音楽の表現を基礎から学ぶ。音階は全調を正しい運指で習得したい。テキストは各々のレベルに合わせたものを用いるが、モーツァルト、ベートーヴェンなど古典派の作曲家の作品や、ショパン、リストなどロマン派の作曲家の簡単な作品を中心に、運指、ペダリングなど細かなテクニックや、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。また、伴奏課題も与え、簡単な歌唱伴奏もできるようにする。</p>	
	副科ピアノ奏法B	<p>一人 30 分の個人指導で行う。副科ピアノAに引き続き、副科ピアノBでは、ピアノの基本的なテクニックと、ピアノによるさらに高度な音楽的表現を学ぶ。音階は全調暗譜で習得したい。テキストは各々のレベルに合わせたものを用いるが、モーツァルト、ベートーヴェンなど古典派の作曲家の作品や、ショパン、リストなどロマン派の作曲家の簡単な作品を中心に、運指、ペダリングなど細かなテクニックや、その時代にふさわしい表現方法を学ぶ。また、伴奏課題も与え、簡単な歌唱伴奏もできるようにする。</p>	
	副科声楽	<p>声楽に必要な呼吸法や発声技術の基礎を個人レッスンで探究していく。身体を楽器とする声楽を学ぶことによって、自身の声の広がりや表現の可能性と素晴らしさを体感してもらいたい。主に声楽の基本を学ぶのにふさわしい教材であるコンコーネなどの声楽教則本、イタリア古典歌曲を扱い、学生の能力に応じてヨーロッパ圏の作曲家の歌曲やオペラのアリアを取り上げる。声楽作品からも知識と見聞を広め、声楽の伴奏や声楽楽曲の演奏、また自身の楽器の演奏にも応用し、役立ててもらいたいことを目標とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	副科管楽器	それぞれの楽器の基礎知識や特色を勉強し、基本奏法をしっかりと身につける。一対一のレッスンで個々の学生の特徴と必要に応じた教則本や器楽作品を選択する。受講生が初心者であることを鑑み、講師のデモンストレーション、CD・DVDの鑑賞などを通してその楽器の本物の音、演奏に接する機会をつくる。さらには副科管楽器授業で得た経験を専攻楽器の音楽表現に役立て、より広い音楽的視野に裏打ちされた優れた演奏ができるようになることも目指す。	
	ピアノアンサンブルA	この授業では、主にヴァイオリンソナタを学習する。ヴァイオリニストとの共演で取り上げられることの多いモーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス等の作品を、現役のヴァイオリニストである講師と合わせの段階から作り上げていく。プロの生きた演奏を体験させ、様々なアドバイスを元に能動的にピアノの役割を考えられるようにし、自身の演奏に反映させ深みを持たせていく事を目的とする。講義は公開レッスン形式で進め、レッスン対象の学生を順次交代させながら進めていく。	
	ピアノアンサンブルB	1台4手、2台4手、2台8手のピアノアンサンブルを学習する。まず始めに1台4手の連弾から始め、4手それぞれの音楽の役割を考えながら、音量的なバランスを演奏者の位置・聴衆の位置で決めて全体をまとめるよう取り組む。2台ピアノの場合は4手・8手と展開し、よりオーケストラ的な響きを表現できるようにする。アンサンブルを経験することで、他者と音楽を作り上げる能力を養うほか、より多くの音に耳を傾け自分と相手の音のバランスを聴く訓練をし、客観的に響きを判断できる耳を養うことを目的とする。	
	室内アンサンブルA	オーディションにより選ばれた優秀なメンバーで組むアンサンブルの授業である。他の学生から刺激を受け、お互いに切磋琢磨しあって質の高い演奏ができるようにする。学生の自主性に重点を置き、学生主体で議論をし、それに対して講師陣が的確なアドバイスを与えることにより、独奏とは違ったアンサンブルでの演奏技術を習得する。またピアノが入ることにより管楽器だけとは違うサウンドを感じ、バランスや呼吸のとり方などを勉強する。ハイドン、モーツァルトらの作品を適宜取り上げる。演奏上で周囲に気を配ることにより、より良い人間性、協調性も育む。	
	室内アンサンブルB	室内アンサンブル（A）に引き続き、（B）はオーディションにより選ばれた優秀なメンバーで組むアンサンブルの授業である。他の学生から刺激を受け、お互いに切磋琢磨しあって質の高い演奏ができるようにする。学生の自主性に重点を置き、学生主体で議論をし、それに対して講師陣が的確なアドバイスを与えることにより、独奏とは違ったアンサンブルでの演奏技術を習得する。またピアノが入ることにより管楽器だけとは違うサウンドを感じ、バランスや呼吸のとり方などを勉強する。ビゼー、ブラームス、マーラーらの作品を適宜取り上げる。演奏上で周囲に気を配ることにより、より良い人間性、協調性も育む。	
	声楽アンサンブルA	このアンサンブルの授業では、ア・カペラの作品や器楽付きの重唱曲集、またオラトリオやオペラの中から小編成の重唱曲を題材として取り上げる。仲間と呼吸をあわせてひとつの音楽を共につくりあげていくアンサンブルのプロセス、それぞれのパートの機能と役割を理解し、発声に留意しながらもお互いの声を聴きあい、正しい音程で美しくアンサンブルできる能力を身につける。楽曲の構造、詩の内容、役のキャラクターをふまえ、それにふさわしい音楽表現をアンサンブルのなかでできることを体感して学ぶ。	
	声楽アンサンブルB	声楽アンサンブル（B）では、声楽アンサンブル（A）に引き続き、ア・カペラの作品や器楽付きの重唱曲集、またオラトリオやオペラの中から小編成の重唱曲を題材として取り上げる。具体的にはパレストリーナやマシューらの作品を適宜取り上げる。仲間と呼吸をあわせてひとつの音楽を共につくりあげていくアンサンブルのプロセス、それぞれのパートの機能と役割を理解し、発声に留意しながらもお互いの声を聴きあい、正しい音程で美しくアンサンブルできる能力を身につける。楽曲の構造、詩の内容、役のキャラクターをふまえ、それにふさわしい音楽表現をアンサンブルのなかでできることを体感して学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	声楽アンサンブルC	<p>声楽アンサンブル（C）では、声楽アンサンブル（B）に引き続き、ア・カペラの作品や器楽付きの重唱曲集、またオラトリオやオペラの中から小編成の重唱曲を題材として取り上げる。具体的にはヘンデルやJ. S. バッハらの作品を適宜取り上げる。仲間と呼吸をあわせてひとつの音楽を共に作りあげていくアンサンブルのプロセス、それぞれのパートの機能と役割を理解し、発声に留意しながらもお互いの声を聴きあい、正しい音程で美しくアンサンブルできる能力を身につける。楽曲の構造、詩の内容、役のキャラクターをふまえ、それにふさわしい音楽表現をアンサンブルのなかでできることを体感して学ぶ。</p>	
	声楽アンサンブルD	<p>声楽アンサンブル（D）では、声楽アンサンブル（C）に引き続き、ア・カペラの作品や器楽付きの重唱曲集、またオラトリオやオペラの中から小編成の重唱曲を題材として取り上げる。具体的にはモーツアルト、ラフマニノフらの作品を適宜取り上げる。仲間と呼吸をあわせてひとつの音楽を共に作りあげていくアンサンブルのプロセス、それぞれのパートの機能と役割を理解し、発声に留意しながらもお互いの声を聴きあい、正しい音程で美しくアンサンブルできる能力を身につける。楽曲の構造、詩の内容、役のキャラクターをふまえ、それにふさわしい音楽表現をアンサンブルのなかでできることを体感して学ぶ。</p>	
	管楽アンサンブルA	<p>様々な編成に対応可能な管楽アンサンブルの授業である。アンサンブルを通して他楽器に接して各楽器の特色や調性の違いを把握し、ハーモニーの作り方やバランスのとり方を学ぶ。取り込む楽曲のスコアリーディングを各人が行い、皆が曲の全体像と細部を理解することによって、グループで音楽を創る楽しさも学ぶ。メロディーは誰が奏しているそのサポートは誰がするのか、リハーサルをどのように自分たちで計画してゆくのか、練習の進め方とリーダーシップ、本番での心構えなど、幅広いアンサンブルの心得を勉強することで音楽への関心をより一層高める。</p>	
	管楽アンサンブルB	<p>管楽アンサンブル（B）では、管楽アンサンブル（A）に引き続き、アンサンブルを通して他楽器に接して各楽器の特色や調性の違いを把握し、ハーモニーの作り方やバランスのとり方を学ぶ。取り込む楽曲のスコアリーディングを各人が行い、皆が曲の全体像と細部を理解することによって、グループで音楽を創る楽しさも学ぶ。具体的にはコレルリ、ヴィヴァルディらの作品を適宜取り上げる。メロディーは誰が奏しているそのサポートは誰がするのか、リハーサルをどのように自分たちで計画してゆくのか、練習の進め方とリーダーシップ、本番での心構えなど、幅広いアンサンブルの心得を勉強することで音楽への関心をより一層高める。</p>	
	管楽アンサンブルC	<p>管楽アンサンブル（C）では、管楽アンサンブル（B）に引き続き、アンサンブルを通して他楽器に接して各楽器の特色や調性の違いを把握し、ハーモニーの作り方やバランスのとり方を学ぶ。取り込む楽曲のスコアリーディングを各人が行い、皆が曲の全体像と細部を理解することによって、グループで音楽を創る楽しさも学ぶ。具体的にはベートーヴェン、ブラームスらの作品を適宜取り上げる。メロディーは誰が奏しているそのサポートは誰がするのか、リハーサルをどのように自分たちで計画してゆくのか、練習の進め方とリーダーシップ、本番での心構えなど、幅広いアンサンブルの心得を勉強することで音楽への関心をより一層高める。</p>	
	管楽アンサンブルD	<p>管楽アンサンブル（D）では、管楽アンサンブル（C）に引き続き、アンサンブルを通して他楽器に接して各楽器の特色や調性の違いを把握し、ハーモニーの作り方やバランスのとり方を学ぶ。取り込む楽曲のスコアリーディングを各人が行い、皆が曲の全体像と細部を理解することによって、グループで音楽を創る楽しさも学ぶ。具体的にはベートーヴェン、ブラームスらの作品を適宜取り上げる。メロディーは誰が奏しているそのサポートは誰がするのか、リハーサルをどのように自分たちで計画してゆくのか、練習の進め方とリーダーシップ、本番での心構えなど、幅広いアンサンブルの心得を勉強することで音楽への関心をより一層高める。</p>	
	邦楽A	<p>十三絃箏による生田流箏曲を学ぶ。箏及び箏属についての基本的な知識や演奏法の基礎を身に付けることを目指し、実際の教育現場で箏を生かす方法を考察できるようにする。</p> <p>授業は実技形式で行い、箏曲の歴史の概観、演奏までの基本的な作業（箏柱の立て方）、調絃法の学習の後、練習曲・応用曲に進み、「六段の調」が演奏できるようにする。楽譜は伝統的な楽譜を用い、唱歌によって学習する方法を取る。また、現代作品にも触れ、その技法を体験させるとともに講師の演奏を鑑賞する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	邦楽B	<p>子守唄などの伝承歌を通し、日本語が美しく響く発音および自然な発声を習得することを目標とする。また日本の伝統音楽・地歌を基本に据えて、口の形、体の力の入れ方や呼吸法を観察しながら、日本語の響きの美しさと情緒を表現できる歌い方を学ぶ。さらに語りを含めた古典および現代作品を実技形式で練習し、日本語の歌の表現力を広げていく。</p> <p>このほか、日本独特の伝統的装飾方法フリ・アタリなどの小節（こぶし）を習得させる。授業の中途では、講師の演奏を聴く機会を設ける。</p>	
	発音法	<p>声楽を学ぶにあたって、歌詞の意味を理解し深く読み込むことは勿論のことであるが、イタリア語（モーツァルト、プッチーニ、ヴェルディのオペラ）ドイツ語（シューベルト、シューマンのリート、ワーグナー、R. シュトラウス、マーラー作品）、フランス語（グノー、フォーレ作品）、ラテン語（オラトリオ、ミサ曲、レクイエム）の歌詞を適切な美しい発音で歌うことも必須である。各言語に応じた口蓋、舌の使い方を学び、音源や映像資料などを通して「耳」から集中的に発音法を習得する。</p>	
	ピアニストのための脱力法（1）	<p>ピアノを演奏する際に、不必要な力が入りすぎていることを自覚していても、なかなか改善できず、演奏技術が伸び悩んでしまうケースが非常に多い。この授業ではそれをいかに克服するかを探究する。まず、理論的見地からアレクサンダーテクニックなどのメソッドを用い、正しい体の構造と動きを学ぶ。次に人体の骨模型を使い、自分の骨の動きと比較しながら正しい姿勢の作り方、正しい腕や手の使い方を演奏を通して実践的に学ぶ。身体の正しい使い方、動き方を学び、身体感覚として身につけることで、必要な力と不必要な力を自らが判断できるようになり、合理的なピアノ演奏が自然にできるようになることを目的とする。</p>	
	ピアニストのための脱力法（2）	<p>演奏能力の向上のために、肩の力が抜けて、背筋の伸びた美しい姿勢で、ピアノを弾くことの出来る「からだ」の合理的な使い方を学習する。身体感覚の教育法として開発されたフェルデンクライス・メソッドの動きと気づきのレッスンを中心にして、自分のからだを観察する能力と、動きやバランスをコントロールする能力を育てていく。授業の前半では、無意識に自分の体を固めて、ピアノを弾く時の動きを悪くしている「からだの癖」に気づくためのアプローチをメインにする。後半では、椅子に座った姿勢を基に、骨盤や背骨の「中立感覚」に気づくことによって「からだ」を脱力させ、ピアノ演奏のために、効率良く骨格を使って動く感覚を身につけていく。</p>	
	エクスペリメンタルトレーニング	<p>この授業ではまず始めに、表現者にとって不可欠必要である、自分を解放し正直な自分になるための方法を学ぶ。次に、基本的なコミュニケーションの手段である発声と滑舌を実践的に訓練し、表現する上での基礎力を養う。これらの習得を通し、豊かな感受性が引き出され、表現するという技能が備わっていく。明確な言葉を体の動きで表現するという演劇の基礎を学ぶことで演奏家としての表現力、指導者としてのコミュニケーション力を向上させることを目的とする。</p>	
	特別公開レッスン	<p>世界の第一線で活躍する著名な演奏家・指導者による公開レッスン兼レクチャーコンサートを、集中講義で年3回に分けて実施する。公開レッスンでは、テーマとして様々な時代・楽曲を取り上げることで、専門分野の幅広い知識と演奏のための奥深い想像力を養うことを目的とする。レクチャーコンサートでは学生にトップアーティストの演奏を間近で聴く機会を与え、学生の音楽的感性を高めることを目的とする。レッスンの対象者は実技試験の成績優秀者とする。</p>	
	声楽伴奏演習	<p>ドイツ歌曲を中心に声楽伴奏法を学ぶ。伴奏をする際の、歌手を上手く歌わせるための技術や、歌曲へのアプローチの方法を習得する。まず、ドイツ語の詩を読解し、詩から楽曲の内容を正しく理解することを学ばせる。そしてモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ブラームスなどの有節歌曲から通作歌曲、連作歌曲、更に伴奏がピアノからオーケストラに拡大されたR. シュトラウスやマーラーの作品を扱い、様式感覚を養う。講義では、声楽家を招き受講生全員に伴奏を実践させる。</p>	
	ピアニスト育成特別レッスンA（1）	<p>この授業では、学生に通常のレッスンで師事する指導者を除く大学専任教員の個人レッスンを受ける機会を与える。様々な奏法・練習法・解釈や多種多様な感性を習得させ、表現の世界を広げていくことを目的とする。各学生の必要課題に柔軟に対応することを第一とし、コンクールや演奏会の出演の準備に役立たせるだけでなく、ピアニストに必要なレパートリーを広げ演奏家としての資質を養っていくことを目標とする。ピアノ実技試験の成績優秀者を対象とし、1人の学生が最長2年間受講可能とする。</p> <p>（オムニバス/全15回）</p>	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(4 馬場マサヨ／4回) 古典派（ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）の作品を中心に、日本人にとって苦手とされる拍感、和声感について研究する。そして、それらの感覚の合理的な身につけ方、自然な表現方法について習得する。</p> <p>(3 長谷川淳／4回) 主にドイツ・ロマン派（シューマン、ブラームスなど）を中心に指導を行う。楽曲分析を裏付けにした理論的な解釈、それに伴うメロディー・ハーモニーの響かせ方、楽曲全体のまとめ方など演奏の表現をより大きく、豊かにする指導をしていく。</p> <p>(8 中根浩晶／4回) ロマン派の大家であるショパンの楽曲、またフランス印象派（ドビュッシー・ラヴェル）の楽曲を中心にレッスンをを行う。楽譜の読み方、効率的な練習法についても解説を行い、様々な音色を表現できるよう指導していく。</p> <p>(2 小松長生／3回) 指揮者の立場から、オーケストラと協奏曲を協演する設定を念頭に個人レッスンをを行う。モーツァルト、ベートーヴェンらの作品を適宜取り上げて楽曲の分析を行いながら、いつソリストが指揮者を視るのか、いつ指揮者・オーケストラを引っ張ってゆくのかなどを学ぶ。また舞台での立ち振る舞い方も習得する。</p>	
	<p>ピアニスト育成 特別レッスンA (2)</p>	<p>A (1) の授業に引き続き、学生に通常のレッスンで師事する指導者を除く大学専任教員の個人レッスンを受ける機会を与える。様々な奏法・練習法・解釈や多種多様な感性を習得させ、表現の世界を広げていくことを目的とする。各学生の必要課題に柔軟に対応することを第一とし、コンクールや演奏会の出演の準備に役立たせるだけでなく、ピアニストに必要なレパートリーを広げ演奏家としての資質を養っていくことを目標とする。ピアノ実技試験の成績優秀者を対象とし、1人の学生が最長2年間受講可能とする。 (オムニバス/全15回)</p> <p>(4 馬場マサヨ／4回) ロマン派の大家であるショパンの楽曲、またフランス印象派（ドビュッシー・ラヴェル）の楽曲を中心にレッスンをを行う。楽譜の読み方、効率的な練習法についても解説を行い、様々な音色を表現できるよう指導していく。</p> <p>(3 長谷川淳／4回) 古典派（ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）の作品を中心に、日本人にとって苦手とされる拍感、和声感について研究する。そして、それらの感覚の合理的な身につけ方、自然な表現方法について習得する。</p> <p>(8 中根浩晶／4回) ドイツ・ロマン派（シューマン、ブラームスなど）を中心に指導を行う。楽曲分析を裏付けにした理論的な解釈、それに伴うメロディー・ハーモニーの響かせ方、楽曲全体のまとめ方など演奏の表現をより大きく、豊かにする指導をしていく。</p> <p>(2 小松長生／3回) 指揮者の立場から、オーケストラと協奏曲を協演する設定を念頭に個人レッスンをを行う。シューマン、ブラームスらの作品を適宜取り上げて楽曲の分析を行いながら、いつソリストが指揮者を視るのか、いつ指揮者・オーケストラを引っ張ってゆくのかなどを学ぶ。また舞台での立ち振る舞い方も習得する。</p>	オムニバス
	<p>ピアニスト育成 特別レッスンB (1)</p>	<p>A (2) の授業に引き続き、学生に通常のレッスンで師事する指導者を除く大学専任教員の個人レッスンを受ける機会を与える。様々な奏法・練習法・解釈や多種多様な感性を習得させ、表現の世界を広げていくことを目的とする。各学生の必要課題に柔軟に対応することを第一とし、コンクールや演奏会の出演の準備に役立たせるだけでなく、ピアニストに必要なレパートリーを広げ演奏家としての資質を養っていくことを目標とする。ピアノ実技試験の成績優秀者を対象とし、1人の学生が最長2年間受講可能とする。 (オムニバス/全15回)</p> <p>(4 馬場マサヨ／4回) ドイツ・ロマン派（シューマン、ブラームスなど）を中心に指導を行う。楽曲分析を裏付けにした理論的な解釈、それに伴うメロディー・ハーモニーの響かせ方、楽曲全体のまとめ方など演奏の表現をより大きく、豊かにする指導をしていく。</p>	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(3 長谷川淳／4回)            ロマン派の大家であるショパンの楽曲、またフランス印象派（ドビュッシー・ラヴェル）の楽曲を中心にレッスンをを行う。楽譜の読み方、効率的な練習法についても解説を行い、様々な音色を表現できるよう指導していく。</p> <p>(8 中根浩晶／4回)            古典派（ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）の作品を中心に、日本人にとって苦手とされる拍感、和声感について研究する。そして、それらの感覚の合理的な身につけ方、自然な表現方法について習得する。</p> <p>(2 小松長生／3回)            指揮者の立場から、オーケストラと協奏曲を協演する設定を念頭に個人レッスンをを行う。リスト、サン＝サーンスらの作品を適宜取り上げて楽曲の分析を行いながら、いつソリストが指揮者を視るのか、いつ指揮者・オーケストラを引っ張ってゆくのかなどを学ぶ。また舞台での立ち振る舞い方も習得する。</p>	
	ピアニスト育成 特別レッスン B (2)	<p>B (1) の授業に引き続き、学生に通常のレッスンで師事する指導者を除く大学専任教員の個人レッスンを受ける機会を与える。様々な奏法・練習法・解釈や多種多様な感性を習得させ、表現の世界を広げていくことを目的とする。各学生の必要課題に柔軟に対応することを第一とし、コンクールや演奏会の出演の準備に役立たせるだけでなく、ピアニストに必要なレパートリーを広げ演奏家としての資質を養っていくことを目標とする。ピアノ実技試験の成績優秀者を対象とし、1人の学生が最長2年間受講可能とする。</p> <p>(オムニバス/全15回)</p> <p>(4 馬場マサヨ／4回)            これまでの授業のまとめとして、学生の長所を伸ばすような楽曲を取り上げ、指導を行っていく。また、特に優秀な学生にはコンサートのプログラムを組ませ、実際にリサイタルを行えるよう構成の段階から指導していく。</p> <p>(3 長谷川淳／4回)            これまでの授業のまとめとして、学生の長所を伸ばすような楽曲を取り上げ、指導を行っていく。また、特に優秀な学生にはコンサートのプログラムを組ませ、実際にリサイタルを行えるよう構成の段階から指導していく。</p> <p>(8 中根浩晶／4回)            これまでの授業のまとめとして、学生の長所を伸ばすような楽曲を取り上げ、指導を行っていく。また、特に優秀な学生にはコンサートのプログラムを組ませ、実際にリサイタルを行えるよう構成の段階から指導していく。</p> <p>(2 小松長生／3回)            指揮者の立場から、オーケストラと協奏曲を協演する設定を念頭に個人レッスンをを行う。チャイコフスキー、ラフマニノフらの作品を適宜取り上げて楽曲の分析を行いながら、いつソリストが指揮者を視るのか、いつ指揮者・オーケストラを引っ張ってゆくのかなどを学ぶ。また舞台での立ち振る舞い方も習得する。</p>	オムニバス
	ピアノ応用演奏 A	本演習科目は「即興演奏A」「即興演奏B」で扱った「移調奏」「伴奏付け（ひきうたいを含む）」「変奏」「モチーフ即興」の実技を個人指導により補完、強化していくものである。補完、強化する実技項目は学生により異なるが、このピアノ応用演奏Aの到達目標は、「即興演奏A」で扱った各項目とそのレベルを、全項目について短時間で大きなミスなくし得ることにある。	
	ピアノ応用演奏 B	本演習科目は「即興演奏A」「即興演奏B」で扱った「移調奏」「伴奏付け（ひきうたいを含む）」「変奏」「モチーフ即興」の実技を個人指導により補完、強化していくものである。補完、強化する実技項目は学生により異なるが、このピアノ応用演奏Bの到達目標は、「即興演奏B」で扱った各項目とそのレベルを、全項目について短時間で大きなミスなくし得ることにある。	
	ピアノ応用演奏 C	本演習科目は「即興演奏A」「即興演奏B」で扱った「移調奏」「伴奏付け（ひきうたいを含む）」「変奏」「モチーフ即興」の実技を個人指導によりさらに伸ばさせることにある。「移調奏」では新たに管弦楽や室内楽のクラシック名曲をピアノ用に編曲された楽曲素材を用いる。「伴奏付け（ひきうたいを含む）」においてはドミナントモーションによるゼクエントへの習熟、「モチーフ即興」では三度近親調への転調を經由して原調に復帰する和音進行が加えられる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ピアノ応用演奏 D	本演習科目は「即興演奏A」「即興演奏B」で扱った「移調奏」「伴奏付け（ひきうたいを含む）」「変奏」「モティーフ即興」の実技を個人指導によりさらに伸長させることにある。「移調奏」では管弦楽や室内楽のクラシック名曲をピアノ用に編曲された楽曲素材を用いる。「伴奏付け（ひきうたいを含む）」においてはドミナントモーションによるゼクエンツに加え、順次下降ベースによる和音進行への習熟が求められる。「モティーフ即興」では三度近親調への転調を経由して原調に復帰する和音進行に加え、短いカデンツァを即興的に演奏することが求められる。	
	ピアノ応用演奏 E	ピアノ応用演奏A～Cで扱った「移調奏」「伴奏付け（ひきうたいを含む）」「変奏」「モティーフ即興」への習熟を前提として、より自由度の高い即興演奏を行うことを目的とする。リズムを伴わない数個の音からモティーフを作り、古典的な機能と和声の範疇を超えた近現代の和音やポピュラー音楽に用いられる和音を使用して、自由な形式の音楽にまとめる「音列即興」が新しい項目として加えられる。カデンツァは個々の学生の得意とする演奏技巧を生かした、よりピアノスティックな内容が求められる。	
	古典舞踏	本講義では西欧クラシック音楽の歴史を理解する上で重要な「15世紀から19世紀までの宮廷舞踏・社交舞踏」をテーマに、パヴァーヌ、メヌエット、ワルツなどの舞曲を順次取り上げる。授業では、実際にステップを踏んで踊ることを通して、運動の原理を知り、様々な舞曲のリズムやテンポ感をつかむとともに、ダンスを通じてコミュニケーション能力を高めていく。 また、ダンスと音楽の関わりを理解しながら、音楽・美術・ダンスの歴史を関連づけて把握し、社会におけるダンスの意味を考察し、西欧の文化に対する理解を深めていく。	
	リトミック	リトミックとは、作曲家であり音楽教育家であったエミール・ジャック＝ダルクローズ（1865～1950）が考案した、リズム運動・ソルフェージュ・即興演奏の3部門からなる音楽を総合的・効果的に体得する教育法である。本講義では、ダルクローズリトミックがミュージシャンシップを磨くための総合ソルフェージュであるという認識のもとで、音楽を心で聴き・感じ・表現するために、聴く・歌う・演奏する・楽譜を読む・書くといった音楽教育で学ぶ全てのことを（身体を動かす）実技主体で行い、ビート・音の方向性・拍子への発展・音の分割・休符・さまざまな音のニュアンス・補足リズム・メトリックトランスフォーメーション・クロスリズム等段階的に発展させていく。	
	ピアノメソッド概論	ピアノ教育の初期において、いかなるメソッドを用いて指導を行うかは極めて重要な問題である。本講義では、バロックから現代に至る西洋音楽史における教育的小曲集から、バイエル、チェルニー、ミクロコスモス等のピアノ教本、近代アメリカを中心とした中央ハ展開メソッドやその延長上にある現代日本のピアノメソッドまでを総括的に扱い、各々の曲集やメソッドの音楽的特長や教育的意図を紹介しつつ、それらの曲集やメソッドを音楽的、効果的に扱う上で必要となる指導法の習得を併せて行っていく。	
	ピアノ教室レッスン実習	この科目は、ピアノ教師を目指す学生が大学の委託を受けたピアノ教室で、そこに通う生徒にピアノのレッスンをを行い、指導法の研究を行うものである。授業は、大学にて数回の事前指導を受けた後、実習先のピアノ教室で実際のレッスンを見学、実習後半では実際のレッスンを担当する。実習を終えた後、学生は大学にて実習の報告を行い、指導教員から、生徒の状況に応じた適切な指導のあり方、ピアノ教師を目指す上での今後の課題について、実践的な視点からアドバイスを受ける。	
B群 (文化・鑑賞)	ヨーロッパの文化と芸術	「街並み」「謝肉祭」「メディチ家」「マリー・アントワネット」「オペラの誕生」「シスター礼拝堂」など、15のキーワードを手がかりに、ヨーロッパの文化と芸術の歴史を概観する。作品鑑賞を交えて時代背景を考察し、主題を概観するための15の足場をつくる。この足場をもとに、学生は主題を見渡す詳細な地図を作り上げる。	
	ドイツ語文化入門	ドイツ語圏諸国の地理（主要河川、主要都市、地形等）および近現代史等の基礎的知識を習得する。前半では、ドイツに加えオーストリア・スイスなどドイツ語圏諸国の地理と主要諸都市の紹介を行う。取りあげる都市はドイツの首都ベルリン・オーストリアの首都ウィーン・スイス最大の都市チューリヒと首都ベルンなどである。後半では主に19世紀以降のドイツ語圏の歴史を概説する。ウィーン会議からEUの加盟まで、主にドイツとオーストリアの関係を中心に見ていくことにする。授業では、視覚教材を適宜用いる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	フランス語文化入門	「フランスはどこにあるのか?」「フランス人と呼ばれるのはどういう人たちか?」「フランス文化とは何なのか?」といった問いに答えていく授業である。まずフランス的なもののイメージを一手に担う首都パリについての紹介からはじめ、革命や戦争の歴史に踏み込む。いくつかの映画も見ながら、「フランス」の記憶に迫る。後半は、南や西の地方や海外県をとりあげ、それぞれの独自性に焦点を当てる。国境や時代を超えてたえず動いていく文化の対立や融合から「フランス」をとらえなおす。	
	南欧文化入門	この科目では、イタリアを中心とした南ヨーロッパの文化について概観し、この地域に関する基礎的な知識を習得することを目的とする。その内容としては、例えば「シチリア」「ナポリ」「ローマ」「ヴェネツィア」といったイタリアの諸都市について紹介し、イタリアとフランスの間における歴史的な交流についても見ていく。また「ウフィツィ美術館」「ミケランジェロ」などの美術のテーマ、「バロックオペラ」「リュリ」などの音楽のテーマについても言及する予定である。	
	イタリア語入門(1)	イタリア語という言語を通して、イタリアの文化及び風土について学習する。具体的には、日常的な場面においてなされる会話と、そこでもちいられる表現、そして、その会話や表現はいかなる文化状況を反映したものであるのか、または、いかなる風土を背景にしたものであるのか共に学び、考えていく。本授業は前期科目であり、後期開講の「イタリア語入門(2)」に引き続く。	
	イタリア語入門(2)	授業は「イタリア語入門(1)」に続く2年次後期科目として行う。イタリア語という言語を通して、イタリアの文化及び風土について学習する。具体的には、日常的な場面においてなされる会話と、そこでもちいられる表現、そして、その会話や表現はいかなる文化状況を反映したものであるのか、または、いかなる風土を背景にしたものであるのか共に学び、考えていく。	
	英米文化研究A	「イギリスの音楽と美術」について、毎回の映像鑑賞を通して講義する。音楽は、宮廷音楽、クラシック、フォークソング、ロック&ロール、ミュージカルを取り上げる。美術は、宮廷画、諷刺画、幻想画、風景画、ラファエロ前派、世紀末絵画、現代絵画を取り上げ、ホルバイン、ホガース、レノルズ、ゲインズバラ、ブレイク、ターナー、コンスタブル、ロセッティ、ミレイ、ハント、パーン=ジョーンズ、ホイッスラー、モリス、ピアズレー、バーコンなどの作品を解説する。	
	英米文化研究C	植民地時代から現代までのアメリカの美術と音楽について、アメリカ史にそって代表作品を概観する。美術では、サージェント、オキーフ、ポロック等の絵画とステューグリツ、アダムズ、キャパ等の写真を中心に解説する。音楽では、「ハイアワサの歌」から、ジャズ、ブルース、R&D、カントリー、ロック、ヒップ・ホップ、クラシック、ミュージカル、映画音楽、ディズニー、モータウンまでを取り上げ、時間が許す限りCD等を用いて鑑賞する。アメリカの主要な作品に触れながら、芸術鑑賞のための基本的姿勢も身につけてもらいたい。	
	英米文学研究C	英詩には、叙事詩、抒情詩、劇詩のジャンルがあるが、本講義では抒情詩を考察する。取り上げるのは、2009年のメガヒットとなったCD『Words For You』に収録された珠玉の英米詩27作品で、英米の名優たちによる優れた朗読に耳を傾けて、英詩を原文で味わいながらより深い理解を試みたい。同時に、朗読のBGMに用いられているクラシック音楽、ヴィヴァルディ、バッハ、モーツァルト、ベートーベン等の音楽についても理解を深めていく。	
	英米文学研究D	「人間関係図から読むシェイクスピア」をテーマに、次の観点から、シェイクスピアの世界を講読する。①社会学の視点：人間関係のダイナミズムに重点を置く。②文学の視点：プロット、登場人物、テーマ、現代性などの理解に重点を置く。③芸術鑑賞の視点：映画、音楽、絵画、バレエ等、様々な分野で展開されていくシェイクスピア芸術のもつ美と力について講義する。取り上げるシェイクスピアの作品は、『リチャード三世』、『ロミオとジュリエット』、『ヴェニスの商人』、『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』、『マクベス』である。	
	イギリス文化概論	現代イギリスの社会と文化について詳しく学び、3・4年次での研究の基盤を固めることを目標とする。また、イギリスでの語学研修や留学に必要な予備知識も提供する。具体的には次の二つの観点から理解を深めていく。(1)イギリスの諸地域：首都ロンドン、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの諸地域の地誌と文化。(2)現代イギリスの諸問題：イギリスの社会、政治、教育制度、日常生活、音楽、美術、社会問題等。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	アメリカ文化概論	アメリカ（合衆国）について、諸地域、人種、現代社会の諸問題という3つの観点から講義する。諸地域については、ニューヨークなどを中心とした東部、サンフランシスコなどの西部、アトランタなどの南部、キャンザス・シティーなどの中西部の諸地域の地誌と文化について考察する。人種については、移民の歴史を州別に考察するとともに、ニューヨークをミクロの例として租界（colony）の状況を考察する。諸問題については、様々な多彩性を抱えるアメリカゆえの矛盾とその解決策について、未来への展望も含めて考察してみたい。	
	海外の日本文化研究	日本の伝統文化、文学から現代日本のマンガやアニメーションに関する海外の興味は年々たかまり、研究も進んでいる。この授業では、文学、演劇、美術、音楽など、各ジャンルの日本文化にたいする英独仏などの研究の動向を紹介する。海外の視点から見ることで自国の文化について新たな目で見直すことを目的とする。合わせて、日本人が外国の文化をどのように受容しているのか、ということを考えるきっかけともする。	
	西洋音楽史入門	西洋音楽史の基礎を学ぶ。西洋音楽史の大きな流れを把握し、中世・ルネサンス時代から近現代に至るまでの音楽について、基礎的な知識を習得することを目標とする。授業では、音源や映像資料などを豊富に用いて、それぞれの時代の音楽について興味を深めるとともに、基礎的な音楽史の概念や、代表的な作曲家、主要な音楽様式を理解する。中間テストと期末テストによって知識の定着を図り、より詳しく西洋音楽史を学ぶための基礎固めをする。	
	西洋美術史A	先史時代から古代エジプト、オリエント、ギリシャ、ローマに至る古代の美術、そして初期キリスト教美術からビザンチン、ロマネスク、ゴシックに至る中世の西洋美術の歴史をスライド、VTR、DVDなどの映像資料を使って講義する。作品の意味とそれが生まれた歴史的、文化的な背景を学習する。古代から中世に至る西洋美術を楽しみながらその概略を理解し、自分の心の世界を広げることを第一の目標とする。次にこれらの美術作品を通じてイメージによる人類の世界観、宇宙観を学習する端緒とする。	
	西洋美術史B	ルネサンス（15 - 16世紀）を中心に、マニエリスム（16世紀）、バロック（17世紀）に至る西洋美術の歴史をスライド、VTR、DVDなどの映像資料を使って講義する。作品に秘められた意味を読み解き、それが生まれた歴史的、文化的な背景を学習し、その時代の世界観、宇宙観について理解する。美術を見て、読む楽しみを学び、自分の心の世界を広げることを第一の目標とする。さらにイメージの解読を通して人類の築いてきた深い知恵に触れる喜びを知る。	
	西洋美術史C	18世紀から19世紀に至る西洋美術の歴史をスライド、VTR、DVDなどの映像資料を使って講義し、作品の意味とそれが生まれた歴史的、文化的な背景を学習する。とくに19世紀は大きな価値転換の時代であり、その近代美術の歴史と思想の発展を、新古典主義からロマン主義、写実主義、印象主義、新印象主義、後期印象主義を経て象徴主義に至るまでたどり、今日につながる新しい美術についての理解を深める。またそれらの作品が生まれてきた歴史的、社会的背景を理解する。	
	西洋美術史D	第二次世界大戦に至るまでの20世紀の西洋美術について、スライド、VTR、DVDなどの映像資料を使って講義し、作品の意味とそれが生まれた歴史的、文化的な背景を学習する。20世紀に誕生したキュビズム、フォーヴィスムから表現主義、未来派、ロシア・アヴァンギャルド、新造形主義、バウハウス、ダダイズム、シュルレアリスム、エコール・ドパリ、メキシコ・ルネサンスに至る近代美術の作品とその思想を知り、なぜそれらの作品が生まれたかを理解する。また、作品と時代や社会との関わりを理解する。	
	美術鑑賞A	美術作品は実物と映像では大きな違いがある。本授業においては、できるかぎり本物の美術と接触することによって、映像では味わうことのできない美術作品の魅力を体験する。本授業を通して美術の見方や楽しみ方を知り、美術展に足を運ぶ習慣を身につけ、生涯にわたり美術に親しんで豊かな内面を築いていくきっかけとする。作品やその背景、鑑賞のポイントを教員が講義し、その後で実際に春から夏の期間に開催される展覧会を見学に行き感想文を提出する。学期末には、鑑賞した中で興味を持った美術作品について各自調査してレポートを提出する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	美術鑑賞B	美術作品は実物と映像では大きな違いがある。本授業においては、できるかぎり本物の美術と接触することによって、映像では味わうことのできない美術作品の魅力を体験する。本授業を通して美術の見方や楽しみ方を知り、美術展に足を運ぶ習慣を身につけ、生涯にわたり美術に親しんで豊かな内面を築いていくきっかけとする。作品やその背景、鑑賞のポイントを教員が講義し、その後で実際に秋から冬の期間に開催される展覧会を見学に行き感想文を提出する。学期末には、鑑賞した中で興味を持った美術作品について各自調査してレポートを提出する。	
	音楽と文学A	多くの文学作品がクラシック音楽の題材あるいは標題となっている。こうした音楽作品の理解・解釈の為には題材となった文学作品の読解が不可欠であることは論をまたない。本講義では主に管弦楽作品の文学的背景を学ぶことで曲の理解と聴く喜びを深める。ダンテの「神曲」はリスト、シュークスピアの「ロミオとジュリエット」はベルリオーズ、チャイコフスキー、プロコフィエフ、デリウス、「テンペスト」はベートーヴェン、「ハムレット」はチャイコフスキー、「真夏の夜の夢」はメンデルスゾーン、ゲーテの「ファウスト」はマーラーなど、枚挙に暇がない。	
	音楽と文学B	多くの文学作品がクラシック音楽の題材あるいは標題となっている。こうした音楽作品の理解・解釈の為には題材となった文学作品の読解が不可欠であることは論をまたない。本講義では主にオペラ、オラトリオ、宗教合唱管弦楽曲の文学的背景を学ぶことで曲の理解と聴く喜びを深める。シュークスピアの「マクベス」はヴェルディ、ショスタコーヴィッチ、「オセロ」はヴェルディ、シラーの「歓喜に寄せて」はベートーヴェンの『第九』、ミルトンの「失樂園」はハイドンの『天地創造』、ニーチェの諸作品はリヒャルト・シュトラウスなど、枚挙に暇がない。	
	日本音楽論	平成14年度から新学習指導要領により中学校に和楽器が導入された。現在では小学校や高校でも行われるようになったし、歌も入った。しかし実際には、楽器や歌を使って西洋音楽の授業のようになっていることもある。そこで講義は主として明治以前の日本音楽を扱う事で、日本音楽の特性、例えば声楽曲と器楽曲、歌と伴奏の関係、リズム、音階、騒音、間、家元制度などの問題、を古代から近世まで民俗音楽を含む様々な音楽を通じて解明する。後半は近世邦楽を中心に歴史的な側面も加えて概説し、最終的に日本音楽の美的価値を理解する。	
	民族音楽論	諸民族の音楽を偏見を持たずに正當に評価するために、諸民族の音楽を知ることの意味を考える。そして諸民族の音楽を比較・分析・検討して、それぞれの音楽構造を明らかにすると共に音楽の背景にある環境や生活・人種・言語・文化・思想などとの関連について考える。また人類の歴史的な交流や文化の伝播を通して、共通の表現や異なった表現について考察し、最後に諸民族の音楽の美的価値について論ずる。講義は先住民族を含む世界の民族音楽を概観した後、東アジア、南アジア、東南アジア、西アジアの音楽を歴史的側面を加えて概説する。	
	音楽鑑賞A	管弦楽曲を鑑賞する。オーケストラの発達史にそって各作曲家・作品について概観し、曲が作られた背景や曲の構造を把握する。そのうえで管弦楽曲を聴くとき、作品との距離感が縮まり奥深さと楽しみが増すことをめざす。オーケストラ創世期のヴィヴァルディ、ヘンデル、シュタミッツ、J.S. バッハ、確立期のハイドン、ラモーン、モーツァルト、ベートーヴェン、それに続くシューベルト、シューマン、ブラームス、ドヴォルザーク、成熟期のチャイコフスキー、R. シュトラウス、マーラー、近・現代のストラヴィンスキー、ショスタコーヴィッチらの交響曲、協奏曲、交響詩、組曲、序曲を取り上げる。	
	音楽鑑賞B	オペラ・オラトリオ・宗教合唱曲を鑑賞する。オペラと宗教曲の発達史にそって各作曲家・作品について概観し、曲が作られた背景や曲の構造を把握する。そのうえで鑑賞するとき、作品との距離感が縮まり奥深さと楽しみが増すことをめざす。創世期のモンテヴェルディ、ヘンデル、古典派のサリエリ、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、イタリアオペラのヴェルディ、プッチーニ、マスカーニ、ドイツオペラのヴェーバー、ワーグナー、ベルク、ロシアオペラのチャイコフスキー、ショスタコーヴィッチ、英国のブリテンの作品を取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
C 群 ( 教 養)	音楽鑑賞C	ミュージカルを鑑賞する。まずミュージカル、オペレッタ、オペラ、バレエの違いを理解し、ミュージカル（音楽舞踏劇）というアメリカが生んだ大衆舞台芸術の誕生から発展まで学び、DVD等で鑑賞する。ミュージカルを構成する歌唱、演劇、ダンスの役割を理解し、授業の中でそれらを体験してみることもある。また学生自身が題材を選択し自ら解説を皆の前で発表する時間も持つ。可能であれば、学外でのミュージカル鑑賞も実現したい。この鑑賞授業を通して、クラシック音楽を勉強している学生が、自分の専攻分野のみならず、さまざまな舞台芸術へ興味をひろげ、知識を積むようになってほしい。	
	音楽鑑賞D	本講義は19世紀の後半に登場したポピュラー音楽を、単なる音楽ジャンルとしてではなく社会的・政治的に作られてきたものであることを理解し、その発展の歴史における重要作品を鑑賞する。 この授業では、音楽産業の登場時から、ジャズやブルースを経て、ロックやパンク、さらにはレゲエやヒップホップといった各ジャンルが作られていく過程を考える。また、マイケル・ジャクソンといった具体的な音楽家にスポットライトを当てたり、その音楽を聴いたりしながら、ポピュラー音楽がどのように社会に受け容れられてきたのかについても考えていく。	
	音楽鑑賞E	日本には世界に誇れる総合芸術がある。これを一般に古典芸能と呼ぶ。この文化遺産を今まで教育の場で余り重視してこなかった面がある。講義では最初に、芸能の用語の説明から始めて、雅楽・能楽・文楽・歌舞伎のいくつかを鑑賞して、それらに共通する要素や異なった表現を学び、芸能の特質を理解する。具体的には、雅楽の管弦曲、唐・高麗楽の舞楽、能「安宅」狂言「棒縛り」、文楽「絵本太功記」「艶容女舞衣」、歌舞伎「勸進帳」「絵本太功記」を採り上げる。又講義とは別に、能楽・文楽・歌舞伎の中からいくつかを実際に鑑賞する。	
	民族と芸術	この科目では、アフリカ、北米、東南アジア、オセアニアなどにおける壁画、彫刻、土器、装飾品、テキスタイル、建造物、ダンスや他のパフォーマンス、身体装飾などの視覚芸術を紹介しながら、「芸術」とはなにか、芸術にはどのような役割や意味があるかを各々の社会的、文化的文脈において考えなおす。また、後半では、西欧文化において非西欧の芸術はどのように位置づけられてきたか、さらには、グローバル化が進む中で複数文化が接触し、混じり合うことによってどのような芸術が生まれたかを紹介する。	
	金城シネマ	映画はフィクションであれノン・フィクションであれ、映画が人々の興味を喚起する格好の教材であることは言うまでもない。この授業では、共通のテーマを立て、これにそって複数の教員が映画を選び、異なった観点から解説することで、作品同士の思いがけない出会いや衝突が生じさせるものである。それにより鑑賞者の感性は磨かれ、思考は深まることができ、映画と解説を通して様々な授業の交差やつながりも意識できるようになることが期待される。	
	生涯学習概論	生涯学習論 1960年代の半ば、ラングランによって生涯教育（学習）が提唱され、わが国でも生涯学習推進のための施策が講じられてきた。生涯学習の捉え方は関心や視点によって様ではないが、その根底にあるのは、「いつでも、どこでも、誰でも」をキーワードにした、新しい学びの在り方といえる。この授業では、生涯学習とは何かという基本理解の習得を目的とし、生涯学習の理念が社会の諸制度に反映され、われわれの生き方にも大きな影響を与えていることを、法令ならびに中央教育審議会などの答申とともに学ぶ。	
博物館概論	この授業では、博物館に関する基礎知識の習得をはかるとともに、博物館学における各論の前提となる基礎知識を身につける。具体的には、博物館の役割と機能、欧米博物館の歴史、日本の博物館の歴史、関係法規、学芸員制度、博物館組織の運営、生涯学習、地域社会との関係、学校教育との関係、文化財保護、博物館の国際機構などの諸点を学習する。そのうえで、世界遺産との関係など、博物館の現状と課題点を考える。		
博物館経営論	この授業では、博物館の管理・運営について理解し、博物館経営（ミュージアムマネジメント）に関する基礎的な能力を養う。博物館の使命、経営、社会との関わりなどの課題を学び、現在博物館が抱えている問題点や、これからの博物館と社会との関わりについて考える。そのうえで、博物館の組織、施設、行・財政制度、運営・管理、利用者との関係や評価、博物館の連携、博物館の抱えている問題点などを具体的に学ぶ。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	博物館資料論	この授業では、博物館資料の収集、整理保管などに関する理念や方法についての知識を学び、実践的な技術を習得する。同時に、博物館の調査研究活動と資料の関係について理解を深めることにより、博物館資料に関する基礎能力を身につける。具体的には、博物館活動の基盤となる博物館資料の概念と分類、調査研究方法、収集・製作、整理・登録、公開・活用などに関する理論や方法を学習する。そのうえで、調査研究への市民参加、世界文化遺産や文化財保護行政との関係などについても考える。	
	博物館資料保存論	この授業では、博物館資料の保存及び保存環境（展示環境と収蔵環境）について科学的にとらえ、資料を良好な状態で保存し後世に継承していくための知識を習得する。同時に実践的な知識習得過程を通じて、資料保存に関する基礎能力を身につける。具体的には、資料保存の概要と理念を知り、そのうえで資料の状態調査、材質調査、保存修復の方法、資料の梱包と輸送、保存環境の整備などの諸点について実践的に学ぶ。	
	博物館展示論	展示は博物館にとってその活動がもっとも注目される重要な活動である。この授業では、収集した資料を展示するための、また企画展示の企画、運営など基本的な知識、技術を習得する。また、博物館における展示の意義は何か、博物館における実際の展示はどのように行われるか、展示を通して博物館からどのようなメッセージを発信するのか、などの点について理論や方法論に関し学習し、博物館における展示の機能について基礎的な知識を得る。	
	博物館情報・メディア論	この授業では、博物館における情報の意義とその内容、情報の収集、整理・分析、発信について基本的な知識を習得するとともに、情報化の現状と課題を把握する。あわせて、映像理論・情報機器等についての学習を通じて、情報の提供と活用の実践的な基礎能力を養成する。更に、資料の整理・調査研究、展示、広報・教育活動への活用例を通して、博物館における情報の収集、整理・分析、発信について学ぶ。あわせて、博物館活動に必要な知的財産権・個人情報取扱・権利処理等に関する基礎知識を習得し、映像・情報機器の活用法を学習する。	
	博物館教育論	この授業は、基本的には博物館における教育活動の教育理念や実践に関する知識や方法を学ぶことを目的とする。そのうえで、博物館の教育的な機能に関しての基礎的な知識と能力を養う。こうした基本の上にならって、博物館における教育活動の理念や歴史的変遷について理解し、現代の博物館において実施されているさまざまな教育活動の手法についてそれぞれの特徴や意義、方法を具体的に学ぶ。	
	英語による日本文化	国際社会が広がる中、異文化と接する機会が増えると同時に、自国の文化を母語以外で紹介する機会も増加してきている。この授業は、日本の伝統文化に加え、近代化の結果生まれた現代の日本の状況に関して、簡単な英語で表現（口頭・文書）ができること、そして、自国文化への興味と理解をさらに深めることを目的とする。日本について英語で書かれているテキストを輪読し、英語での表現方法を学ぶ。輪読、口頭発表、ディスカッションなどを通し、自国文化を深く理化学び、英語で紹介できる力を養う。	
	中国語文化入門	中国世界を理解するために必要な文化社会の背景について論じる。ふだんにする中国の情報には、中国の文化や社会に対する知識がなければ、十分に理解することができないものがある。文化的な側面として、ことば・文字・宗教など、中国世界を特徴づける要素を紹介する。社会的な側面としては、民族・政治体制・大陸台湾問題など、現在の中国問題を論じる際に重要な要素を取りあげる。授業では映画や新聞記事などを題材として、自分でその文化的社会的背景について論じることができるようになる。	
	Cross-Cultural Communication	文化は、常に他の文化と出会っている。その出会い方によって、「幸せ」や「不幸せ」を感じることもある。たとえば、「カレーライス」。もともとカレーライスはインドにはなかったが、カレーという味を日本人の嗜好に合うようにアレンジし、日本の家庭に「幸せ」をもたらしている。一方で、「クジラやイルカを獲って食べ、人間のために命を落としたクジラやイルカの弔いを行う」という文化は、「動物保護」や「環境保護」という文化を持った人びとにとっては残酷な文化とうつつてしまう。捕鯨を文化として生活してきた人びとの誇りは失われつつある。この授業ではこうした、異なる文化の様ざまな出会いの形態を学習する。	
	日本の多文化事情	現在の日本には、日系ブラジル人労働者を初めとして、多くの外国人が居住している。EPA（経済連携協定）に基づく介護労働者の受け入れや、2020年を目途とした留学生30万人計画など、今後もこうした「生活者としての外国人」は増加していくことが予想される。この科目では、現在日本にどのような外国人がどのぐらい住んでいるのか、文化の違いによりどのような問題が生じるのか、現状における支援のあり方などを知り、今後の望ましい多文化共生社会の形について考えていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	世界と日本のクラシック	この科目は、文学部の学生がわきまえておくべき古典に対する教養を身につけることを目標とする。古典は長い時間を経て確立した人類共通の遺産であり、国境やジャンルの枠を超えて受容されてきた。そのため文学や芸術など文化現象を理解するためには、それぞれの専門以外についても、ある程度の知識を得ておくことは重要である。文学部教員がそれぞれの専門における古典を紹介することで、世界と日本の古典に対する幅広い視野を持つことができるようにする。	
	日本語教育入門	日本語教育を勉強する人のための入門科目である。(1)「日本語教師の仕事」(日本語教師がどのような職業で、どんな知識・技能を必要とするか)、(2)「日本語の文法」(日本語の文法を理解するための基本的な考え方)、(3)「日本語の音声」(日本語の音声の性質と、外国人にとっての困難点)(4)「日本の文化」(文化が言語コミュニケーションにどう影響するか)、この4つのトピックについて、解説をおこない、日本語教育を勉強するために必要となる知識の全体像を把握することを目的とする。	
	日本語教育法A(1)	様々な外国語教授法について、その概要と背景となる考え方を理解する。その上で、日本語の初級教科書を利用して教授項目の抽出から、練習の組み立て、活動などの授業準備の方法などを学ぶ。最後に自分が今まで学習したことのある外国語を、他の学生に教える模擬授業をおこなう。教授法については、講義形式の説明で説明した上で、実際の授業の様子を収録したDVDを見てもらう。日本語の教え方については、やり方を説明した上で、実際に練習を組み立ててもらふなどの実践を適宜組み込んで理解を深める。	
	日本語教育法A(2)	日本語教育をおこなう上で必要な学習者の背景を理解することを目的とする。同時に日本語教育能力試験の一分野である「社会・文化・地域」について概観し、理解を深める。具体的には、現在日本語教育がおこなわれている世界の地域の言語事情、日本語教育の現状を考察し、日本語教育の通史を理解することで、さまざまな日本語学習者の背景を検討する。授業では、伝統的なものから現在使われているものまで代表的な日本語教科書も紹介する予定である。	
	日本語教育法B(1)	現在、日本の小学校や中学校には、「外国につながる子ども」が多数在籍している。彼ら・彼女らへの教育は重要であり、急務であるが、日本語支援やアイデンティティの問題など、様々な問題がある。講義では、年少日本語学習者の問題を取り上げ、それに関する研究を概観する。さらに、第二言語としての年少者日本語習得研究を紹介し、日本語習得の課題について考える。とくに、バイリンガル教育は、将来の自分の子どもの教育問題を考えるために必要な知識である。外国人児童生徒の教育問題は、これからの多文化共生社会を支える基盤となる考えである。多文化化著しい教育現場を目指す学生にとっては知っておくべき重要な情報である。	
	日本語教育法B(2)	日本語の文字教育とその周辺について理解を深め、学習者にあわせた教材の選択ができるように考えを深める。文字だけの教育なく、発音や語彙、語の背景知識まで含んだ議論をおこなう。実際の教材を元に、指導方法を学習し、それを元に、自分で教材作成をおこなう。さらに文章の書き方やローマ字表記にふれ、受講生がレポートを書く際に参考になるように考えている。日本語教育能力試験の「文字・表記」の練習問題も体験する。昨年は外国人留学生にも教材を使ってもらい、フィードバックをもらった。授業は講義と受講生の発表活動を交えておこなう。	
	日本語教育法C	母語話者の日本語を分析し日本語の談話の特徴について考える。次に、学習者の産出する日本語を観察し談話レベルでの問題点について考える。そして、日本語教育(特に会話教育と作文教育)では何を教えるべきかについて理解を深める。その到達目標としては、日本語母語話者の会話を観察し談話の特徴について知識を深め、学習者の産出する日本語の問題点を発見し何が問題なのかについて分析できるようになり、談話教育について考えることができるようになることにある。	
目 考 職 に 関 する 科	教職入門	教師のあり方について、多様な視点から捉える。教師に必要な資質・能力、教育現場の現状、教育基本法や学習指導要領の改訂についての理解を深める。そのため、教職の意義および教師の役割について考察する。また、教員の職務内容として、学習指導、生徒指導、教育相談、進路相談、学級経営、研修、サービスおよび身分保障等を理解する。進路選択に資する各種の機会の提供を行い、教職志望の意志や教師としての資質を確認する。なお、教育現場の現状については、調査レポートの課題を出す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	学校と教育の歴史	<p>先ず「教育の理念」について考える。続いて、西洋の古代ギリシア・ローマ時代から現代、及び、日本の近世から現代に至る教育の歴史・教育思想の歴史について講述する（西洋についてはドイツ教育史を中心とする）。最後に、教育において何が「時代によって変わるもの」であり、何が「時代を超えて変わらぬもの」なのかについて考える。授業では、各時代の子どもたちや教育に関する写真や図像資料、ビデオ映像などをスクリーンに映し出し、できるだけビジュアルに理解できるように話を進めていく。</p>	
	教育制度論	<p>最近の教育改革の動向を紹介し、諸君の関心のあるところを中心に、その理解を深める。主に、これから予定されるゆとり教育後の最初の学習指導要領の特徴と学力問題を扱う。次に、教育と教育制度の関係から始め、教育制度の主な分野である学校教育、社会教育・生涯学習の制度を概説する。同時に、教育制度の基礎となる教育関係法規の理解に進む。憲法、教育基本法、学校教育法、地方教育行政法、生涯学習振興法などを取り上げる。現在、教育関係法律の改正がほぼ終了した段階にあるので、教育法の最新の動向が、この講義によって正しく理解されるようにする。</p>	
	障害者教育論	<p>本講義では、我が国やアメリカ合衆国を中心として、障害児者教育の歴史、立法、行政制度、特色、教育内容、教師教育、テクノロジーの利用などの歴史的な経過や理論的根拠などを考察する。さらに、情報化社会における障害者の学習や余暇、遠隔での学習や在宅での就労におけるネットワークの活用などを実習をとおして学び、新しい特別支援教育の在り方と展望を考える。</p>	
	教育課程論	<p>教育課程は、学習者に獲得が期待される力や知識・技能とそのための教育計画である。教育課程は、学校が編成することを基本としているが、国家レベルのものもあれば、教師個人のレベルまでである。各レベルの区別と関連、教育課程編成の考え方、ここの教師が教育課程を編成し、それらを実践を含んで評価できるようにするための基本的知見と技法を講義する。</p>	
	音楽科教育指導法A	<p>中学校と高等学校の学習指導要領を理解し、音楽科教員として必要な資質の基礎を培う。さらに、学習指導要領を深く理解するために、音楽科教育の歴史と音楽教育の理論、音楽科教授法の基礎を学ぶ。また、音楽科教育の内容をなす「表現」（歌唱・器楽・創作）と「鑑賞」をバランスよく配当する年間指導計画の作成方法、1時間の授業の展開を構想する学習指導案の書き方、指示・発問・板書など授業における具体的技術を学ぶ。学習指導案を作成し模擬授業を行い実践的指導力を身に付ける。</p>	
	音楽科教育指導法B	<p>音楽科教育のうち「表現」の領域、とくに歌唱と作曲に焦点を当てる。担当教員による模擬授業を生徒役で受ける経験を基礎に、すぐれた実践の分析と批評を通して音楽科授業を把握する枠組み（①授業の目標、②教材、③授業案、④授業における教師と生徒のコミュニケーション、⑤授業の評価）を形成する。ディスカッションを通して授業案の細部を検討するために、小グループごとに与えられた授業の目標にそった学習指導案をつくる。模擬授業とその批評を通して授業を分析的に見る視点を培う。</p>	
	音楽科教育指導法C	<p>2013年度に完全実施される新学習指導要領の改訂部分に焦点を当てる。新学習指導要領の特質を、我が国の音楽科教育の歴史の中に位置づけ、また諸外国の音楽科教育を紹介しながら学ぶ。ことに、目標の中に含まれた「音楽文化についての理解を深める」という規定、「共通事項」の設置、歌唱共通教材の意義、伝統的な歌唱と和楽器の教材としての意味を説明する。並行して、「赤とんぼ」など歌唱共通教材を分析し歌唱し、授業案を作成して模擬授業を行う。</p>	
	道徳教育の理論と方法	<p>日本や諸外国の道徳教育の歴史、現状、動向を概観した上で、「道徳の本質」について考える。さらに、子どもに「人間としての生き方についての自覚を深め」させ、その本来の「生きる力」をよみがえらせる方法について、学習指導要領を参考にし、種々の具体例に即しつつ考える。また、モラルジレンマを扱ったビデオ教材を視聴した後、各自道徳授業の学習指導案を作成・提出する。その中から代表者3名に模擬授業を実施してもらい、その授業及び指導案について相互にコメントを述べあうことにより、出席者各自が道徳の授業について具体的なイメージを持つことができるようにする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	特別活動の指導法	本講義において、学生は運動会、遠足、児童・生徒会活動など特別活動の歴史的展開と教育課程における意味および戦後学習指導要領における特別活動の位置を学習し、特別活動の歴史的展開に関する知識を習得する。そして、小学校、中学校、高等学校における特別活動の具体的な実践展開を分析的に探求することによって、特別活動の教育課程設計と具体的な授業計画の基礎的知識を習得し、指導法の1つとして授業計画を作成する。第3に、特別活動の指導法のための子ども理解、特別活動の有する人間形成の意味を学習し、教育学の視点から特別活動の指導法の基礎理論を学習する。	
	教育方法の理論と実践	教育内容・教材・教授行為・学習者という4つの次元を授業づくりの基本的なパラダイムとし、具体的な授業事例に即して、授業づくりの方法を講義する。学生諸君に期待することは、講義を記憶しようとせず、私の講義を素材に自分の頭で授業というものを考えるようにしてほしい。毎時間、コメント・カードを配布する。講義に対する意見や感想を率直に記してほしい。次の授業で私が「コメントのコメント」を行うが、これは講義の最重要の内容と位置づける。	
	教育の方法と技術（情報機器及び教材の活用を含む）	教育の情報化に対応した授業を実践するための資質・能力を討論や指導案作成等を通じて身につける。また個人やグループで課題に取り組む際にインターネットに接続されたコンピュータ（ICT（Information & Communication Technology））を1人1台使用し実際にインターネットでさまざまな情報収集を行い、その検討を行うことで情報批判力を養う。同時にICTを有効に活用するためのスキルも身につける。	
	生徒指導の理論と方法	生徒指導ならびに進路指導とはどのような教育活動で、教育課程上どのような位置づけに（あるいは意味が）あるのかを学ぶ。生徒指導とは「人格の形成を目的とし、学校教育のすべての機会、すべての教師によって行われる統合的な指導・援助であり、教育課程に基づく指導と相互に補完し合う性格をもつ」ものである。本講義では、講義者の教育経験を含め、できるだけ事例に触れ、生徒指導ならびに進路指導の現状とその可能性・限界を学ぶ。	
	教育相談	学校における子どものこころの問題への対処としてスクールカウンセラー制度が本格的に導入されてきた。しかし、依然として教師が子どものこころの問題に対して果たす役割は少なくない。本講義では教師が教育相談を行う際に理解しておくことよい事柄を学ぶことを目的とし、「学校における教育相談の概要」「問題行動の理解と対応」「学級経営に生かすカウンセリング技法」の3つの柱を軸に進めていく。また、受講生の数によっては講義の中で実習・討論等も取り入れていきたいと考えている。なお、教職専門科目を兼ねるため、内容は主に中・高の教員免許状取得希望者を対象として構成している。	
	教育実習A	「教育実習A」は、事前指導・実習・事後指導からなる3年次開講の3単位科目である。大学でおこなう「事前・事後指導」は3単位のうちの1単位分に当たる。「事前・事後指導」によって、実習生が実習にスムーズに入り、そこで充実した実習をし、その振り返りを通して多くのことが修得できるようにする。教育実習では、教科や特別活動、総合的な学習の時間（中学校の場合はさらに道徳の時間）の指導を行う。教科の指導に関しては、授業観察・参加、授業担当ののち、研究授業を実施する。	
	教育実習B	「教育実習B」は、事前指導・実習・事後指導からなる4年次開講の3単位科目である。大学でおこなう「事前・事後指導」は3単位のうちの1単位分に当たる。「事前・事後指導」によって、実習生が実習にスムーズに入り、そこで充実した実習をし、その振り返りを通して多くのことが修得できるようにする。教育実習では、教科や特別活動、総合的な学習の時間（中学校の場合はさらに道徳の時間）の指導を行う。教科の指導に関しては、授業観察・参加、授業担当ののち、研究授業を実施する。	
	教育実習C	「教育実習C」は、事前指導・実習・事後指導からなる4年次開講の5単位科目である。大学でおこなう「事前・事後指導」は5単位のうちの1単位分に当たる。「事前・事後指導」によって、実習生が実習にスムーズに入り、そこで充実した実習をし、その振り返りを通して多くのことが修得できるようにする。教育実習では、教科や特別活動、総合的な学習の時間（中学校の場合はさらに道徳の時間）の指導を行う。教科の指導に関しては、授業観察・参加、授業担当ののち、研究授業を実施する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	教職実践演習（中高）	<p>教員として必要な資質・能力を、講義、演習、課題（教育現場の調査等）の中で養成することをめざす。学内で学んできたこと学外での教育実習等で学んだことを基に、主体的に自分の資質・能力をさらに向上させていけるよう、自己を振り返えらせたり、学生同士で議論させたりする場を複数回設定する。意見の発表やロールプレイ、模擬授業等を行い、その都度、学生間の相互評価と指導者からの評価の両方を行って指導する。また、特色ある教育活動や学校が直面している問題等を取り上げ、それを調査し、考察する課題を課す。</p>	